女鑑

明治三十一年八月五日發兌

第百六十二號

東京國光社

女鑑第百六拾二號

目録

辨内侍



夏期休業

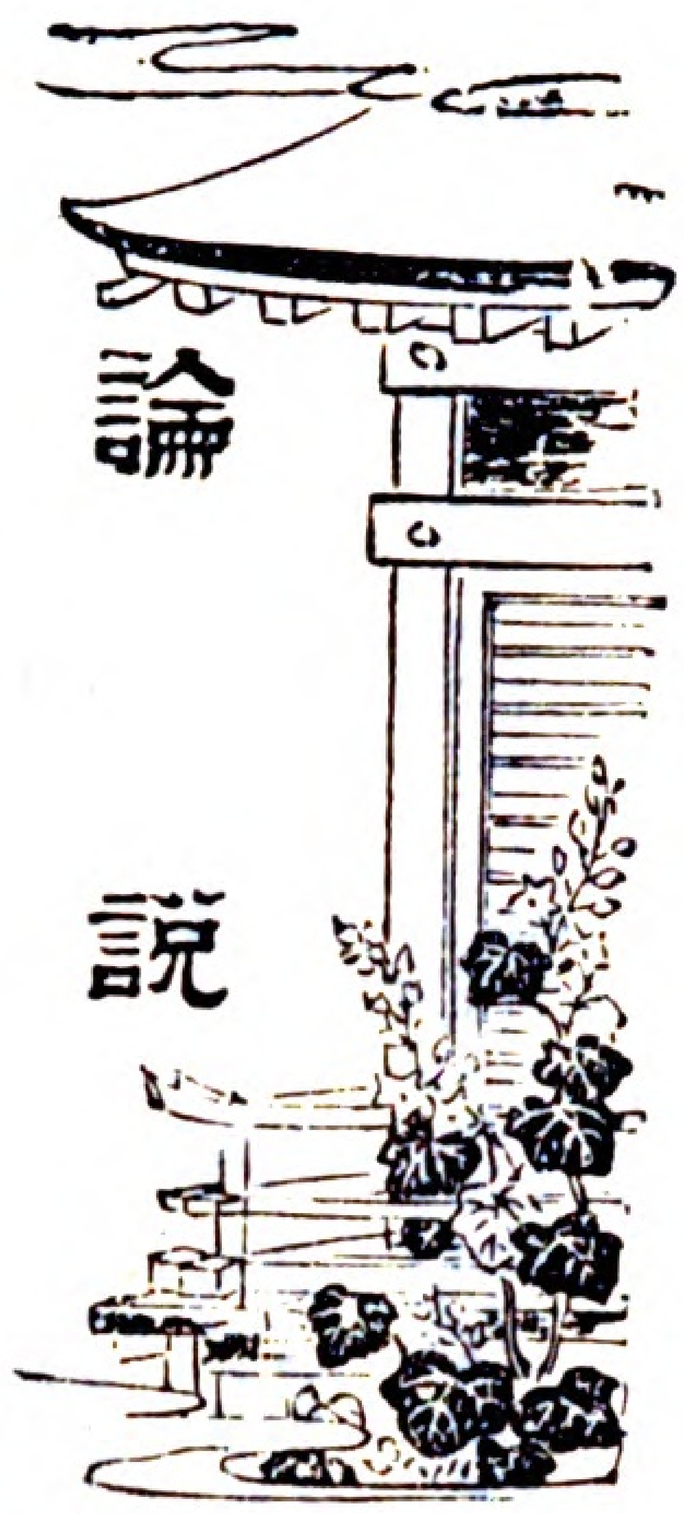
夏期休業の時は來りぬ。もの學ぶ若き身に樂しき夏期休業の時は來りぬ。此の間、山高く水淸きわたりに、のどかなるすまひして、しばし心のわづらひをあらひさるも樂しかるべく、または、風あたゝかに波やさしき海邊に遊びて、おぼつかなき身を、すこやかに養ふも樂しかるべし。殊には、綠の木蔭、ふく風凉しき家庭にまとゐして、親子同胞むつまじく四方やまの物語、語り興ずるはいと樂しかるべし。かゝるかたより見なば、げに〳〵夏期の休暇ばかり樂しく嬉しき時はあらじ。さはいへど、まなこをかへして、他のかたざまより見なば、また、いと危く恐ろしきも、此の時なめり。天地を燒くばかりの暑さは、絶えず此の生ける身をそこねむとし、すさまじき惡氣は、ともすれば此の生ける身をわづらはしめて、あたら命を

奪はむとす。一年四時の中にて、殊にわずらはしきは、實に夏なり。されば、先づつとめて飲食をつゝしみ、起臥を正しうし、身邊を淸うして、かゝるわづらひを防ぎて、わが身を守らざるべからず、惡しき飲食物は、もとよりさけざるべからず、よきをも謹まざるべからず。甘しとも節せざるべからず。起臥を正しうして、寢ぬべき時を定めて、必ずいね、いぬべき所にいぬべきやうにしていね、起くべき時を定めて、必ず起くるやうにせざるべからず。いとまあるにまかせて、時を定めずみだりなる起臥をし、暑きがまゝに、所ゑらばす寢ぬるが如き事は、自ら固く戒めざるべからず。かゝらむこところ、惡しき氣に觸れやすければなれ。また、身にまとふ衣服は常に洗ひきよめ、身を置く床のべも常に掃ひきよめ、身邊を淸潔にせざるべからず。しからざれば、不潔は、あやしき病魔を導く道となればなり。

かばかりの事は、誰れもよく知れり。然れども、凡俗の身は、我が欲に誘はれやすきものにて、惡しきと知りつゝ、欲するにまかせて飲食し、欲するにまかせて、起臥し、欲するにまかせて、不精に暮らすもの多し。故に、殊更に、心をこゝに用

ひて、この三事をつゝしまざるべからずといふなり。
また、夏期休業に恐るべき毒は、もの學ぶ若き身をして、自墮落ならしむる事なり
休暇といふにまかせて、全く我が業をよそにして、ねむきがまゝにいね、はしきが
まゝに振舞ひ、思ふがまゝに遊び戲れのみして、身を自墮落にもちくづす事なり。
さらぬだに、人は苦しきを厭ふ癖あるに、かゝる安佚自墮落なる風になるゝ時は、
夏期休業はてゝ、再び業につかむとするに、さばかり苦しくもあらぬ業の、いと苦
しくのみ思はれて、其の業に進みゆくべき道を踏みとげず、踏みあやまるに到る如き
事あり。これ、いと愚なる事なれど、世のためしに、わが屢々きゝたる所なり。大
方の孃たちも、きゝ知りてならむ。つゝしまざるべからずやは。
休暇なれば、遊ぶもよし。然れども、適度の時間を定めて、日毎に我が學びの道を
踏み進まざるからず、また、父母の膝下にありて、家事を助け家業を助くるも、な
かなかに樂しきつとめならむ。かくて後に、暑に觸れざらむやう、身の健ならんや
うに、遊びも樂しみもすべきにこそ。

かくして、飲食をつゝしみ、起臥を正しうし、身邊を清うし、自墮落に傾かざらむやうに心がけ、而して、高山幽谷の邊りにも樂しむべし。風あたゝかに波やさしき海邊にも遊ぶべし。綠蔭すゞしき家庭にも語り興ずべし。さすれば、夏期休業はかり、もの學ぶ若に身に樂しく嬉しき日はあらじ。孃たち、其の心して、此の夏期休業をたのしく暮らしたまひてや。



割烹と禮節と

第一編　小笠原流といふ禮節を論ず

石井泰次郎

起居、進退、物品取扱、冠婚の式等、凡て家内の事を旨として敎習せる禮節としいへば、直ちに小笠原を以て其の流名に冠らせて、是ぞ本邦禮節の最も正しき敎なると、誰も彼

も思ひなして、其の誤れる由を毫も知らざるが如し。是實に舊幕時代の謬傳誤解に基する所にして、襲來の久しき、遂に其の正流を知らざるに至りしなり。而して、今日の所謂禮法を敎ふるもの、多くは此の誤傳を悟らず。諸禮の法には小笠原、伊勢、細川、吉良等などいひて、各其の司る處の異なるをも解せず。之を敎ふるに當りては、實用的に應用するをも知らず。其の著述をなすや、二百年より三十年以前に渡りて、好事者の手に成れるものを引用し、或は其の儘に用ゐて、明治新撰禮式、明治普通禮式などいへるは、かたはらいたきことどもなり。

かくの如くして、誤解の極點は此に止まらず、なほ近世の陰陽五行説と、諸書拔出亂雜敎科書とを以て一家の傳書となし、弓馬の家なる小笠原氏を流名にぬすみ來りて之に冠らし、本邦人の眞心を失ひたる虚飾の禮節を傳ふるに至りしは、豈口をしき極みならずや。抑〻舊幕時代の謬傳誤解とは何ぞや、

こは次に抄出せる家系と舊記とを有せる弓馬の家柄なる小笠原家の家臣某より、水島卜也といふ人、弓馬の傳を受けて、猶之に自ら諸雜事を取集めたり。云はゞ水島流ともいふべきを、皆小笠原の傳の如くなして、小笠原流と稱せしより、此の禮節、遂に小笠原家の傳の如くなりて、世間皆之を傳へたり。斯くて禮節家には其の家格正しき伊勢家ある

を知らざるに至り、小笠原流諸禮調法記などいへる書を誠に正しきものと思ひ誤りたるをいふなり。

この誤解の傳來は遂に一般に行き渉りて、現今禮節を講習する者も、小笠原流を以て、本邦禮節の正しき教を傳へたるものとなし、他に眞正の禮節家伊勢流の傳へと、上古よりの傳へとあるを尋ねざるに至れり。

伊勢流の傳とは、小笠原家に弓馬の傳あるが如く、禮節の傳をもて、世に聞えたる、眞正なる禮節の傳ある流儀をいふなり。詳しきことは後にいはん。

上古よりの傳とは、近く武家に用ゐられたりし眞正禮節家伊勢流の傳の元にして、公家に用ゐられたりし禮節、即ち世上に自然に用られたる本邦固有の傳をいふなり。此も後にいふべし。

抑、小笠原家は、左に抄出せる如く、弓馬の名聲家也。

伊勢國司北畠家記(諸書當用抄)に

公方家天下しろしめさるゝ時、諸士家の事忘れむ儀を歎き思し召て、細川典厩に被仰付、右大將家の禮を以て、弓馬の儀は小笠原に被仰付者也。依之天下之士各當家を信用せしむる者也。

○小笠原系圖畧

義光 新羅三郎

義清 武田冠者武田ノ祖刑部三郎出家四十九歳配流甲斐國市河庄

清光 號逸見冠者黒源太逸見之祖

遠光 小笠原秋山等祖信濃守加賀美二郎文治元八十四源氏六人受領之內

長清 承久亂後賜阿波守護職七ヶ國管領小笠原加賀美次郎左京太夫信濃守正四位下

長經 小笠原太郎彈正少弼侍從法名長禪

長忠 小笠原源二郎信濃守

長政 孫二郎信濃守伴野出羽守被誅之後小笠原惣領職管領

長氏 信濃守彥二郎大膳大夫

宗長 孫二郎信濃守法名順長號扇谷

貞宗 建武武者所信濃守護職彥五郎信濃守從五位下號開善寺月山法名正宗

貞長 彥二郎

長高 六郎二郎美濃守法名宗班

氏長 又六備前守民部少輔法名道隱

滿長 二郎又六民部少輔備前守應永廿七年十一月十四日死法名興元

持長 又六民部少輔備前守道號心源法名淨元長祿二年閏正月十六日死

持房 二次郎

敎長 彌六刑部大夫美濃守法名宗元

政廣 彌六刑部大輔法名宗霽

持清 又六民部少輔備前守法名大中寬正年六年十二月十六日死

元長 イニ八郎 六郎兵部少輔播磨守法名宗長文龜二年死

政清　又六民部少輔文明九年八月廿一日千疋御犬之時被任備前守法名宗信明應六年死

尚清　民部少輔備前守文龜二年死

植盛　又六民部少輔備前守

秀清　又六民部少輔

元清　八郎文明九年八月廿一日千疋御犬之時被任刑部少輔法名宗樹

元宗　六郎刑部少輔

（按政廣は數長の息なるべし系の誤か）

○小笠原流舊記

一 法量物

應永廿七年八月廿八日小笠原備前守持長 法名浄光 同備前守滿長 法名興元 連名判有之、又一本文安三年七月廿八日浄元判

一 射御持長記

應永廿九年三月一日小笠原民部少輔持長同備前入道興元奥書有之、又文明十年三月　日細川右馬頭政國多賀豐後守高忠小笠原兵部少輔元長連名有之

一 射御拾遺抄

應永廿九年三月五日小笠原備前守持長同興元連名有之永正二年三月三日澁谷帶刀左衛門義隆傳來

一 高忠聞書

寛正五年十一月　日豐後守高忠判又明應二年賢家判永正十七年上原豐前守高家判右兩人奥書有之

一 弓矢條々

多賀豐後守高忠自筆之聞書也云々法印判有之

一出陳聞書 應永廿九年三月五日備前守持長入道與元判又明應四年六月書之上原豐前守ノ神賢家判永正元年六月朔日高家判

一闘的聞書

記者不知小笠原備前守持長(法名心源)同備前守持清(法名大中)同備前守政清同美濃守政康同刑部少輔元清同兵部少輔元長等の說を集めたり

一狩詞記

寛正五年十一月　日多賀豐後守高忠判とあり

一扇鏡

年號不記小笠原相傳の聞書と記て宗信と名有之宗信は小笠原備前守政清也

一笠懸矢沙汰之記 年號記者無之

一流鏑馬次第 永享八年持長 (以下年號作者を畧して記すべし)

一流鏑馬日記 宗長

一流鏑馬日記 尙清記

一笠懸聞書 文明十六年元長

一小笠懸由來記 年月記者不知

一射手方聞書 小笠原山城守說

一高忠聞書別記　寛正五年高忠
一騎射秘抄　尊氏公御書并に判有長高記之
一犬追物射手具足記　年號記者不知
一弓之記　光清
一射鏡　文明十年細川政國多賀高忠小笠原元長奥書有
一射手方聞書　一名弓馬聞書日記　文安四五六年山城守聞書
一矢代之記　記者不知
一弓馬聞書　元龜元年
一隨兵日記　文明十八年元長
一上賢抄　永正九年
一諸書當用抄　北畠家記
一奉射大的記　年號記者不知
一法量物異本　文安三年淨元
一諸聞書條々　年號記者不知
一弓法私書　年號記者不知

一弓法秘傳聞書 年號月日不知
一弓矢名所之記 實綠元年 持長
一遠笠懸記 年號記者不知
一闘的射手覺悟條々 年號記者不知
一步立聞書
一犬追物見鏡 明應二年
一犬追物磨鏡 寬正元年二月 高忠 元長
一犬追物鏡外 長享元年上原賢家記
一射手播副記 年月記者不知
一笠懸聞書 高忠弟子實澄 寬正項之人
一當家弓法集 長秀
一八廻日記口傳 實澄
一犬追物聞書 文明元二三四年 元長名判有
一射禮私記 元長
一犬追物聞書 永正十二年奈良元秀

一犬追物馬足 文明十年

一犬追物益鏡 寛正四年 元長

一犬追物撿見條々 應永廿五年

一犬追物眞鏡 永正五年 多賀宗悅

一多羅枝故實 年月記者不知

一康應日記 康應二年 長基

一寛正記 寛正年中記之

一犬追物政清記 文明十四年

一宗仁聞書 天文十六同十九年

一弓矢細工方聞書 永正十三年 上原高家

かくの如き家系と、舊記とを有せるによりて、弓馬の家にして、禮節の家に非ざる事を知得すべし。又左に抄出せる詞につきても、小笠原家の弓馬の家にして、禮節の家に非ざる事を證するに足る。

一騎射秘抄の巻の首の袖書に、當家用此流倍我者可用、此流尊氏御判と有り。

一笠懸聞書云 小笠原實證記 小笠原殿に、公方樣の御日記とて預り被申たるは多くもなし、射手

の日記などかれこれ二ッ三ッ有之也。其中に與元（満長）病中に心源（持長）道の大事の事三十ヶ條斗聞書をして、佛地院にかゝせて、與元の枕に於て、佛地院被申けるは、是は民**部少輔殿長持の御聞書にて候、といひて讀上られしかば、與元よくかゝせ給ひたり、相**構へて秘し給へとの給ひし、其聞書にも、公方様（義持）の御判有也。御預ある日記の内へいれらるゝ也。心源此道に肝要の事注しおきし人なりとて度々高忠被申也。

一諸書當用抄に、記請文、諸大名は檀紙。下つかたの人は杉原也。當家の儀御相傳申上る時、法住院殿（義澄）様宗信（政清）所への御内書引合に被遊候、御文躰は下のくだりあけて、上より道の義聊御聊爾被成間敷候、八幡大菩薩と被遊謹言と御留候、于今備前所持也。

かくの如く公方よりも起請文を賜りて、弓馬の道を重くせられたる事をもても、禮節家ならざるよしを明に知る事を得べし。

然るを、未だ禮節家を小笠原流と稱し、禮節書を小笠原流傳書と名づけて顧る所なく、又禮節教授をもて社會に立たんとせる者、水島の小笠原流を學びて、禮節を學び得たると思ひなせるは、論ふに足らざるなり。

○近代禮節家系統

上古より傳來せる禮節は、中古より公武の二流に分れ、次ては武家禮のみ盛りになれりしより、以來其の家と定められて、近くまでも正しく世に傳り來て、今もなほ、其のあとを幽かに殘したる伊勢家、即ち近代禮節家の正統なり。伊勢家の家系は左の如し。

桓武天皇　二代葛原親王　三代高見王　四代高望王
五代良望王　六代貞盛　七代維衡　八代正度
九代季衡　十代盛光　十一代盛行
正衡　正盛　忠盛　清盛
十二代盛長　十三代頼宗　十四代頼俊
盛經　敎經　經久
盛久　盛秀　盛信
盛綱　盛景　盛長

十五代 俊經

十六代 俊繼

賴繼

宗貞

十七代 盛繼

(上畧)爰に武藏半國の主護大坪左京亮入道道禪と云鎌倉四天王の末孫にて弓馬禮儀に至迄傳來る伊勢守貞繼師弟と成不殘傳受あり其後尊氏公御弟子に成給ふ扨大坪相談有て足利に打立給て尊氏公を奉直付而足利治部大輔殿に申也此後　勅定有て上洛是より貞繼の忠孝恩賞深故貞繼夫婦は御父御母と定給て尊氏の御父貞氏の貞の字を給はり通字とする(中畧)古の禮儀共中絶たり然るを悔給て被奉得一勅宜を處　御感有て公家出家簾中武家と四品に分て古昔の禮式御改有て書に驗し日本の法儀相定たり就夫尊氏は武家の公方に御免有御方御所將軍成給へり次に禮式の御日記公方納給へは天下に知人之無間面々家々に御日記を分ち御預け給故諸國不殘數て禮儀正にて成たり尊氏公方に御免有て後禁裏宮方に至迄奉供不成處貞繼爲御名代勤役始給へり(下畧)

十八代 貞繼

法名照禪道號友峰廣禪寺
従五位上侍従伊勢守十郎
貞繼以來代々政所職御所奉行

かく見えたる貞繼より

貞信　貞行　貞經　貞國　貞親　貞宗

貞陸　貞忠　貞孝　貞良　貞景　貞衡慶長生

貞守寬文生　貞永寶永生　貞益元祿生　貞陳享保生　貞丈享保生　貞春寶曆生

貞敎卅七代

かく傳はれるにて、伊勢の家系を知るべし。

就中、世に聞えたる卅五代貞丈翁がものせる座右書の凡例に、

一京都將軍の時代、我家の先祖代々伊勢守に任し、政所職御所奉行に補せられて、將軍家殿中の禮式作法を司とりけれど、諸家の人々殿中の禮法をど、伊勢守に問ひ習ひし也。

又小笠原家は、代々將軍弓馬の御師範として彼流を用ゐ給ひけれど、諸家の人々、弓馬の禮式をは小笠原に問ひ習ひ、伊勢守は、弓馬の禮法をは小笠原に問ひ習ひし也。

といふ事見えたるにて、禮節家の正統は伊勢家にして、弓馬の家は小笠原家なるよしを諒解すべし。

是の家の傳へならずしては、民間一概に其の敎を受べき禮節家はあらざるなり。然るを

弓馬の禮法を傳へたる小笠原家の一家の風にも非ず、又小笠原家に傳はれる伊勢家の禮節の樣にも非ざる、甚心得ざる禮節を小笠原流と稱して敎授し來れるは大なる誤なり。

（以下次號）

女德のしをり（十）

三輪田眞佐子

第八順良　女德をいふものは、常にその淵源を、女子の天禀に求めざるべからざるは、恰も水の功能を言はんとならど、水の性質に問ひ、火の功績を知らんとならど、火の性質に訴へざるべからざるが如し。故に。女子に順良の德あるべしとは、その天禀の柔和なる結果に基くものなり。世に動もすれど、自個の空想を懐きて、女子に順良を敎ふるは、男尊女卑の弊習を培養するに等しと論ふものあり。されど、おのれは、男を天に配し、女を地に擬ふごとき、あるは、男を陽となし、女を陰とする如き、あるは、男は剛なり。女は柔なりと言ふ如きは自然の順序なり。決して、尊卑の意にあらざるべし。即ち、天地相待ち、陰陽相和し、剛柔相容れてこそ萬物成生するなれ。されど、女子に順良の德あれど、おのづから男女の分定まり、人事の美を全うするを得ん、是を以て、順良の女德は、寧ろ女子の女子たる尊き要素なり。

獨り注意すべきは、順良を以て、彼の愚昧なる女子の分別なく熟考なくして、全く正邪

善惡を擇ばず唯々する如き、若しくは妓妾の甘言もて、歡心を迎ふるに汲々として、理非得失を問はず諾々するなどを指すものを誤解するなかれ。苟も文明の女子たるものは唯盲從を以て滿足すべからず。反りて順良の美德を活用して、溫言もて父母の過を補ひ、和氣以て良人の足らざるを助けざるべからず。水流は岩石にあたりて激するとかや若し女子に順良の德なくして、單に智もて內助をなさんとならば、徒に家族の怒を激せしむるに過ぎざるべし。

順良は長者に對する德たるのみに止まらず、劣者に向ひても亦必要なり。見よ、この德なき女子は、他人と親しき交際をなすを得ず、子女を懇に養育し敎訓するを得ず、將た婢僕の服從さへ得ること能はざるべし。

第九克巳　心の作用は、喜、怒、哀、樂、愛、惡、慾の七情とも言ひ、あるは、智、情意の三つとも言ふなれど、女德上必要なる硏究は、人に理心と慾心の三つ相並びて、互に爭ふものと考ふれば悟り易し。すなはち、理心はつねに人をして忠孝節義などに導かんとするめり。これに反して、欲心は私利私情を充さんとするらし。故に、今女德を高尙にせんとならば、理心を以て欲心に勝たしむるをつとめざるべからず。そを克巳となん言ふ。

先づ女子は、色欲を慎みて、身を露ばかりも汚すべからざるは更なり、つかのまもあだし心を懐くべからず、たとひ瞬間たりとも、邪念を起さば操を破りしものといふべし。この克己の工夫なくば、貞婦たること能はざるべし。

次に遊惰の欲を制すべし。人は生れし以上は、生命を保つために、職務を勤勉せざるべからず。されど、放逸に流れて身も滅び家も失ふ例も少からざれば、人たるもの、わきて女子は、複雑なる家務を執るべきを以て、遊惰の欲を去らざるべからず。なほ、人は美食を食ひ美服を着んとの欲を免るべからざれば、女子たるものは一家の程度を慮り、親子の分、及び男女の別を考へて衣食を定むべし。これ亦、理心を以て欲心に勝たしめざるべきからず。

その他、節倹の如きも、財産を消費せんとする肉体の欲を制せざるべからず。

　　天そゝる不盡の高嶺も幾積り
　つもりし塵の行末ならずや



史談

辨内侍

鹽井ふく子

ともすれど外つ國を慕ひ、外つ國ぶりを尊ぶは我が國人の弊、されど、今の世にはたゞ横さまの文字をよみつ、つゞりつするを第一の學びの道として日の本のもとの敎はいと、くらく、ゲーテ、シルレルなどの詩をのみめではやして、わが敷しまの大和の國の歌の聖と稱されし赤人が田子の浦の歌もしろ妙やくろ妙やともわかず、たゞ正月の遊び草とのみ心得、近江の海夕なみ千鳥のなく音にも古へを忍ぶんともせず。外つ國さへうらやむと云ふみどりの黒髪をもわざと赤くちゞらせ、高尙優美の高わげをもいとひて、輕束無味のおだし髪をめで、花は薔薇、人は異人と云はむかり、凡て外つ國ぶりを慕ふ弊、古來よりためしいと多く、王仁、千字文を献じてより、たゞもろこしを尊び、からぶりを敬ひまねび、崑崙山ならでは美玉なく、漢土ならでは聖賢をらぬやう心得て、東方の君子國の名聲を自られとしぬるぞ口惜しき。そのかみ、後堀川　後嵯峨の兩帝に仕へまつりて辨内侍と聞えたるは、右京の太夫藤原信實の女にて、その姉を少辨内侍といへり。父信實は和歌を巧みにして數多の撰集にかず入り、秋風抄の序にも「前右京大夫信實朝臣は其さまをかしきを事として、心に情け深し、さむさを戀のなどよめるまでもたとふるに賣炭の翁の雪の曉、車をかけしに牛くるしみて市のそとにやすめり官の使來りて半匹の紅紗をかけしが如し。

物をのみさもあれもはする先の世の
　報やあきのゆふべなるらん

數ならで思ふ心は道もなし

誰がなさけにか身をうれへまし

などやう云へり。かやうの人の女なれど、姉妹とも又和歌をよくし、其の名世に高し。殊に妹の辨内侍は人となり敏達にして、賢才あり。曾て後堀川の帝の殿上の障子に漢士の聖賢の像をものさせ給ひけり。これ唐土のたかどのに聖賢の像を畫きしためしにかたどられたるなり、こを以て見るも、古へ、漢士を尊びしためしあきらかなるべし。一日辨内侍これを見ていたく感じ、歎息し、人に語りけるやう、この殿上の障子には漢士の聖人賢人を並べものしたるは誠にかしこけれど、もし我が國の忠臣孝子を撰びて此の如く殿壁に圖し、以てわが臣民を勸奬せしめど、其功いよ〳〵大なるべきに、あはれ何れの代か之を擇ぶの事あらむとつく〴〵と思ひ入りけるとなり。

あはれ清少納言が雪のあした、すだれをあげしよりはかしこさゝへ加はり、此言やがて聽聞に達し、御感あらせ給ひ、大に之を嘉賞し、ために位を賜はらむとせしに、内侍は固く辭みて受け奉らず、たゞ賢、たゞ明、謹みて身ををさめ、後嵯峨の帝に仕次し奉り、内を整へ、聖慮を輔け奉りぬ。年老いて後宮使を辭し仰木の邑に幽棲し、老いをたのしみけるが、龜山の帝其和歌に名あるを以て、星月の歌合に御題を賜ひけるに、内侍一首を詠進し奉りぬ。

秋きても露わく袖のせどけれど
七夕つめに何をかさまし

才詠げにいちじるく、姉の少辨内侍の詠と共に撰集にも多く入りて、また歌合にも出でゝめでたきが多きぞかし。今その歌合せの勝負の大略、且つ判詞をも此處にものし、合せて諸孃が歌の栞となさむと思ふなり。

院御歌合せ判者前權大納言藤原爲家卿にて、まづ

早春霞

左　　兵部卿源朝臣有教

きのふまで雪げにくもる天つ空
あけぼのかけて早かすみける

右 勝　　　　辨内侍

天の原雪げの空のかすまずむ
　立ける春もしらやは分まじ

兩方雪げの空、何れさだかに見しわかれ侍らぬを、右の霞は春たしかに歌はれて、立ちまさり侍るにや

山花

左　　　　兵部卿有敎

尋ねいる花より花に日數へて
　山路の末に幾夜とまりぬ

右 勝　　　　辨内侍

心のみ行かへりつゝ山高み
　をられぬ花ぞ移ひぬべき

花より花に日數へて、姿、詞てひねがふべきやうには侍らぬ上に、山路の末も覺束なくこそ侍れ、心の行きてと云へるをかしくとりなされて侍れど、折られぬ花に心うつろひ侍りぬ又以右爲勝

五月時鳥

左 持　　　　兵部卿有敎

五月雨の空よりわかぬ時鳥
　卯月のころにまち習ひつゝ

右　　　　辨内侍

まてと云ふになかずもあらば時鳥
　何を五月と思ひ分かまし

左右詞多く聞してよろしき姿には侍るを、その心たしかに思ひわきがたく侍るを、左題五月本意なく侍るにやまた持とすべし。

初秋風

左　　　　兵部卿有敎

覺束な秋をつげよと誰れ植ゑて
　けさは身にしむ荻の上風

右 勝　　　　辨内侍

來る秋もだゝわがためと思ひつゝ
　きけぞや風の身にはしむらむ

左はたゞ秋をつげよとうゑけむと覺束なく右はただ我が爲と思ひてきゝわたる心何れも身にしむとは見ゐ侍れど荻の上風は聞きふりたる方なれど、妖艶の姿につきて右を以て勝となす。

海邊月

左　　兵部卿有敎

和田の原八重の汐路に雲消ゐて
　月すみのぼる須磨の浦風

右 勝　　辨内侍

もしほ汲夜半の小衣あはれにぞ
　海士のしわざは月やどしける

左景氣思ひやられて見たる心地侍るべし右さきにありがたく見ゐ侍りつる海士のしわざ同じことと優美にして是迄かたひき侍りぬる偏頗にや侍らん。

野外雪

左　　兵部卿有敎

うつもるゝ枯野の薄ふみ分けて
　猶ゆく末も雪のふる道

右 勝　　辨内侍

本かしはもとより埋む雪の上に
　ふるから小野の道や絶なむ

埋るゝ枯野ふみわけてなほゆく末も如何なるぞ侍るべきなどゆかしく侍るを雪のふる道たゞ同じことにや侍りけり無念にや侍るべき。もとかしはもとより埋むとて白雪のふるから小野と侍るは上下あひ叶ひて元の心見ゐ捨てがたく侍るにこそ。右勝つべし。

忍久戀

左 持　　兵部卿有敎

我ならぬ忍ぶの山の松の葉も
　年へて色に出るものかは

右　　辨内侍

思ふこといかで心のうちにのみ
　つもる月日を知る人のなき

左我ならぬと云ひはじむるより、出るものかはと云へるまでいづくこそと見ゆる所なく、詞つよくよみ出して侍るめり。右あやにくに力なく優なる姿とりぐ\に侍れどよき持とこそ見ね侍れ。

逢不逢戀

左 持　　兵部卿有敦

たのめれきし我身やあらぬとむかりを
　今一度はいかでとはまし

右　　辨内侍

またねしをかはるつらさと思ふまに
　やがてこぬ夜のつもりはてぬる

左は道雅卿思ひ絶ねなんの心優に侍れども思ひがたく侍るにや。右やがてもちりのと云へるに通ひて、共に心詞深きをかず、同じほどにて持となす。

旅宿嵐

左 勝　　兵部卿有敦

片しきて幾夜になりぬ旅衣
　袖になれぬる峯の嵐を

右　　辨内侍

岩の上の嵐の風はいとさむし
　旅ねの衣かす人もがな

右ふるき歌詞は同句にならびて珍らしき心聞ねずや侍らん。左旅ねの袖をむまきれきてかたしくものに、峯のあらしをせられ侍る道理たがひてや侍らん。但し此番左思ひすくなく侍れど是むかりは心の負に申なすべくにや侍らむ。

社頭祝

左　　兵部卿有敦

住吉のみねの松が枝君が代に
　幾度花と咲きかはるらむ

右 勝　　辨内侍

我見ても君ぞ數へんすみよしの
　松は誠に千代もへぬべし

左ことわりに侍るを此心玉椿にてれもかげ侍るに

や右そのがらよろしく侍れど勝となす。十題かく大方勝も一番にては左の人拙く、判者の心にもよるべしと思ぼすも他處口惜しき心に亡䝉供歌合今一番をものし侍るなり。

初秋露

左　持　　左近衞大將藤原朝臣定雅

うつろはぬ千代の初秋あらはれて
　　松の上葉にかゝるしら露

右　　辨内侍

おく露は草葉の上と思ひしに
　　袖さへぬれて秋は來にけり

右歌ことによろしきかし人々申し侍りしを先の竹今の松何れも祝色かはるべきにあらずと申して又持となす。

山家の秋風

左　勝　　定雅

吹く風もとふにつらさのまさる哉
　　なぐさめかぬる秋の山里

右　　辨内侍

山里の夜半のねざめはさならでも
　　うきをも知るや峯のあき風

山里何れも景氣思ひやられて優に侍るを、さならでもと云へるや、少し心ゆかぬやうにはべるべきと申出す人侍りて負け侍りにき。

朝草花

左　持　　定雅

見わたせど秋の野原の朝日かげ
　　千草のはなの色ぞうつろふ

右　　辨内侍

朝ねがみこぼれていとゞみだるとも
　　こはぎが露は折りてかざさむ

野原の朝日かげきら／＼しく見え侍りしを朝日かげこぼれてとつゞけたるいかゞ申人侍りしかども殊にこぼれかゝると申ならへれど面かげすてがた

しと各申て持となす。

暮山鹿

左　　　　　定　　雅

秋ざれぞ山の尾上に聲たて
　鹿も夕べのものや悲しき

右勝　　　　辨　内　侍

秋はいとゞさびしき山の夕べにも
　すめぞすむとや鹿のなくらむ

兩首いづれもよろしく聞え侍りしを鹿も夕べの物やと云へるや少し心ゆかぬやうに侍と申人侍りて負侍りき。

霧間雁

左　　　　　定　　雅

久方のあまつみ空にたちのぼる
　霧わけわびて雁ぞなくなる

右、勝　　　辨　内　侍

立わたるうす霧かくれ見えわかで
　くれども遠き秋の雁がね

霧分けわびては次第に云ひつゞけたるやうにて心も詞も如何と見え侍るにや、くれども遠きはめづらしきさまなりとて勝となす。

名所の月

左持　　　　定　　雅

いにしへのふるき都を三笠山
　思ひ出でつゝ月やすむらむ

右　　　　　辨　内　侍

またもあることしの秋の長月は
　月も二見の浦にこそ見め

あけぬ二見の浦も覺束なき所なくさらぬ三笠の山も只ゆゑある姿に侍れぞ持のよし定め申。

田家月

左　　　　　定　　雅

秋の田にまだらにさせるしづか庵
　もりくる月の影にまかせて

右 勝　辨内侍

秋の田の庵もるよはのあくるまは
　如何に露けき月とかはしる

賤が庵まぞらなるよりはあくるまひさしき月は古き面影もすてがたくやとて勝侍りき。

行路紅葉

左　定雅

をのづからをちこち人の立ちどまる
　關とぞ見ゆる秋のもみぢぞ

右 勝　辨内侍

かへるさに色やまさると時雨つる
　杜の紅葉はまたすぎて見む

又すぎて見んと云ふ心ある樣に侍る上に關と見るまでに人とゞまるほどならぞれのづからやことたがひ侍らむとて、かへるの紅葉色まさり侍りき。

寄煙忍戀

左 持　定雅

忍びわびてきえなん後の煙だに
　思ひありきと人に志らすな

右　辨内侍

あぢきなくなどしたもえと成にけん
　ふじの煙も空にてろたて

思ひありきと人に知らすなと侍る忍ぶこゝろ深く優に侍るもなどしたもえと云へるすてがたしとてことによろしき持と定めらる。

寄月恨戀

左　定雅

まだよひとなぐさめてこそまたれつれ
　更けゆく月にうさぞまされる

右 勝　辨内侍

秋の夜の月にも袖はぬるれども
　つらき人にぞねはながれける

ふけゆく月にうさまされると侍るよりはつらき人にぞねぞなかれけるはいうにやとて勝となす。

かやうに番ひかへても負けしはたゞ一度、父の信實も、姉の少辨内侍も、有名の歌人俊成卿の女も、かくは勝ぬものをと思ふも、辨内侍をかしこがる偏頗心にやと、我も此處にひき侍るめり。此外

袖にしも月ゆゑとまる俤の
　何と身にしむ涙なるらむ

などのうたは、實におもひ入りも情も深くくまれ侍りき。なほおもしろき歌かずあれど、あまりに紙を費せど、かうむかりになしおきぬ。げに才も能もあり。且忠に、且賢なる女子とや云はまし。後の學問なさんものは、かくの如く心を明かになしかうわたり給はんやうとてかくなむ。

左津女

山本正周

左津女は、もと、丹波の人、某が女なり。後に、故ありて、京都の大宮八條に移り住めり。年十四にして、父を喪ひ、母と共にわびしく日を送りけるが、後桂村といふ處のとある農家に十年の年期奉公に入れり。これより後は、主家を大事と、骨身を惜まずつとめつゝ、すこしも私の心なければ、主家にても、大に之を愛し、其の家の娘が、東寺のほとりなる、或る農家へ嫁ぎける時、左津を侍女として遣はしけり。左津は、之に從ひ行きて、七年の永き月日を一日の如く神妙にかしづきて歸れり。是より後は、主の暇を得て、再家に歸り、母を養ひて怠らず。常に、粗衣を服し、粗食を食ひて足れりとし、婚嫁を勸むる人あれど、夫ありては、孝道に懈りやすしとて、之を辭し、母が八十歳にて死せし日まで、孝養をこたりなかりき。此の時左津は、年すでに、五十歳になりしかども、もとより、寡居せしことゝて、子なければ、人の勸むるにまかせ老後の便りにとて、三歳になれる女兒をもらひ受けて養育し、その子の年、稍く長ずるに及びては、手習、裁縫の道をも教へんとて、身は、再び人の婢となりて



其の給銀にて、費用を辨じけり。たまたま人の憐みて、物など與ふることあれど、必ず、之が報酬をせずといふことなし、而かも、左津は、其のさが、淳直にして言を食まず、人を毀らず、人に交るに、表裏なかりしかど、誰とて、歎稱せぬものもなかりき。その奇特なる事、時の奉行に聞えければ、奉行は之を賞せんとしけるを、左津、いへらく、人の親に事へて、孝を盡すは通常の事なれど、褒むべきにもあらず、ましてわれは貧しかりし故に、思ふことの十に一だも、親に盡し得ざりしものを、いかで、御褒美を受くべきぞ、といひて、强ひなど其の土地をも去らんとするどかりなりけれど、奉行も、已を得ず、その意に任せたりしといふ。

折形

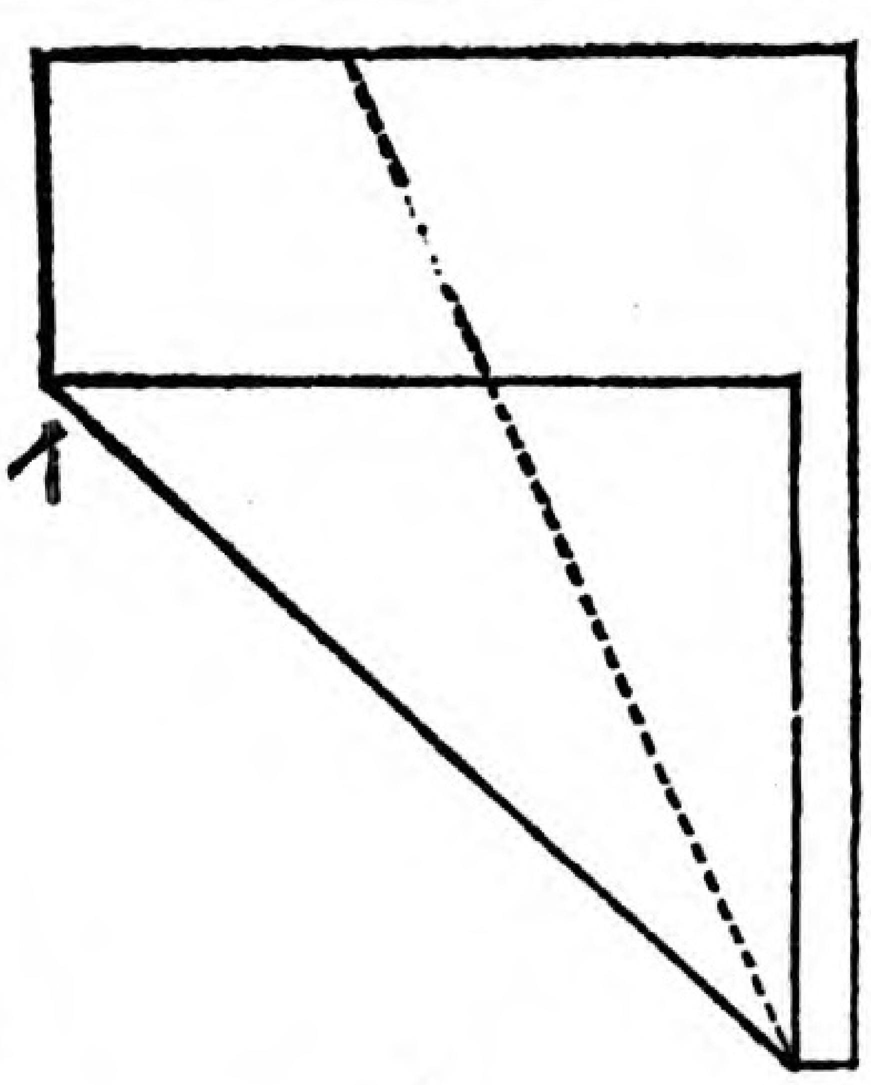
裏典の法　有住齊

裏典の法とは、折形に用ゐる紙の寸方のとり方をいふなり。之の法に依りて先づ紙を斷ちて用ゐざれど、折形の恰好みにくし。是は、本誌第四十八、及第百三十三號にも掲げたれど、何れも詳しからず、會得し難からんと思へど復々爰に示す。其他折形につきての心得は、四十八號及百三十三號につきて見らるべし。

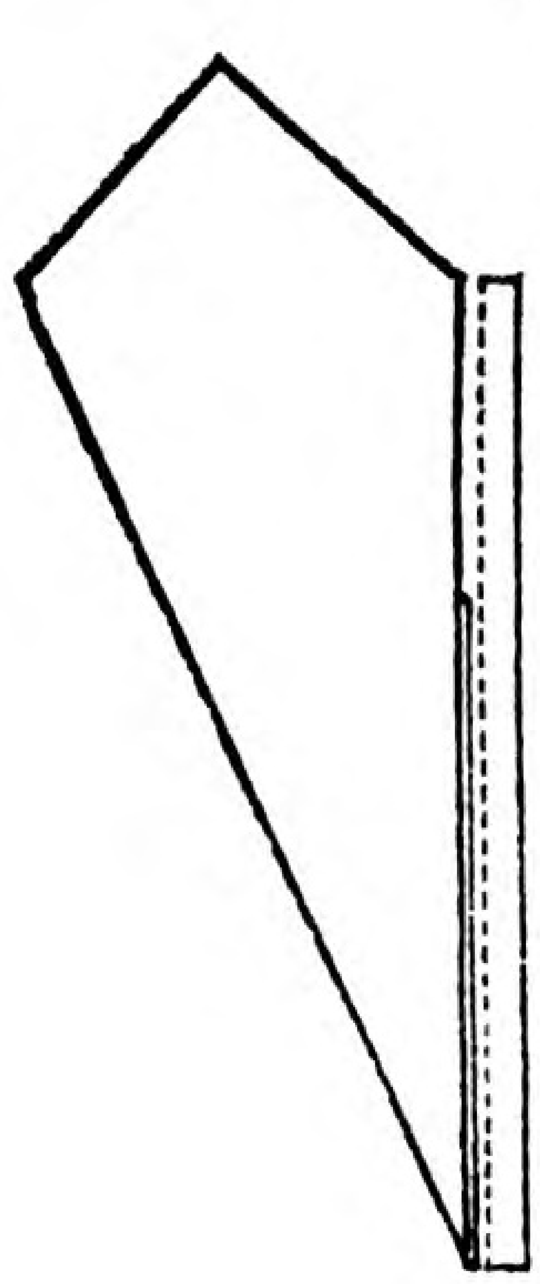
こゝにはかりに半紙にて折りたる形を載す（奉書にても同じ事也）

先づ紙を縦に取りて、下の左の端を第一圖の如く折り

第一圖



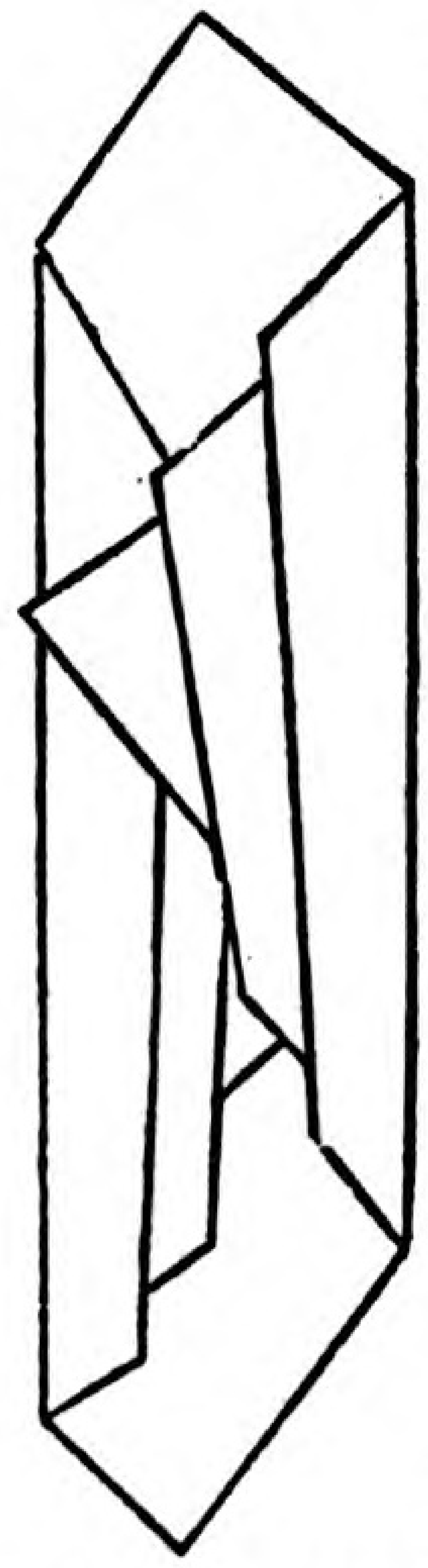
イ



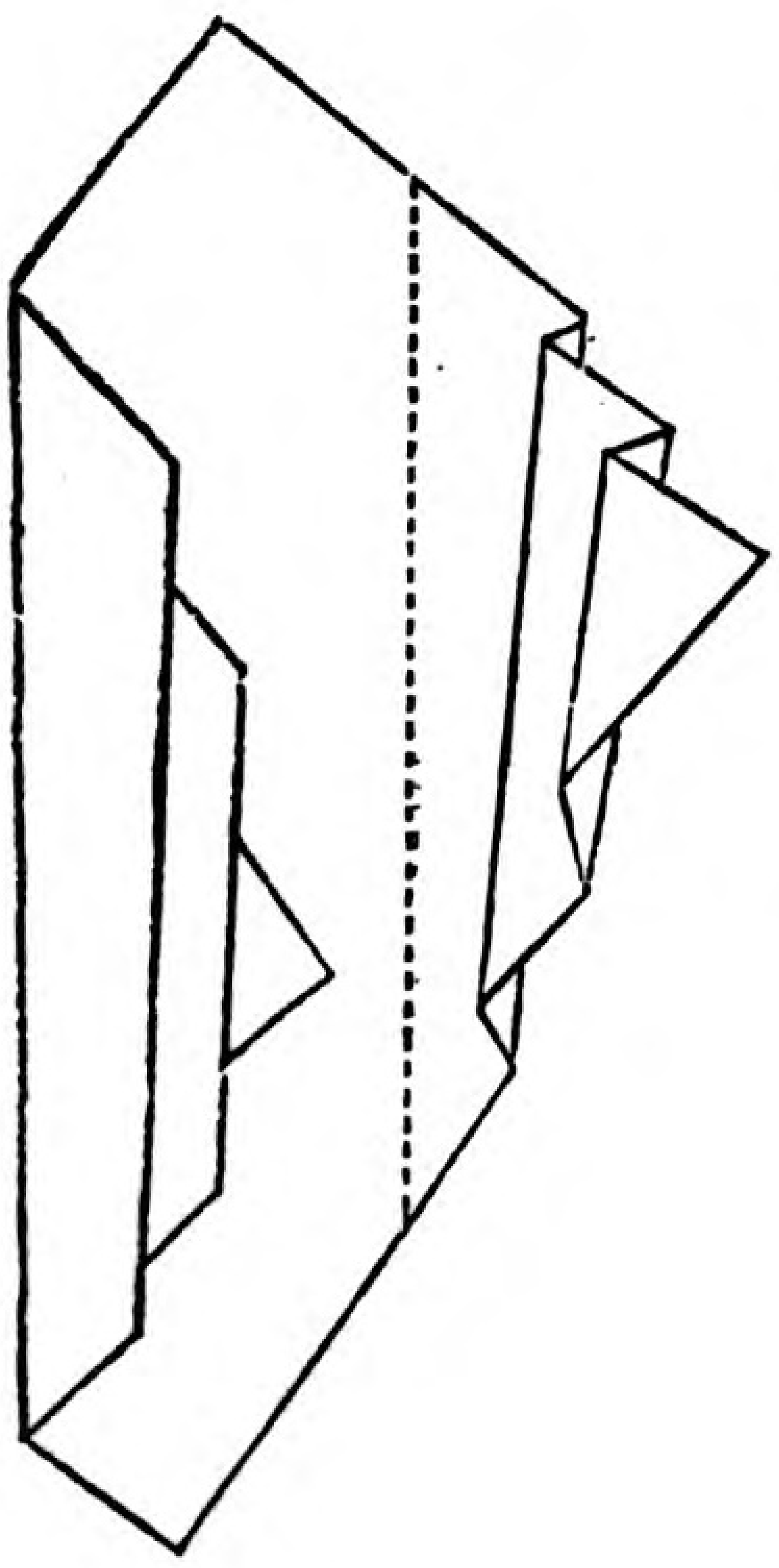
第二圖

ながら、又其の點線にて示せる通りに折りかけて、イの角と紙の上の方とよく合ふやうにし、下をも能く合せて第二圖の如く折りなし、さて其の餘り即ち第二圖の點線にて示せる所を斷ち落すべし。是普通折形に使ふ紙の寸方なり。

結納のし鮑包



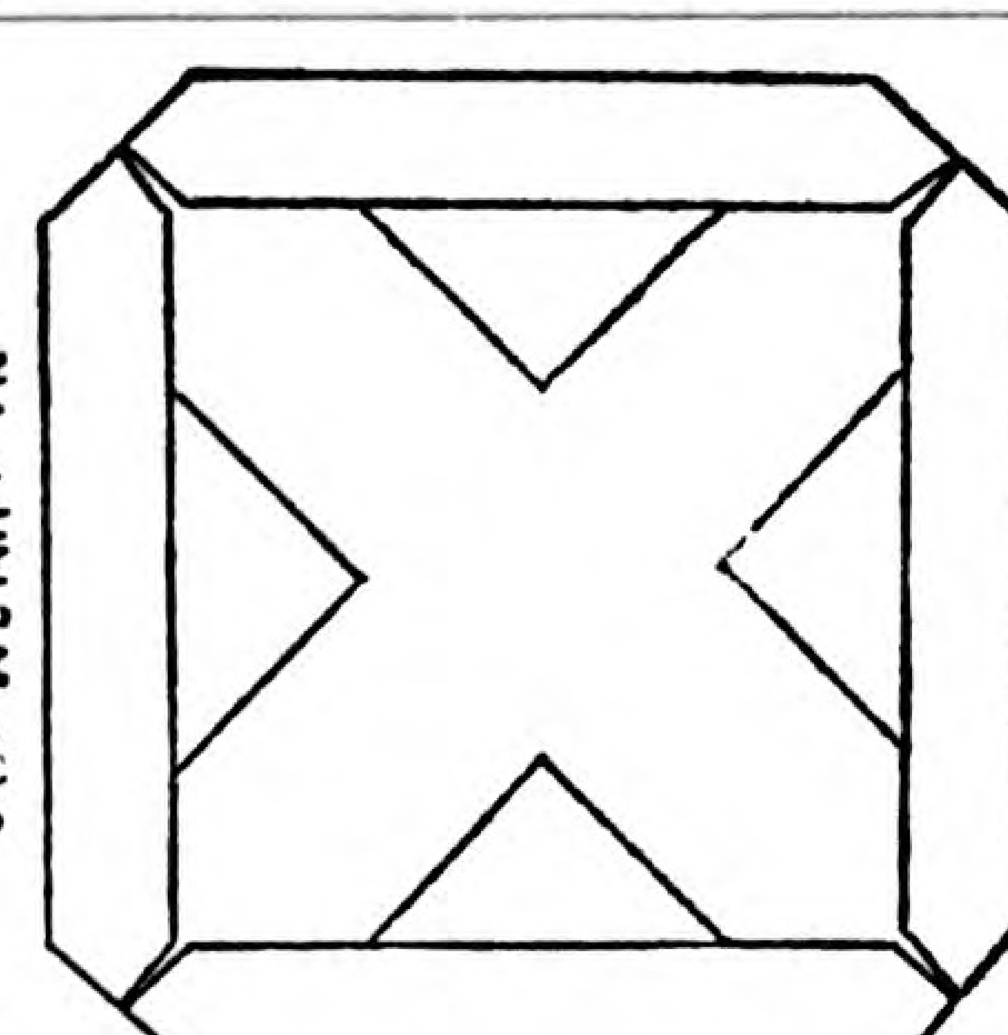
是は婚禮の結納に用ゐる包樣なり。水引、思ひ結、つくる。



おなじく右を開きたる圖

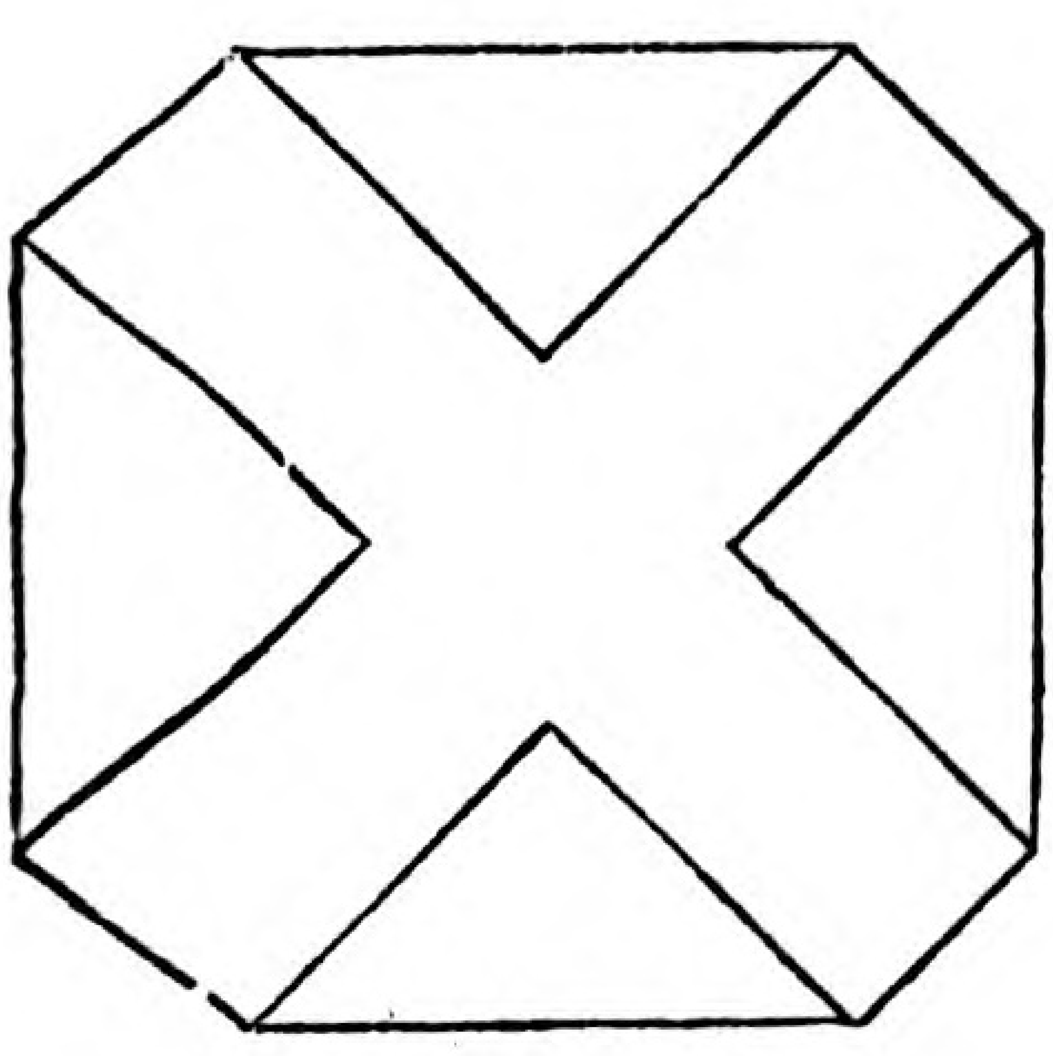
平甲立

是は諸祝儀の膳部の小角の甲立なり。紙立と書くべきを甲立と書きて近世専ら用ゐ來れり。此の折形は裏曲の寸方に從はず、先づ用紙を眞四角に斷ちて、他の折形と同じく二枚にて折る。



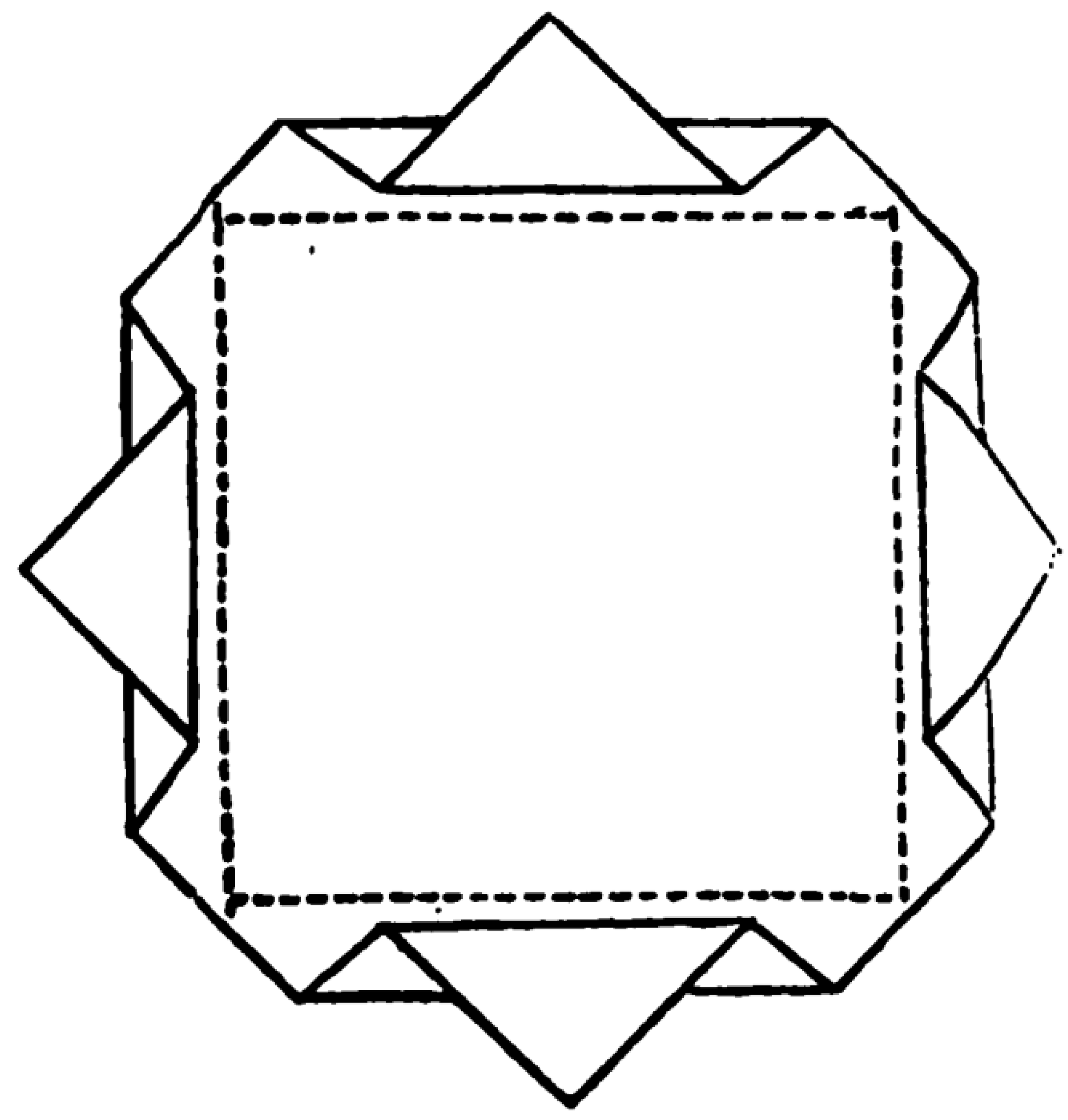
但外面は白にして、内部は紅紙を用ゐるなり。

おなじく解の一



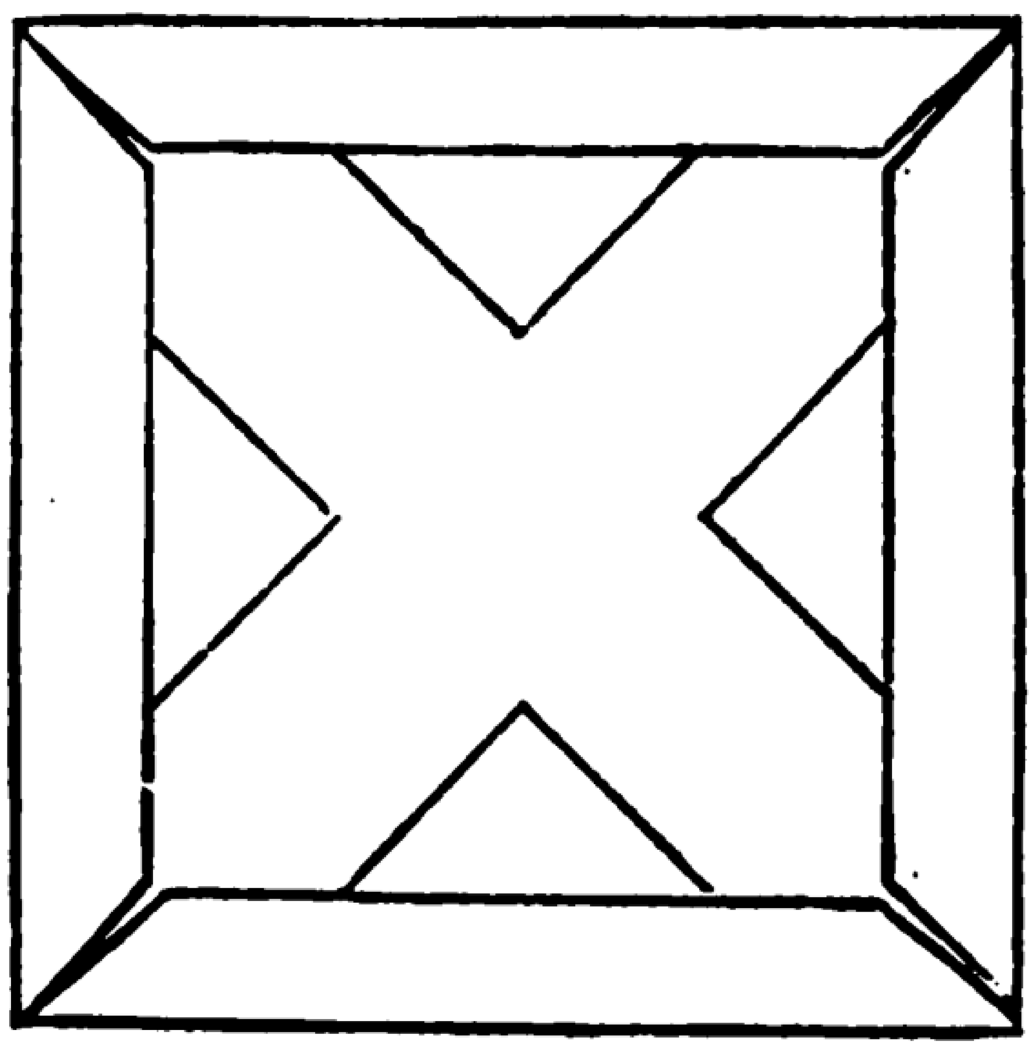
先づ四方の角を斯の如く折りて解の二にうつる。

れなじく解の二



解の一の如く折りなしたる其の端を亦外に折りて、次に此の點線にて示せる處を内部に折れば解の三となる。

れなじく解の三



斯の如く折りたる四方の角を少しづゝ裏に向けて折り返せば平甲立なり。

茶の湯

茶禮初學（續）

孤峯庵不羨　關　葦雄

一手水柄杓は、數寄屋の方は杉也。待合は檜也。

註釋、手水柄杓、數寄屋と云は總名にて、數寄屋にもせよ、小座敷、又は圍にもせよ、つくばひ石の据有所を云。爰に出し置柄杓は杉正目（但し寸法は千家寸法に有）に待合は名稱の通り、客の待合する場所を云。手水石あらば、檜の柄杓を出し可ㇾ置也。是、内路次外路次の境界を判然せしめんが爲也。

一茶の湯刻限之事

一晝の茶の湯　正午

註釋、不淺日　維新前迄は、此刻限を正午と云ひ、晝九ッ時、午の中刻なり。偖、客方へ案内するには、來る何日何時御茶差上度御差間の有無奈何に可ㇾ有ㇾ之、御相客は誰々と言て、一周間乃至五日以内に客方へ可㆓申遣㆒高貴の御方ならば、自身仕

向して可ニ申上一、等輩以下は書面、或は使にて案内するものなり。次に客方にては、來る何日何時御茶可レ被レ降旨預ニ御案内一忝存候幸同日差支無レ之、御刻限參上可レ仕相樂罷在候抔と返報するもの也、(但し若亦不得止事故あらば、折角の御招に候へ共、公務難ニ繰合一又は學校の試驗中にて參上仕兼、他日御序も有レ之候はゞ一服戴度、今般限御斷申上候條、不惡思召被レ降度抔)返辭するもの也。而後三日以内に自身往て、何日何時御茶可レ被レ降旨忝奉レ存候御前禮の爲參りたる由を云ものなり。是を前禮と唱へ茶道の客に限り、必ず不レ欠を故實習とす。是則茶の約束を堅くし、其の日の時間を不レ誤、亭主にも往と云事を確認せしむる注意の爲なり。且此時は平素懇切に往來し、所謂知己友達にても、取次を以申入、又は自身上り込長話抔せぬものなり。奈何となれば、客前は亭主も種々用意にて多忙なるものなれば其妨害をなさゞる注意の爲也。又自身難レ往時は、使人、或は當時なれば郵便にて申遣も差支なき事也

一夜咄の茶の湯　暮六時古は七半時頃也

註釋、是は舊暦の暮六ッ時、新暦にては午後六時也。約束の規則等は前條正午に差違無之事也。則夜間の茶の湯なり。

一朝の茶の湯　朝六ツ半時

註釋、舊暦の六半時は新暦の七時也。是も亭主方には種々の規則あれども、客方には敢て習無レ之此時間に往てよし。

一曉の茶の湯　明け七ツ半時古は七ツ時なり

註釋、舊暦の七ッ半時は新暦の午前五時也。此會は、主客、共巧者ならでは難レ得レ成。奈何となれば、煎茶より炭を仕舞迄、夜明てよき頃に成樣にする事、本會の習第一なり。特に今時惰弱なる人、又婦人方も、此會は或は迷惑なるべし。

一飯後の茶の湯　朝飯後 夕飯後

又菓子の茶の湯共云。

註釋、此會は、飯後の事故、料理無レ之。大に淡薄なるものなり。朝飯後は言迄もなし、夕飯後は晝飯後也。此の故は、往昔は二食なる故に、晝を夕と云ひ、晩飯は夜喰と云たるものなり。此夕も則晝の事ならん。時間は其時々に豫定して約束すべし。稽古のためには至極よきもの也。又侘人には別して取合ものなり。

一不時の茶の湯　時間は不定なり

註釋、是は俄に客を得て、即座に茶會を催すを云客數も臨期應變なり。

一跡見の茶の湯

註釋、是は正午の茶の湯の跡へ客を呼たるものなり。夫故、正午の茶の湯の時、茶入に茶澤山入たる時は、客方より跡見ある歟と尋ぬべし。跡見あると云はゞ、客方は其心して成丈時間を早めに退庵するを要す。

都て、茶の湯に往には、約束の時間より卅分早く往事を可レ務。早きは敬禮也。雖レ然、餘り早きも又不禮也。奈何と云に、亭主方にては待合を掃置に、正午の客には十一時迄に調ふを常とする故也。又遲刻するは大に失禮なり。緩急其宜を得べきなり。

右七種茶會約束時間の種類なり。偖何會にても、茶會濟たらば、翌日、或は三日以内に後禮可レ申入、自身往共、又使を遣す共、前禮のごとく可レ成、過日は御茶被レ下百事御心入御仕好の御精神顯出、御道具組一々敬伏仕寛々相樂近來の愉快に存候依レ之爲ニ御後禮一推參仕候と云樣に言語鄭重に、德義をもて可申述。亭主は之に反して何の風情も無レ之能社御出被レ下、私も一日相樂候前後の御禮御叮寧に存候と言べし。禮記に曰、禮尙ニ往來一。往而不レ來不レ禮也。來而不レ往亦不レ禮也。と此語を能可レ守也。

女禮（續）

禮節教授　有住常子

料紙硯さぐる樣

まづ次の間より、例の如く爪立て立ちて、進み出で、御前三尺余の所に至り、踏止まりて、左足を半足跡へ引て、左膝を跪づき、次に右膝を跪づき、跪づく時、左膝頭へ左の掌をそへて左を跪き、右も同しくして跪くべし。

さて兩手をのみ、疊にずらして押進めて、次は、右膝を進め、左膝を進め、左右とも進めて即ち踵を平らにして居るべし、（この一進は取扱ひよき所を見斗らふべき爲なり）

居りたらば、頭をうつぶせたるまゝに、兩手にて、硯筥の蓋のはしをおさへて引出し、又眞中を持直して、疊をずらす程にして我前のまで持來りて、先に出したりし時の如くめぐらして、又眞中の所を左右より持ちて、我前通りの右の方によせて置き、

次に料紙を、是も端を兩手にてもちて引出し、又眞中の端々を左右より持ちて前によせてめぐらして、我前通りの左の方によせおき次に硯箱を、兩手にて引きよせて、眞中をもちて引よせ、是もめぐらして前に置きて、左の手をつきて、右に筆を取りて、硯の岡にて穗先をなほして、左の手にてさやをとりて、もとの如く納めて筥に直して、

次に蓋を、右の手をかけ、左の手をそへて、持直して、蓋をなして

次に硯筥を、料紙の上にのせて、左より右の方へ、前の眞中までよせて、持直して、兩手にて眞中を持ちて、持出せる時の如く持ちて立ちて、

右足を一足、跡の方へ引きて次に左足を一足同じく引きて、次に右足を、左足の後へ横に一足引ながらつけて、次に左足を、右足の前へ竪に一足引てつけて、右

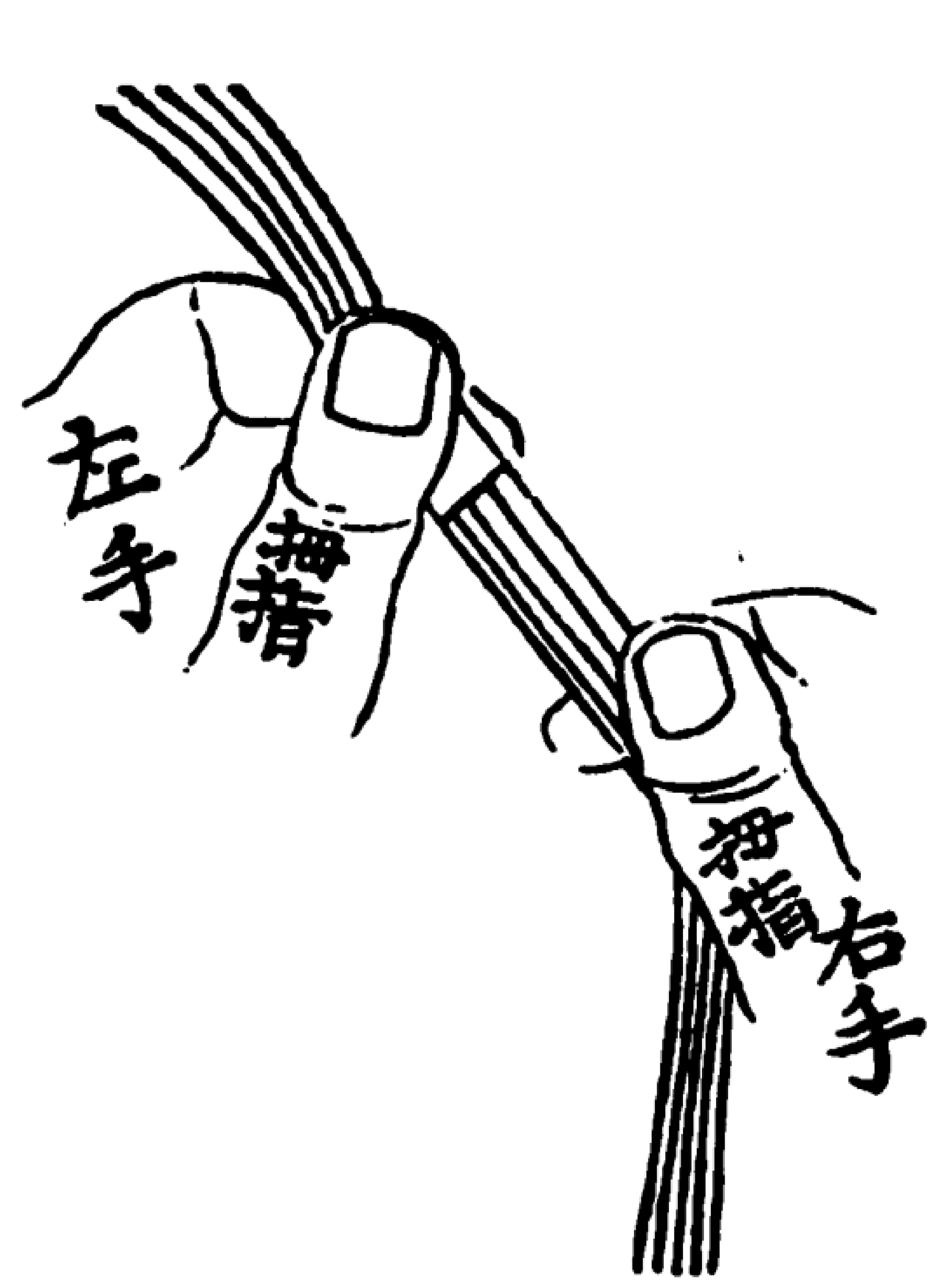
にめぐりて、後へとめぐりて立かへり、(次の間に來りて座す事右足を左足の爪先にかふらせてめぐりて左半足引て座するなり) 次の間以下稽古の順序もかくして習ふべし

花菖蒲結

有住常子門人 みを子

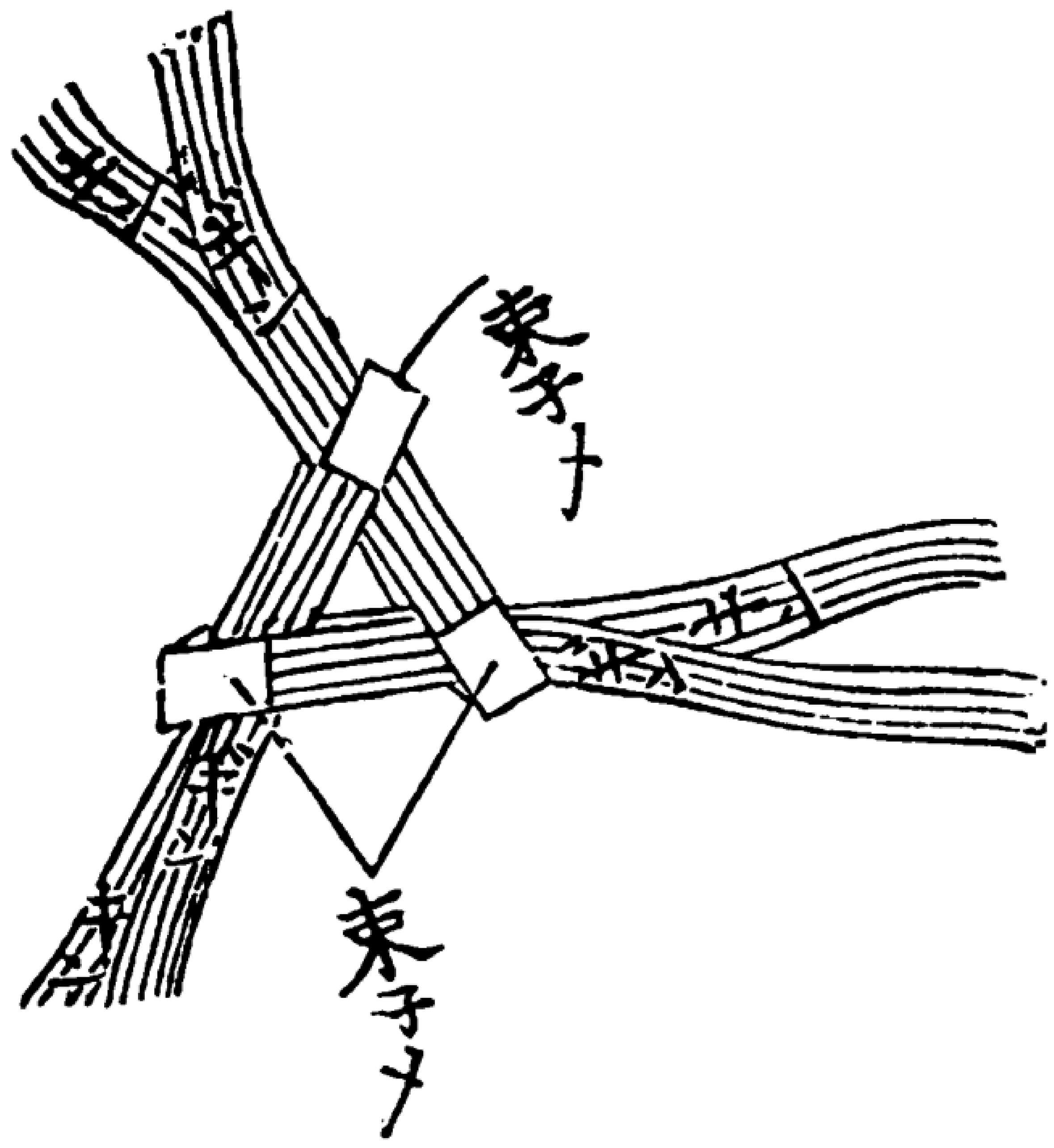
此のむすびの事を今取出で申しはべらんは、十日の菊のそしりもあらん、と思ひはべれど、あつきをりのてすさびに、をしへのひとくさをみづから造りたるついでをものして、ひとりのみにては善惡の別ちもわかちゑ侍らぬわざなれど、友どちにもみせまつりて、そのさだめをうけ侍らんとて六日のあやめのつくりはゑあらぬものをもはゞからでなん。

まづたやすく造りたらんかたてそよかめれと思ひ侍れど、水引三本(すべて水引は五筋を平たく束ねて一本に造れるものなれば文中幾筋といへると幾本といへるとを混同して心得べからず)を取出して、金と銀との接ぎ合せの所即眞中を、左のおほゆびとつぎの指にてしかとつまみて持ち居りて、右のおなじゆび、二本にて、大ゆびを上にして、つぎの指を下に橫になして、その間に水引をばはさみて眞中の方より端の方へと、金銀の粉の落ぬ樣にしごきて、しなやかになして、金銀ともになしをへて、



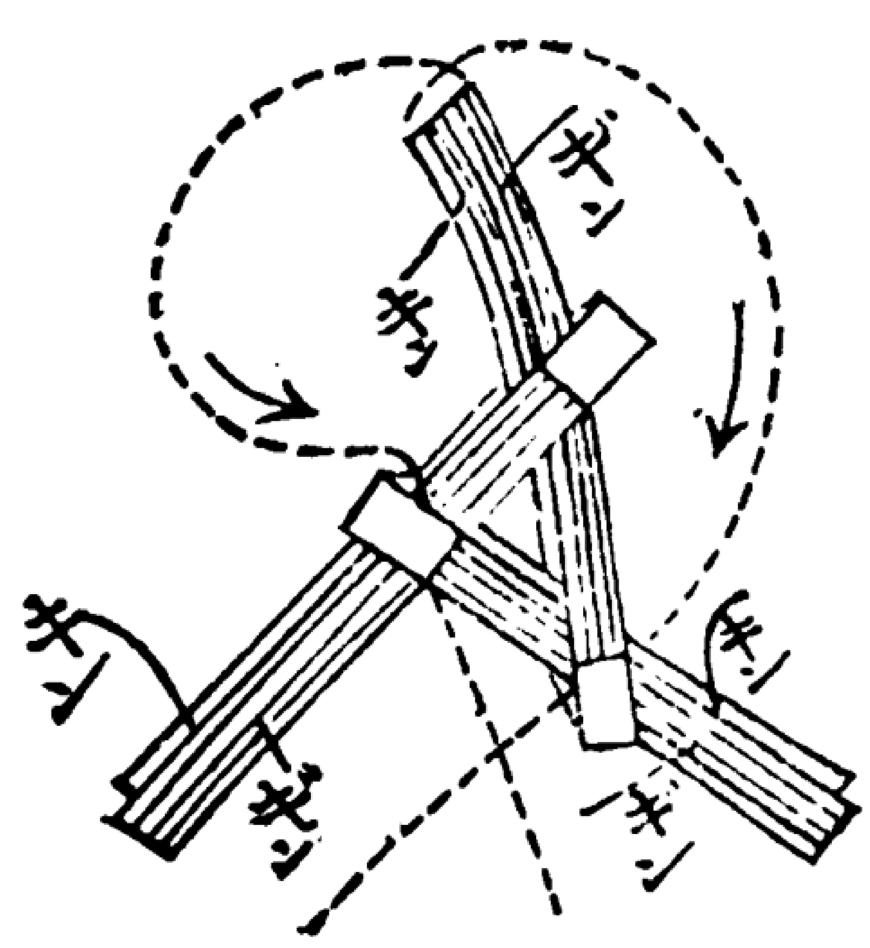
まなかの五筋に束ねたる所を銀の方につけ侍りて、金の方のつけぎはより二つに折りて、束ねめを上の方になしはべりて、左の手に持ちて、つぎに右に一本をとりて、左にもちたる上に向の方よりかふらせ

て、つぎに、はじめの束ねめに、二つのはしを二本目の上下より通して、三つに組みなしつ、(圖を見て知るべし)



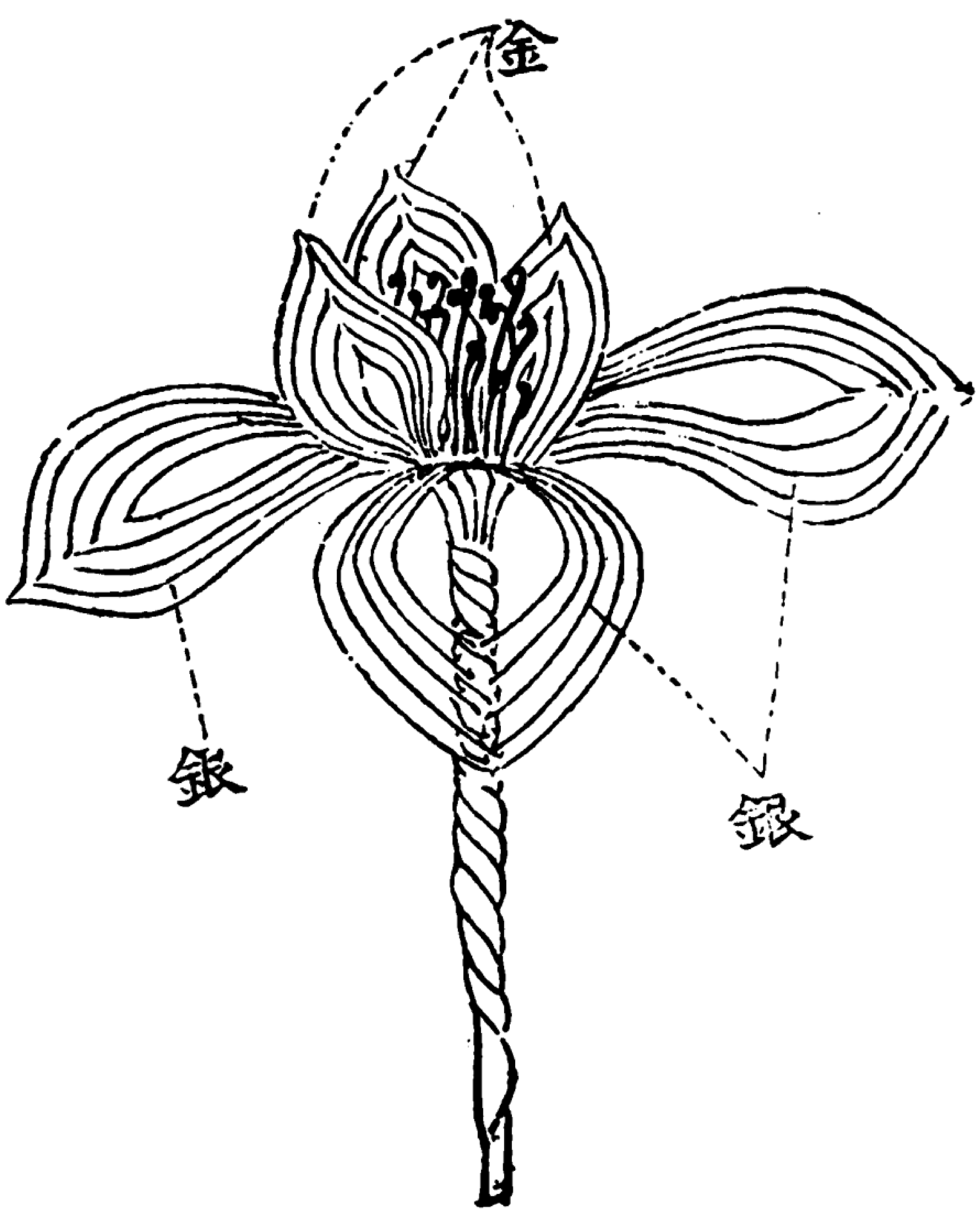
組みをへて、銀の方は其まゝになし置き侍りて、金の方を、五筋そろへて、右の方の、同じもとの方へと、輪形になして通して、つぎにあとの二本もかく通し侍りて、ちひさく輪形になしおき、

次に銀の方をも、五筋そろへて、左の方のもとの方束ねたる所へとほし侍りて輪形をおほきになし、つぎつぎ二本もかく輪形になしはべりおきて、(圖の點線にて示せる様に通して輪形をつくる)



銀の方の輪形をとりちかへぬやうにして、中の方の輪より一筋つゝ引き去めて、つぎ〳〵五筋をおほきにつくりなし侍りて、三本ともに、五筋引そろへて糊にてとめ、三本ともにとめて、つぎに金の方もちひさく、ひともとつゝ引て去めて、糊にてとめて、金銀ともに、三辨つゝの輪形をなして、銀の方のおほきなる端の、一筋の眞中の、方内より、小刀をあてゝ、外の方より、左の大ゆびと次のゆびとにておしてかどをたて侍りて、つぎ〳〵もみな斯くして、後銀の方を下にして、次に金の方も銀の如くなして、

金と銀と一つ通りに重ならぬ様に心して、銀と銀との間に金の花びらある様にして、つぎに、金のあまりを、小刀をあてゝ眞中にたてゝ、其の先を小さき串に巻きつけて、うづ巻にし、之を上の方へ向く様に、左右の、大ゆびとつぎの指にて立て、次に銀の方のあまりは、小刀にてきれさへきて、下の方へ折なして、軸になして、銀紙の細きにて巻き侍りて、銀の花びらを、下の方へむく様になして、つくりをへ侍りき。



こゝには、金と銀との水引にてつくり侍るやうをものしたれど、紅と白にてもことなることなら、紅を金に、白を銀になしてつくり侍るべきなり。

このをしへのひとくさを、つくりなすさま、さだめてつたなうてそはべらめ、そのふしぶし學びのあねぎみたちをしへたまひてよ。

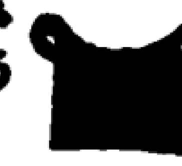
たちぬひ

西山たい子

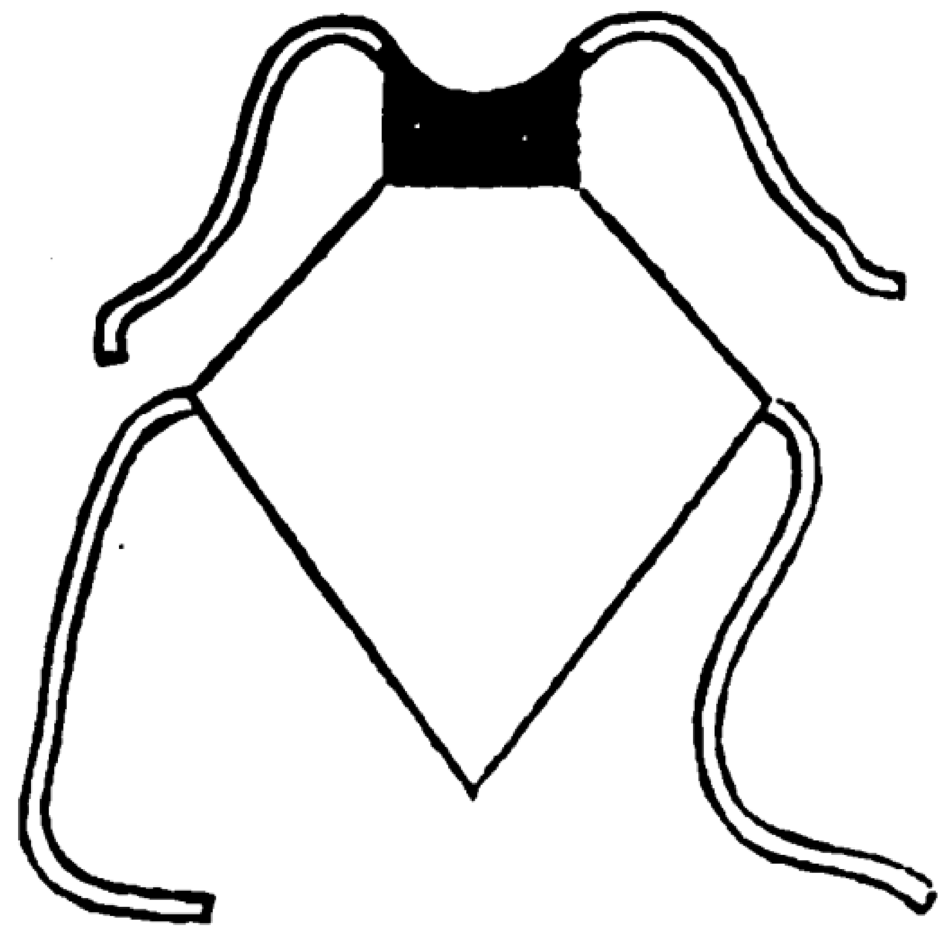
（九十四）腹掛

フランネルにても、縮緬にても、絹にても、どんすにても、木綿にても、絽にても、すきやにても、巾大凡八寸ばかりの角にたち、フランネルならば一重にてよろしく、他のものならば同じやうに裁ち、一重ならばまはりを伏せ縫ひし、二重ならば裏表合せて、の様にぬひ、引かへし、別に

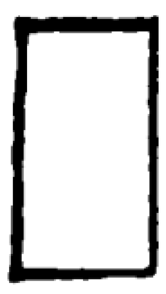
此圖の如くびろ

うどの襟切を縦に二つに折り、紐を通さんと思はゞ、まづ上にはさみおきて、兩横をぬひ、又ちをつけんと思はゞ、まづちを二つぬひおきて、兩横にはさみぬふべし。但し上圖の如くゑぐりぬふもよし、それより其の襟を裥の表がはにぬひつけ、裏にて絎け、裥紐を裥の兩はし、角どりたる所につけるべし、但し大小は子供により見はかろふべし。

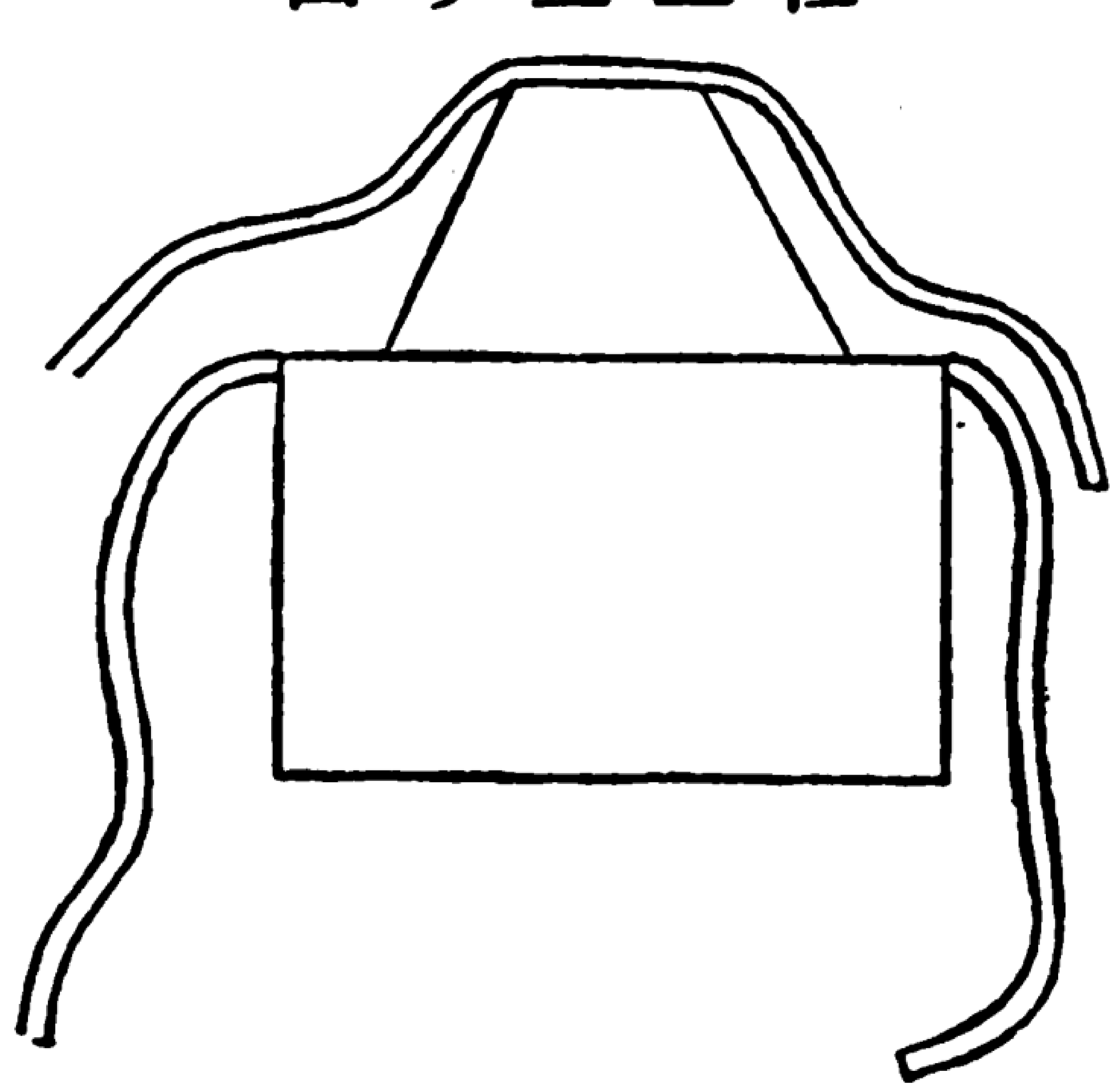
仕立上り圖



輕便養生腹掛

まづ上を上圖の如く、少し縦を長く裁ち、或はゑりより下の方を少し廣く裁ち、裥も其人の大小により、腹よりうしろへまはるほどの巾、丈けも其人の大小によりて、よきやうにたち、之もフランネルか、モンパならば一重にてもよろしく、木綿ならば二重がよろしく、何れにもせよ、先きの腹掛の如く伏ぬひ、又は、袋にぬひ、上と下とを合せぬひて、襟紐、裥紐をぬひつけるべし。

仕立上り圖



だいどころ

一鰺

鰺の期節は、五月より八月迄とす。料理方、鹽燒、煮肴、甘酢、たで酢、椀種、すし種、てんぷら等に用ふ。

一丸鰺

丸鰺は、七月より九月迄を期節とす。鹽燒、椀種、すの物等に用ふ。

一め鰺

め鰺は、八月より十一月迄を期節とす。しは燒、煮肴、椀種等に用ふ。

一しま鰺

しまあぢは、九月より翌年の二月頃迄を期節とす。調理方、刺身、椀種、しほ燒、てり燒等に用ふ。

一鮎

鮎は、六月より九月頃迄を期節とす。鹽燒、甘露煮、魚でん、丸ずし、てんぷら等に用ふ。

一桃蜜漬

半熟の桃を採り、肉を針にて刺し、蒸餾水一升に「ポッタース」十匁を加へ、よくかきまぜ、桃を其中に投れ、四時間程煮たる後水氣を去り、別々壜中に糖蜜を投れ、其中に漬込み、密封をなし、二三ヶ月を經て用ふべし。

一隱元の青漬

夏土用中にいんげんを採り、豆腐のからの水氣を去り、鹽と等分に交合せたるものにて漬、蓄へ置、冬になりて用ふる時、鹽出しをなし、ゆでる時は、生の隱元と變る事なし。



學園



秀歌集

鹽井正男

○

あびきする舟の夜さむを身にしめて
　ねられぬつまや衣うつらむ

○これは、八田知紀といふ人の歌なり。薩摩の人にて、香川景樹の門人なり。桂園の門下にて、景樹と肩を並べ、また、春海、千蔭、眞淵等とさへ相對して、稱すべき名人にて、明治の初年に沒せり。家集を忍草といひ、そが中には、玉なす言の葉の露あまるばかりあり。いとまある時、つきて見たまへや。

○あびきする。あびきとは網曳(あみひき)を畧したる詞にて、海士などのすなどりに網を曳くをいふ。○舟の夜さむ、夜さむとは、夜の寒さにて、舟とは舟なる人の事を意味せるにて、直ちに人といはずして、それに深き關係ある舟をかりてあらはせるにて、かゝるはめでたき修辭上の一技なり。されば、舟のよさむとは、舟にありて網曳する良人の夜寒をいへるなり。○身にしめて。しみ〴〵と深く身にしみておぼゆるをいふ。やがて風さむき秋夜あらき海邊にありて網を曳き居る我が良人は、さぞや寒むからむと、深く身にしみておぼゆるをいふなり。○ねられぬつま。良人のさぞや寒むからんと思ふに、いとしくていねがたき妻といふ事なり。

○一首の意は、浦わの里にいとあはれに擣衣の音が聞ゆるが、これは、かばかり夜寒の秋の夜に、あらき海邊にありて、網を曳きすなどりいそしむ我が良人のさぞや寒むからむと、しみ〴〵と身にしみおぼえて、良人の寒苦のいとほしさに、いねがたくき妻

のありて、かくは衣を擣つにやあらむといふことにて、浦わの夜半の擣衣をきゝて、網曳する海士の妻が、良人の夜寒のいとほしくて、ねられでうつにやあらむと想像したる趣きなり。其の情といひ詞といひ、風韻といひ、誠にいふばかりもなく、あはれにればゆる歌なり。歌はかくてこそあらまほしけれ。この歌、もと、其の師香川景樹の左の歌より脫化したるなり。

○

旅にぬる人の夜寒を身にしめて
　誰れ古里に衣うつらむ

○これは、やがて、香川景樹の歌なり。文化文政の頃より天保にわたりて、彼の堂上流の旨從守株の陋を退け、また當年崇古者流の古へにのみなづめる弊を破り、別に清新優美なる一家の歌風を起して、敷島の道の草木をなびかしめ、あはれに芳しき桂園の美名を、天下にとゞろかしたる人なり。擣衣寒といへる題にてよめるなり。この人の集を桂園一枝といふ。拾遺もあり。これも、歌を知らむずる人は、必ずよまであるべからず。

○一首の意は、如何なる人が、我が良人の旅びに出でゝ、旅のわびしき假屋に此の夜寒の晩を旅寢して居るを、いかばかりかさむからむと、しみ〴〵と身にしみてればねて、かくは古里に衣を擣つならむ、誠に寒げにあはれなる擣衣の音がきこゆるよといへるなり。これは、里の擣衣をきゝて、如何なる妻が、旅にぬる良人の夜寒を身にしみ〴〵とればねて、かくはあはれに擣つならむと想像せる趣きなり。これも情景風韻ともにゆかし。前の知紀のは、畢竟、此の師の歌より思ひ得たるものならむ。これは、古里に殘れる妻と旅なる良人との上に取りあはせたるを、知紀のは、網曳する良人と家なる妻との上にかへたるのみ。

景樹の歌の趣きを取りたる所は、いかゞなれど、ね

られぬつまをといひたるわたりなど、知紀の方、一きは切にきこえて、やさし。

○

朝なぎに網引やすらむ菅浦の
　霞をつたふ海士のよびごゑ

○これも、仝じく景樹の翁にて題は霞隔浦なり。

○朝なぎ、朝に海上の穏に風なき景色をいふ。なぎとは、おだやかになるをいふ。夕べにかゝるけしきなるを、夕なぎといふ。○菅浦。○地名なり。○霞をつたふ。霞の深く立てこめたる海岸の、こゝかしこに、海士の網引する聲のきこゆるけしきにて、海士の網曳する姿は見えずして、唯聲ばかり遠く近くきこゆる故に、霞をつたふといへるなり。面白き形容なり。

○一首の意は、此の朝なぎに網を引くのであらう一面にうら〳〵と立ちこめたる霞がくれをつたひて、浦わの方に遠く近く海士のよぶ聲がきこゆるよといふ意にて、うら〳〵と霞みこめたる靜なる春の朝の浦わのけしき眼にうかび來て、誠にけしきいふばかりなき歌なり。殊には、霞をつたふと形容したる詞づかひ、面白しといふも愚なり。八田知紀が、浦春興をよめる歌に、けしきは異れど、仝じくうらゝかなるけしきを形容し來りて、これと對すべき歌あり。左にあぐ。

○

うら人の朝な夕なのいとなみも
　春にあそぶと見ゆる頃かな

○八田知紀の忍草にあり、浦春興といへる題にてよめるなり。○うら人。浦人にて、すべて海士などいふに仝じ、○朝な夕な。朝晩といふに仝じ、○いとなみ。世わたりのしわざなり。

○浦人がめかりしほくみ網びきする朝夕のいそがはしきしわざも、春の浦わのうら〳〵と長閑なるけしきにつれて、おのづから春に遊び居るが如く思はる

る頃であるワイといへる意にて、誠に面白く巧みに作られたり。すべて、此の人の忍草、あはれにいみじき歌多し。次手なれど、一二首の名だかきをあげむ。

○曉月

ねざめして誰れが見るらむ三よし野の
すゞのしのやのありあけの月

○芳野にて

よし野山かすみの奥は知らねども
見ゆる限りは櫻なりけり

源氏物語講義（八）

下田義天類

かしこき御蔭をぞ賴みきこえながら、おとしめ、瑾をもとめ給ふ人は多く、わが身はかよわく、物はかなき有りさまにて、なか／＼なる物思ひをぞし給ふ。

○是より、桐壺の更衣の御身の上にふりかゝりくるわざはひを解かむとして、先、其の平生の御心遣ひを書き出したる所なり。

○かしこき御蔭　とは、有り難き陛下の御寵愛なり、○きこえは、陛下へ對したる尊敬辭なり御賴み申しながらとか、若くは賴み奉りながらとか云ふ程の義なり。更衣は常に身に餘るまで有難き御厚遇を蒙れど、恐れながら、それをたより力草として御奉公は致し居るものゝと云ふ義也。

○おとしめ　はあなづりさげしむ義なり。○きずをもとめ給ふ人　とは、おちど、ぬけめをねらひ求むる人なり。○おほく　はあなづりさげしむ人たちや、おちど、ぬけめをねらふ人などが多きなり。弘徽殿方の人々のみならず。内は、あまたの女御更衣より、外は多くの月卿雲客などまで、皆この更衣をおとしめさげしみ、且はあるなしの瑾を求むる由なり。○わ

が身はかよわく　とは、其の上に更衣の身は兎角病ひ勝にてすこやかならぬなり。心氣苦勞の絕えざるが故に、朝夕にからだを痛めて、遂にかやうなる病身ものとなりたるよしなり。　神經過敏なる身を以ちて、たより少き世を渡るさま、うつし得て見るが如し。讀むもの其の身を此の位置にれき、暫更衣の心となりて、此の間の情を察すべし。○ものはかなきありさまにて　は、何となく心細き有樣にてなり。はかなきは埒の明かぬこと、若くは、きつかぬことなどを云ふ語なれど、こゝはたよりなく心細きよしに用ゐたる所なり。

○なか〳〵なるもの思ひをぞし給ふ。中々はかへりての意なり。この語は常に副詞にのみ用ゐて動詞を修飾する格の語なれども、こゝにてはその副詞の格を變じて、形狀言として、もの思ひと云ふ轉用體言、即名詞を形容する語としたり。ことの心は、かくかたじけなき御寵愛を蒙らずぞ、かゝるもの思ひもあらざらましものを、御寵愛を蒙れるが故に、かゝる苦界の淵瀨に沈めり。されど、御寵愛がかへりて身のあだとなりて、あるまじき物思ひをし給ふよと云へる所なり。

此の一くだりを取束ねて云へど、

さて彼の桐壺の更衣は、陛下のありがたき御心ざしひとつをたよりとして、御奉公は致し居りながらも、退きて我が身の境遇を顧れど、世間には、吾をあなづり、さげしむ人も多く、又何かとれちど拔目を見付けくれむとねらひ居る人も少からず。其の上に、我が身は、此のやうに煩ひ勝にてあれど、旁以ちて、何となく心細くて、寧此の御寵愛がなかッたならぞと、身にとり悅ぶべき御寵愛を、結句苦勞の種とするやうな物思ひをぞッかり常平生してござッたと云ふ程の義なり。

細流に、此の物語、中々と云ふ詞何れも妙なり。凡歌の五文字にも、中々と置くは大事なり。すゑをい

ひれふせがたきものなり。御寵愛なくむかやうにはあるまじきを、これゆゑ中々なる物思ひもありと云へるなりとあるは、さることなり。

また評釋に、きずを求め賜ふ。此の段、恨を負ふ事の益々深く成り行きて、遂にうせ賜ふべき事の筋を彌進めもて行くなりといへるもよし。心得おくべし。

御つぼねは桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせ給ひつゝ、隙なき御まへわたりに、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり。

○御局は桐壺なりとは、此の更衣の常にはします御局は桐壺と申す御殿なりと地の文にて解説したる所なり。桐壺とは、淑景舎と申すが本名にて、大內裏の東北の片隅にある御殿なり。淑景舎の植込には、多くの桐を植並べてあるが故に、其の殿舍の一名を桐壺とも申しゝなり。○あまたの御方々をすぎさせ給ひつゝ、ひまなき御まへわたりに、人の御心を盡し給ふも、げにことわりと見えたり　とは、陛下には、他の女御更衣たちのおはしますあまたの御局々をむ餘所にして、しかも其の軒先軒先を御通路として、絶間なく彼の桐壺の御方へのみ成らせられ給ふこと故に、これを見あげ奉る他の女御更衣の方々は、其の度毎に悋氣のほむらをおさへかねて、兎やせむ角やせむと其の御心を盡し給ふも、なる程尤なる次第なりと、草紙地より批判したるなり。

○あまたの御方々　とは、宣耀殿、麗景殿、常寧殿、貞觀殿、又は登花殿、弘徽殿などの御殿御殿を云へるなり。元來大內裏には、殿舍の數々頗る多かれども、中に就きて、宮城廿五の殿舍は、內裏中のこゝかしこに、程好く配置したるものにて、其の間々の通路は甚複雜したるものあり。評釋に畧圖を揭げて差示したるは誠に見易きやうなれども、其の御通路は、萩原氏の想像線にて、慥に考證したるものとも思はれず。大內裏圖拾芥抄等にて見る時は、右

に擧げたる御殿御殿を通過し賜ひしものと見えたり。陛下の常にはします所は、皆々も知らるゝ如く、清涼殿と申す御殿なり。其の所より、所謂瀧口を經て、弘徽殿の西の廂を過ぎ、渡殿を經て、登華殿西南の廂を過ぎ、貞觀殿に出て、常寧殿に移り、その東の渡殿より宣耀殿東南を廻りに、淑景舍の渡殿へ移らせられたるもの〻如し。或は承香殿と常寧殿との間より、麗景殿の渡殿にかゝり、昭陽舍を過ぎて淑景舍に到ることもあり。または飛香舍の方を迂廻して弘徽殿へ出て、夫より直に常寧殿へ移り、宣燿殿を過ぎて淑景舍へ到る通路もあり。これらは、其の渡殿打橋等を圖に示して御話すると、極々御會得もし易からむと思はるれども、活版方にて困る事も有らむかと存じて、こゝには省畧せり。兎に角に個樣のあまたの御方々を過ぎさせ給はずては、桐壺の方へは到り難きことを故に、數多の御方々を過させ給ふとはかゝれたるなり。○御前わたりに といふは、目の前の御通過にといふ義なり。御前は女御更衣の方々の御前なり。わたりは 陛下の渡御をいへるなり。めづらしき合成詞なり。

○人の御心 は、他の女御更衣たちの御心なり。いつもいつもわが方へは御立寄りも在らせられず、しかも目の先を御通過遊ばされて、桐壺の更衣の御方へのみ、絶えず隙なく入らせらるゝ事故に、他の女御更衣の方々は、女ごゝろのあさましさに、羨ましい 嫉ましい 口惜しい 腹立しいと、樣々に心を盡したるよしなり。これぞこの物語の双紙地より評して、かく眼前に御寵愛の厚薄をくらべ見る事故に、他の人々の、色々と心を盡し給ふも無理でない、實に尤の事なりと評したるなり、諸子諸嬢はこれを聞かれて如何に思爲し給ふらむ。かく眼前に蹈附けらるゝごとき仕向に逢はゞ、凡生きとし生けるものは、誰しも其の情を動かさゞることを得ざるべし。我が身の上の行屆かざることをぞ思ひ合せず。唯一途

に、其の寵を蒙るもの丶身の上をそねみて、憎らしい否らしいと疎外するやうになるは、是一般の人情なるべし。他の女御更衣の方々が心を盡し給ふも、實に尤の事ならずや。さて、斯く他より想像してすら尤と思ふ程なり。まして其の當人當人の身となりて見給へ。其の心中いかばかりか悔しかるらむ。いかばかりか口惜しかるらむ。其の悔しい　口惜しいと思ふ情は、只此の女御更衣の方々のみにあらず、これに附き從ふ數多の下部はしため等までが、御主最負に、躍起となりて腹立つもあるべし。あるひは法界悋氣に僭手口を叩き散らして、他を煽動するものもあるべし。か丶る彌治馬連さへあれど、甲より乙に傳へ、丙より丁に言ひ次ぎ、後宮の内は、遂にこの桐壺の惡口を以ちて充てらる丶に至りけむこと、自然の勢といふべし。其のあまたの人々の、怨めしい　口惜しいと思ふ情は、皆彼の更衣の一身のほとりに集まれり。前段にれとしめ、瑾をもとむる人は多く、わが身はかよわく、ものはかなきありさまにて、中々なる物思をぞし給ふといへる所と照し合せて、其の心情を察すべし。評釋に、

げにことわりと見えたり　といふ語は、作者の自評なり。更衣の時めき給ふさまを強く聞せたる筆づかひいといみじ。と云へるは、評し得て妙なり。今はこの評の意を活用して解説したり。但同書に、

御局は云々とあるを評して、

殊更に御坐所より遠き桐壺を取出したるは、多數の御方々の恨を重ねむとしての結構なるべし。作者の用意いとこまやかに巧なりといへるは、一渡りさることのやうなれど、猶思ふに、少しいか丶あらむ。桐壺の名を取出したるは、其の花の同色なる藤壺のことを記し出し、其のゆかりなる紫の上を描き出さむ爲の結構にて、此の物語總躰へ掛れる大趣向の存ずる所なり、御部屋と御坐所とを離隔して、他の方々の怨情を深からしめむとの爲にはあらじ。尤御坐

所と御部屋との間の遠隔したるは、他の方々の怨情を深むべき一原因となれるには相違なし。されど、それは、此の大趣向を立てたる上にて、恰も好し、其の桐壺の位置の御坐所と遠隔したるを以ちて、これを利用したるのみ。これ自然の結果なり。餘りに褒め過ぐして趣向の本末を違へ、作者苦心の存する所を輕視せしむべき評なれど、こゝに聊これを辨ず。

さて、この一段をとりつかねて申せど、此の更衣の御局は、桐壺と申して、大内裏の東北の片隅にある御殿なり。されど、數多の御方々を過ぎさせ給ひて行きかひせねばならぬ所なり。陛下には此の數多の方々の御局を過ぎさせ給ひ、間斷なく御前渡りし給ふによりて、他の女御更衣達の其の度ごとに、御心を盡し給ふも、げに尤なる道理と云ふべしとの義なり。

まうのぼり給ふにも、あまりうちしきる折々は、うちはし、わたどの、こゝかしこの道にあやしきわざをしつゝ、御送り迎への人の、衣のすそ堪へ難う、まさなき事どもあり。

○まうのぼりたまふにもは、參登り給ふにもの音便なり。こゝよりは桐壺の更衣の方より清涼殿へ上り給ふ時のことをとかむとするなり。陛下が桐壺へ成らせらるゝ時に、他の方々の御心を動かしたるのみにあらず、更衣が清涼殿へ召さるゝ時にも、亦左のごときまさなきことがありしとなり。

○あまりうちしきる折々は、うちしきるは度重なることなり。更衣の召さるゝ事ばかりあまり度重る折々にはなり、

○うちはし、わたどの、こゝかしこの路に とは、其の通路の打橋や渡殿などの、こゝやかしこになり。○うち橋 は、打渡したる橋の名にて、渡殿と渡殿との切れ目を緊ぎ合せたる橋板なり。○わたどの は、渡殿にて、今云ふ廊下の類なり。桐壺の更衣の通過すべき打橋や渡殿のこゝやかしこになり。○あやし

きわざをしつゝ、御送り迎への人のきぬのすそたへがたう とは、けがらはしきものを蒔き散らしなど、怪しからぬわるさをしつゝなり。○あやしきわざとは、詞をうつくしく云ひなしたるにて、其の實は厠の不淨を蒔きちらし、またある時は厨の汚物を敷き散らしれきなどしたることなり。此の次に、御送り迎の人の衣の裾堪へ難うとある詞にて、さることゝ知らせたるなり。○しつゝ このつゝは上の『過ぎさせ給ひつゝ』のつゝと同じくて、ながらの意にはあらず。かやうのわるいたづらをして〳〵しぬきての義なり。○御送迎への人は、桐壺の更衣附の女官等なり。更衣を送りて清涼殿の方へ參り、また更衣を迎へて御局の方へ還りなどする更衣附の女官等のなり。送り迎への人々は、更衣に扈從して往復すること勿論なれど、此の惡戲の審にかゝりしは、御送り迎への人々のみにはあらず。御當人の苦められしことは勿論のことなり。御當人は勿論、御送迎への人々までと云ふ義に見るべし。御送りは、更衣附の女官にて、御迎へは殿上に伺候する女官なり。陛下よりの御迎へなりと云ふ說あり。これも一渡りさることゝ聞ゆ。其はいづれにてもさまたげなかるべし。されど、余は前說をよしとするものなり。

○衣の裾たへがたう は、彼の不淨汚物の散布によりて、着飾りたる衣服の裾、下白無垢の裾裏なんどを、ごて〳〵と穢すことなどありて、こらへ難きまで思はするなどのことありきとなり。こゝの難うとある所は、難くの音便語なるは云ふまでもなく、この下へ思はするまでといふことを補ひて見る可き所なり。さらでは自他のとゝのへ協ひ難し。○まさなきことゞもあり は、正無きこと共有り なり。俗にいふ無闇無法の事共が度々ありたりとなり。かゝるわるさをして、遺趣遺恨を晴さむとする無法の所業は、頑ましき女中の常にて、昔も今もまゝあることなり。 村上天皇の御時に、小一條の左大臣師尹公の

御娘芳子と申し丶御方は、宣耀殿の女御と申上げて、恰も此の桐壺の更衣の如くに、上の御寵愛を蒙りたりしが、其の時九條の右大臣師輔公の御娘にて安子と申し丶御方は、弘徽殿の中宮と申上けて、恰も此の物語の弘徽殿の女御の如く、上の御待遇も厚かりしかど、双方のきしろひ甚しく、遂には二方の人々云ふに忍びざるわるさをして、悋氣のほむらに身を焦したるよし世繼の物語に見えたるも、正しく此の類なり。此の物語も必竟、これ等の事實を諷刺せむとて書きあらはしたるものなるべし。身分ある方々には、まさかにかゝることはあるまじかれども、それに附き從ふ末者連が、事理をも辨せぬ忠義だてして、躍起となりて御輿をかつげど、彌治馬連もこれを助けて、時めくものに疵付けむとするより、御本人は左までに思はぬをも、一方にれしたてゝ、遂に汚名を千載に遺さすること、世間に儘あるならひなり。謹ひ上にも謹むべきは悋氣嫉妒の情なりけり。

さてこの一段を取束ねて申せど、桐壺の更衣には、かやうの譯にて、數多の人々の恨み嫉みを受けたる事故に、陛下より御召などありて、清涼殿の御とのゐに參り上り給ふ時にも、餘り繁々と打續く折々などは、あるは打橋、あるは渡殿などの御通路のこゝかしこに、ある時には厠の不淨を蒔きちらしたり、又ある時には厨の癈物を布き散らしたりなどして、毎度毎度あやしきわるさをしつゝ、御當人は申すまでもなく、其の送り迎への人々の衣服の裾を汚させなどして、申すも胸惡きやうなるまさなきことどもゝありきとなり。

此度は記事輻輳して漢文學講義を載せず。

第百六十號學園三十四頁上段十六行目訴諫は訴陳の誤植



漫録

神宮御炎上小史（三）

安藤正次

第二　御炎上

（イ）光仁天皇寶龜十年八月五日　［存疑］

歷代御炎上の最古くものにみえたるは、この寶龜の御炎上なりとす。この時の火は内宮なりき。太神宮諸雜事記にいはく、

寶龜十年八月五日夜丑時太神宮正殿東西寶殿及外院殿舍等皆悉燒亡畢于時御正体幷相殿御体併錦御衾中被ニ纏裹一御乍從ニ猛火中一飛出御天御前松樹乃上懸御世利仍宮司忽造ニ假殿一奉レ安ニ鎮御体一以ニ同七日一言ニ上本官一隨則上奏

と、而してその出火の原因に至りては同書亦記していはく、

抑件御燒亡之由來以ニ彼夜戌時許一宮司廣成爲レ成ニ私祈禱一參ニ拜神宮一及ニ于亥刻一退出之間其炬自然落散出來火也

と、諸雜事記の載する所夫かくの如し。されど、學者これをうたがひて、以て延暦の時の御炎上の事の紛れたるなりとなすもの多し。即是の寶龜の御炎上は、正史に見えざる所なるのみならず、その月日同じく、その文また延暦の時のと大同小異なるを以てなり。然れども、事強に速斷すべからず。暫記して疑を存す。

（ロ）桓武天皇延暦十年八月五日

次は延暦の内宮御炎上なり。太神宮諸雜事記にいはく、

延暦十年八月五日夜子刻太神宮御正殿東西寶殿幷重々御垣御門及外院殿舍等併掃地燒亡爰御正体幷左右相殿御体同以從ニ猛火之中一飛出御天御前乃黒山頂放ニ光明一懸也利。（中略）仍宮司且急造ニ假殿一奉ニ鎮御

体且注ニ其由一言ニ上於神祇官一隨則上奏

と、而して出火の原因は、盜賊の火よりなりきといふ。同書亦記さく、

件御燒亡之發者以ニ彼夜子時一數多盜人參ニ入於東寶殿一盜ニ賜御調糸等也而件盜人之炬發ニ遺殿內一天所ニ出來一也

と、然も神名秘書によれば、此の時相殿御神体、弓太刀少しく損傷れはしきとか。恐多かりしことにこそ、

（ハ）白河天皇承曆三年二月十八日

延曆の以後は、久しく其の事をきかざりしが、白河天皇の承曆に至りて內宮外院の燒失あり。此の度は御正殿は幸に御無事なることをゑたりしが、印鑰、及累代の文簿、すべて蕩盡したりといふ。扶桑略記、承曆三年二月の條に、

廿一日庚申伊勢祭主輔經言上去十八日未時太神宮內宮外院六十餘宇掃レ地燒亡印鑰幷累代文簿同爲ニ灰燼一

と見ゆ百鍊抄の記する所亦同じさまなり。而してその出火の原因は知るに由なし。

（ニ）六條天皇仁安三年十二月廿一日

次ぎて仁安三年內宮正殿の御炎上ありき。百鍊抄にいはく、

十二月廿一日伊勢太神宮內宮燒亡正殿東西殿門及內外院殿舍悉爲灰燼御体奉取出之

と、また愚昧記、仁安三年十二月の條にいはく、

廿五日傳聞去二十一日申時太神宮正殿東西室殿再中外院殿舍御垣門鳥居及禰宜內人等宿舘掃レ地燒失但於ニ御体一奉レ出云々件火出ニ來自ニ權神主師朝宿舘一云々子細見ニ解狀一可ニ尋具一者天下之大事何事如レ之哉貴不レ可レ不レ難

と、而してその火はもと權神主師朝の宿舘よりいでたるなりといふ。

（ホ）四條天皇仁治元年十二月十一日

仁安の後、四條天皇の仁治の時、また內宮外院火く、

百錬抄にいはく、

十四日〇中略 神宮飛脚到來云内院外院御輿宿荒壇二間去十一日子刻燒亡奉レ出二御体於二河原一火消之後還御神寶等散々云々

とまた、神廷紀年にその原因を記していはく、

十一日庚午〇中略 北夜子刻内宮六禰宜重仲齋館災燒二御輿宿齋館五十三宇一遷二御於南山一避レ之

と。　　（未完）

主從心得草（上編之續）

諏訪　忠元　寄贈

爰に傍輩の事に付て大事の心得あり。五常辨にいわく、●もしみやづかへせんに、先同僚に信あるべし。主人一人よけれどもとて、同僚群がつて傍りをなせども、虻雷をなし衆口骨を銷といへり。積りては終に危ふきにいたるなり。人の交りはゆゝしき大事也。頂きより足の爪先に及ぶまで、錐を以てさし通されむも忍ぶべし。萬事口惜くいかに腹立事ありとも、忘らぬやうにてうらゝかなるべし。支へていふ事ありともたはむれになすべし。穏にあらども、何となく人も不便がりて、惡敷事有べからず、されどもとて、人の賞せんに付て驕るべからず。歌に、

我よきに人のあしきはなき物ぞ
　身をつゝしみて交りをせよ

蝱雷をなすといふ事は、蝱も多く寄集りて啼時は雷の音の如しといふ事なり。又衆口骨を銷といふは、大勢の者のいふ事は根のない事にても根のある樣になり、あやまりを引出すとなり。

了簡詞書にいわく、●都で奉公人を見るに、皆心掛惡敷少も樂を忘たがり、骨折事つよけれども至て心よからぬさま也。是大ひなる心得違ひと覺ゆ。さまではねを惜み、太儀に思ふなら、奉公せぬがよき也。奉公とは公に身を奉るとの事なれども、何程も主人の旨に叶ふやうに働くべき也。さりながら、主人各別の非分無理なる

使ひやうをなすならで、町家百姓体の輕き奉公は速にいとまを取がよきなり、勞して功なしといふ、さもなくぞ、隨分苦勞して勤べき事奉公の道也。

奉公は我身の爲の奉公ぞ
人に奉公するとおもふな

奉公人たる者此歌の心をよくしれ。又主人たる者は、兎角家來を取立る心を第一に持べし。我子の事は跡へまはし。先家來の行すへを思ひはかるべし。これ上下和合の根源也。若家來の行末を思はず、我勝手ばかりする時は、家來も其心をしりまして、主人に忠義をわするゝ事あるもの也。我身と一体の樣におもふべし。恕の心を先にたて小過をゆるし、鷹揚にとり斗らふべし此方より罪科をあまり微細にせんぎをなし、何かにつけて腹立いからぞ、却て主人をうとみて、家の爲によろしからず。文覺上人賴朝公をいましむる十二ヶ條にいはく、聖賢の道を守れば國家よく治るなり。惣じて不仁不義無禮無智の大將には、士卒必したがはぬもの也。衆離れ、親族したがはざれば　天子も獨夫なり。大將に士卒あらざれば步卒にも劣るべしとあり。又御明君六波羅より鎌倉將軍江の御文章に、總じて召仕候者何ぞ仕落か不調法にてしかり候事これある節は、其者の能得心いたし、向後改めさせ候樣にいたし候事主人たる者の專一に候。予は若年より專ら心掛候故、異見を加へ候者誤りを改めぬ者はなく候、兎角人のあやまち候事ばかり申てしかり候ゆへ、其人心得違ひをいたし。主人をうらみ候樣になりゆき、是まで能勤め候者も、不足の心起りて不勤になり、主人をおろそかにいたし候事、是全く異見のいたし方あしきゆへ、人を捨ると申者にて候、扨異見の致方は、先其者を呼出し、一人傍に取成候者を置、外の者をしりぞけ、常よりも言葉をやはらげ、前に其方はか樣の節何の手柄をいたし、何の節能勤候抔と其者の心をよろこばしめ其後かやうの不調法は其方に似合ざる事と能々申聞せ此以後相改　前々の通りに心得勤候やうに吳々　申きか

せ候得は、其利にふくし身の誤りを存じわけ相改め候者にて候、主人たる者、一人にても能人の出來るやふに致すべし、又何程輕き者にても、科人の出來ぬやふを心にかけ、我身を愼み候事專要にて候、何程利發者にても、主人の目よりは行屆かぬものにて候、増て並々の者は、決してぬけ目勝の事にて可有之候、其行屆かぬ所は、主人より行屆様に心を付、不調法にならぬやうにいたし召仕ふ事心掛の第一なり。召仕候ものを科に申付候は、多くは主人の科にて候、又主人の風儀は側廻りに召仕候者の風俗大切に候、上の事は下へ志れぬやふ、下の事はよく〳〵上へしれ候やふにありたき事に候。とあり。是意味深長にして萬代不易の御教訓なり。よむ人再拜して窺ふべし聖人孔子といへども、是には過べからず、人の人たる者、志らずんばあるべからず、楠正成家來を志かるに、無禮の惡口雜言をいわず。今かゝる不調法は何事ぞ、前々の勤功手柄にも恥よかし、と慈悲心の科目には恨むべきやふもなし。ありがた涙にくれて忠義の心彌増となり。億萬人の上に立、名を萬天に揚る君子のなされかた思召を見るべし誠恐〳〵」

闇路の提燈灯にいはく、丁稚子供は、あまり堪忍すぎますと、つきあがりまして、役にたちませぬゆへ、折節は嚴敷志かり付ますが、夫も堪忍するがやふ御座りますか。答曰それはきつい心得違ひでござる。幼少な丁稚は親方を親のやふに思ふて暮しますゆへ、親方も子の如くに惠みを以てつかいませずは、末が遂ますまい、嚴敷しかりこなしてつかはねば役に立ぬといわしやるが、呵たり、嚴敷するは、害にこそなれ、役にたちませぬ。しかられるがこはさに、目先ばかりを働きまして、蔭日向をする様にこなたが敎るのでござる。親の手元に居ましたら、わがわがきはせまいもの幼年なれども奉公と思へばこそ、朝も早く起、夜もねむたいのをこらへて勤めます。我子で見さつしやれ、そふはせまい人の子も我子も二ツでござらぬ、こなたのやふに慈悲心がござらいでは、能手代は出來ますまい

堪忍の譯が篤と手に入ませぬと、無理な事が多くござる。其譯は、丁雅女子を呼ますに二度も三度も返事がないと、もふはらを立まして、是程呼が耳にいらぬか抔と、大聲で呼はります、最初から外へ心をうつして居まして、呼だ事を聞ませず、大聲になりてびつくりして、扨々短氣なる旦那じやと心の中でさげしみます手前が短慮でござるに依て、なんでもない事に心をまどはし、返事せなんだぐらいに腹を立、丁雅女子に心を轉じうでわるゝといふは、何と愚痴な事じやでござらぬか、かやふな事に氣を付て、堪忍をたもち、ふ便をくわへて使ふてやらしやれ。親々が聞ましても嬉しがりませう、子供心にもよい旦那にあり付たと思ひますれど、自然と眞實に務ます。眞實につとむれど、誰が徳でござるぞ、古人も威勢を以て何せずといはれました。其徳になづくやふに、堪忍の修行さつしやれ。兎角人は堪忍をしてつかふてやらつしやれ。とあり。又家來の不忠もあれども、これは主人の用ひやうにもよる事あるもの也。家來をむざやうにわるくいひ、篤實な人も不忠〳〵とよび立ると、終には不忠となる事あり。心を用ゆべし。是は人のうへばかりにあらず、萬事にある事也

最明寺殿教訓百首（五）

福原菫子寄贈

ねせものは人の歎きをよろこびて
　よきを聞てはそねむなりけり

仁者の心には人我の隔なきにより、人の愁ひを聞ては共に愁ひ、人のよろこびを聞ては共に悦ぶ、ねせ者は我慢の心甚しきにより、人のよき事を見てはそねみ人の仕合せあしきを見ては氣味よく思ふ。是れ己ある事を知りて、人ある事を知らず。不仁の甚しき者也

志らずして能ある人を笑ふこそ
　れのがれろかを示すなりけれ

「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をもしる人ぞ知る」といふ歌の如く、能く物を書くものは人の手のよしあしを能く知る、能く謡ふ者は人の謡のよしあしを能く聞くものなり。能ある者を誹り藝あるものをこなすは、其道を知らざるが故なり。是己がもの知らぬ程を我とあらはし示すものなり。耻を知らざるしれものといふべし。

譽そしる人のふるまひ見るときは
牛はうしつれ馬はうまづれ

同氣相求むるとて、善人は善をほめて惡を誹り、惡人は惡を譽て善を誹る、故に人を譽るも誹るも大事なることにて、我が心の善惡を人に知らるればなり。古語にも、其人を見ずして其友を見るといへり、其友を見てすら其人の善惡を知らるゝに、まして自ら言葉出すをや、洵に愼しめよかし〳〵。

人なみの人とし思ふおろかさよ
人は人とも思はぬものを

貪慾非道にして禮義を知らざる者は、かたちは人のやうなれども、心は、牛、馬、犬、猫にひとしく更に人といふべからず。己は人なりと思へども、只人の皮をかむりたる獸なりといへり、耻べきの至なりかし。

見ぐるしやものいひけはひいつはりて
作り聲する人の口もと

凡そ物ごと、つくろはず飾らずありのまゝなるこそ見事なれ、言葉多きは品少なくして、いつはり飾る事のみ多きもの也。惣じて辯舌利口は君子の貴ばざる所也。

こともなきに見なれぬ人にさしよりて
物がたるこそ見にくかりけれ

人は言葉少きをよしとす、故に問はずんばあへて答へずといへり、さなきだに見馴ぬ人にもしひて物語りするは、媚を求むるに近し。子路がいはく、肩をそびやかしてへつらひ笑ふは夏畦よりも病り。とて、人に媚を求むる者をいたく誹りたるも、此輩を云ふならん

か。

年若き人はよろづをつゝしみて
詞すくなきふるまひぞよき

若輩なる者のさし出口をきくは、いたく見にくきものなり、其上云ひそこなひや多からん。只知りたる事をもしらざるふりになし、得たる事をもえぬふりにて、物しづかに愼しむこそ、奥床しくてよろしけれ。

着るものも人に異るはむようなり
只よの常の裝束をせよ

衣類は時の風俗に隨ひて、何となく目にたゝぬやうになすべし、分に應せぬものを着かざり、又異風を好むは皆驕りの沙汰にて、其人の姿により、心まで見えすく心地するものなり。能々つゝしむべし。

ゆふぐれにさしたる用もなき身にて
坐ろにありくことをとゞめよ

夜陰に坐ろありきするは、盗賊惡黨の難あらんも計りがたし、其上若輩の者は猥りなる事も出で來ん、としし行かで叶はざる事あらむ用心堅固なるべきなり。

いかばかりしたしき人の家とても
門にて名して後にこそ入れ

常に出入していか程に心安き間なりとも、こはつくろひして後入るべし。主も時により、折にふれ、行儀をとりみだし居る事もあるべし。又隱密の内談もあるべし、されど、猥に入りて主人を辱しめ、又は内談を聞たるやと疑かはれて、はからざるわざはひを受る事あるべし。禮記に、門に入らんとして聲必あぐ、主人をいましむる爲なりと。又戸外に二つの履ありて、内に聲きこえざる時は入らず。とあるも、これ等のことをいましめたるならん。

梅雨の旅の記

佐々豊水　寄贈

十三日　雨降、辰の時ばかりしに今日もいづる、かが

み野を行に、
　さみだれの雲にてる日のかげもみず
　　かがみの野べの名こそかなしめ
行ゆきて大田川舟わたしあり。終日ふりみふらずみ、夕つかたは日影も見えけるに、今日はをやみなく降けるゆゑ、水かさもまさりてみゆれどほどなく川もとまりなんに、よくこそけふ越けれど、人々よろこびあへり申の刻より雨はをやみぬれど、雲かさなりて明日も亦雨ならんとおもふに、
十四日　朝より雲はれて、山路を登下て行、山のすがた、松の木立など寫繪のさまして、水の流も見どころれほき所にてぞある。今日は道もちかけれど、申にはまだはやきころ大久手の宿につく。
十五日　辰の時ばかりに立出る、今日も雨ふらねど、山路を一里ばかりも歩行にて行、しばし休み、又駕に乘て行、此所に西行法師の塚のあると聞、
　立よりてみるにその世ぞしのばる丶
　うたびとの名ののこるふるづか
と心に思ひつづけて行、雲起り空かきくもり五月雨の降出るかとおもへど、俄に雲重り夕立のけしきみえ、遠かたには鳴神の音もきこえて、雨いたう降くる、行先いかならんとむねうちつぶれしに、しばしありてはれ、日影もさし出けれど、野路を行とて、
　ゆふ立はほどなくはれててらす日に
　　ひかりあひたるみちしばのつゆ
園原山の庵へも立寄てみる。此道は石坂にて、暮過るころ馬込の宿につく、夜もすがら雨いたく降音の枕にきこえてねもやられず、木曽の山谷雨降ぬれば石などぬけ落、あやふき所とかねて人のいふをききゐたれど、行先いかがあらんと思ひわびぬ。
十六日　雲もはるゝけしきなれど、いと嬉しく、辰にははやきころ宿をいづる、又山路を登り下して行、ここかしこの峯に卯花のさかりなれど、
　信濃路はなつまでゆきのこるかと

みねしろたへにさけるうのはな

雲はれて照日の影もみえけるが、又山山より雲立のぼり雨にならんかと心うくて、

雨ふらむゆきやなやまんたちのぼる
くもふきはらへ木曾のやまかせ

といささか晴をこひしをりしも、空はれければかちをゆかんと出立しに、照日のあつさにたへかねて又駕に乘りて山路をゆく、大きなる岩どころどころにあり、蔦かづらのはひまつはれたるさま、花の木紅葉の梢をみるに、春秋の詠はいかにや、

さぞとおもふ花ももみぢもなつ木たち
ひとつあを葉にしげるやまみち

すべて木曾の山路は見所おほきところときゝしにまさり、山水のありさまつくりいだしたるやうにて目とまりぬ、

石はしるみづもゆくてにおとたてて
ながめは日日にかはるやまみち

此所五月雨の降つづかむいかがあらんとおもひて、

雲はれて木曾のやまぢをゆくほどは
さつきもあめのふらであらなん

心にいのるもかたはらいたしや。山水を筧にてとり、はにふの宿ながらも、心をやりて作りなしたるさまなり、木蔭涼しくみゆれどしばし休らふほど、申の時過ころにや、夕日も西にかたぶくころ、すはらの驛につく。

十七日　辰過るころ出立御關所ことゆゑなく通り、人人安堵しよろこびあへり。それより鳥居峠を越、ならゐにて晝休をし、夕つかたしばし歩行をゆきて本山の宿に暮ちかきころつきぬ。

十八日　五月雨ふり出て桔梗が原を行ほど風もそひしが、鹽しり峠にて晝休し、此所の山は芝生にて花あやめなどここかしこに咲いで、旅人の手をりて、菅の小笠にさしなどして行め、興ありてぞみゆる、午時過よりは空はれ、峠を越るころは日影もをりをりみゆる、諏訪の海を右にみて坂を下る、けしきいふばかりなし。此所より富士もみゆるよしなれど、雨の名殘の雲はれ

やらず、むなしくて、

　富士といふれやまのすがた見せもせず
　　ゆきのはだへをくもにかくして

と狂しつゝ行く、秋の宮へ詣で、末に過るころ諏訪の宿につく、

十九日　辰の時ばかりに今日もいづる、春の宮へ詣で和田峠を越けるころ雨はふらねど、雲かさなり、行先もみえず、もと來し道をかへりみれど、供人の登りもみえず、星くそといふ石を人人拾ひぬ。早苗とるころなれど、所々にれり立てこのわざをする、まだとりわけぬもあれど植わたしたるも所どころあるをみて、

　わせれくて今よりみえて植わたす
　　かたへはしげる小田のわかなへ

東都にては賤男のみこのわざをするをみけるに、賤女もうちまじりてあるをみて、

　しづの男とみまがふばかりれり立て
　　田のものさなへううるをとめご

申過るころ中久保の驛につく。

二十日　辰に過て宿をいづる、今日も雨ふりける、望月にて晝の休をし、左に淺間山みゆるといへど、雲とぢてみえず雨の少し晴まあれど、雲を風のふきしく、

　淺間やまそれかとばかりあまぐもの
　　しばしはれゆくたえまにぞみる

富士淺間と名高き山なれど、此まゝにみずやはあるとおもふ、

　あすはみんよのまの風にふきはらへ
　　あさまがたけをかくすうきくも

ふりみふらずみとかふして暮ちかきころ追分につく。

廿一日　今日も辰の刻ばかりに出立、野路をゆく、雨はふらねど昨日の名殘雲はれがたく侍りしが、風の吹れふ絶間に、淺間山高根は晴てまぢかくみゆ、笛吹峠を越て坂下にて晝のかれ飯くう、鳴神音づれ、雨ふりくれど、此宿にしばしがほど見合居る、ほどなく、雲はるゝけしきなれどやどをいづる、横川の御關所を滯な

くとはりぬ、今日は妙義山へ詣のぼらんとおもひしがど、ひまどり申にも過ぬるに山へのぼらむ日もくれなんといへど、むなしくて暮ちかきころ松井田へつく。

廿二日　朝日立のぼるほど宿をいづる、笛吹川歩行わたりなり。昨日の雨に水かさまさりけれど、とかうして向の岸につく、供人の越ほど芝生の原に駕をとどめて居るうち、四方をみわたせど空ものどかにうちかすみ、遠近の山々の中に日影もみえ、けぶりの立のぼるこそ淺間山なるらめ。

　今朝はたかねにくももかからで
　立のぼるけぶりにぞしるあさまやま

妙義山へものぼりふし拜みめぐりて、板鼻にてひるのかれ飯くう、打晴し松原をしむしかちにて行く、暮すぎてからす川をわたりぬ。此ほとり螢の飛かふさまいと興ありてぞみゆる。初夜過ころ新町の驛につく。

廿三日　道のほど今日はちかけれど朝もさのみいそがでいづる、かんな川橋をわたりてゆく、上野武藏のさかひ川なるよしきくに、むさしの國へ今日より入ぞとおもへど、嬉しくも又旅の名殘もおもはれてふりかへりみれど山々もあとに遠ざかりける。深谷にて休み、宿のほとりなる熊谷寺へも立寄てみよかしといへど、行て寶物あまたみる、中に經盛卿の自筆の書などあるをみるに、いにしへをおもひやられて袖をぬらしける。くま谷の宿には暮ちかきころつきぬ。

廿四日　辰過ころ宿を出る、一里ばかりゆきて休むうち、雨ふり出しける、今日は終日ふりくらし、道もはかどらず、上尾のほとりより日も暮ければ、松ともしからうして戌に過ころ大宮につく、荷物もおくれて物ごと心にまかせず、旅のうさ今日こそおもひしらるれど、人々とかたりあふ、去年の此下りにも、國々の名所古跡見物しけること誠に年頃の望達けるをよろこぶ内にも、よし野へもゆき信濃善光寺へも立よる心ざしなりしかど、あまりに旅の日數も重りては、大暑にもなりなんといふに、此二所にゆくことをはぶきける

心殘りてくやしとぞおもふ。

廿五日　空はれて辰に過ころ出立此所より、は右に始て富士をみて、

　さみだれの雲はよのまにはれゆきて
　　むかふやしろきゆきのふしのね

午に過ころ板橋につく、辰の口よりも山内、白金よりも遠藤、久保町より南波など此所まで來りさまざまのおくりものあり、伊藤もむかひにとてきたりしかど、故郷へつきしおもひして、まぞしうち絶し對面のうれしさ、なにくれと物語しつつよろこびの酒くみかはし、亥に過ころかりねの枕をとる。

廿六日　今日も空はれて宿をたたんとせしところに、辰の口より、白杉、小堀などきたりけれど、まぞし物語のうち、宇野もむかひにとてきたりぬ。とかうして巳の時ばかりにいづる、昨日の雨に道もよからねど、本道はよけてわきの道目白の方へゆく、茶店にてまぞし休み、それよりまづ辰の口の御館に立寄しに、對面したまひ、何くれのもてなしに、御物語はつきせねど、みづからの宿へ日のくれぬまにつけよとそのかされて、心を殘し未に過るころ辰の口を出で、我住所へ申に過ころかへりつきぬ。

豐水曰、此の令夫人は肥後國、宇土藩主、細川大和守源興里朝臣の御内室なり。細川系圖云熊本藩主、細川越中守源宣紀朝臣、第十二女、幾姬、享保十年乙巳二月十一日於江戸出生、寛政六年甲寅四月十一日於江戸卒、年七十。號二清源院澗月宗流大姉一、葬二于東海寺中清光院一母岩瀬氏

因曰女鑑第百四十二號に此令夫人を細川宣紀朝臣の第四女とせしは第十二。女の誤なれば此所に改む

小竹園佐々豐水　寫しぬ

筐底楮餘（一）

紫光

○人を正さむよりは、先おのれを正せ、と。古哲の金言宜なる哉。而して家庭にありて子女を薫陶する第一要

諦、また實に茲になくもあらず。昔々物語といへるものに、風俗禮讓のおとろへたる原因をのべていはく、

五六十年以前は、子は親にむかひものいふに、手を付て、また親のいふ事をきく時も、かしらをさげ手をつく。さるによりて、家來の主人へものいふに、幾度も手をつきかしらをさげしを、近來は、父母の前にて手をつく事はさておき、大あぐらかく子も有り、詞づかひも惡しく、是は何故むかしとかはりたるなれば、親々子を急度あへしらひ候得ど、親々の身もたしなまねばならず氣がつまる故、自分に樂を好む故、子のあへしらひも急度なく、たはことロを心のまゝにたゝく故、子供、友たちのやうに自墮落になりし。

と。以て稽古照今の料となすに足るべし。

○中世以後朝廷に於ても、幕府に於ても、共に女子の漸く政治に干與するに至りしは、官制職制の大に弛廢せしによるものなるが、讀史者の大に注目すべきことなり。長橋局のごときは、その一例なり。貞文雜記に之を記していはく、

一、長橋局といふは、勾當内侍の事也。女中也。女中に内侍司と云官あり。天子の御側にて勤る役なり。其かしらを尙侍と云。その次を典侍と云。其次を掌侍と云。この掌侍は四人あり。四人の内、第一の掌侍を勾當の内侍と云。勾當内侍の居らるゝ役所の名を長橋局と云。殘三人の掌侍は上に氏をつけて、源内侍藤内侍などゝ云也。四人の內、後になりたるを新内侍と云。勾當内侍、勅をうけ給はりて書出す文を、女奉書と云。沙門醫者等の官位などは、勾當内侍の取次にて上卿へ申傳ふるなり。女奉書の事は内侍宣とも云也。内侍宣ヲダイシセント云フハ又別事ノナリ末ニシルス

と。而してたゞに沙門醫者等の官位のみならず。國政の大事などにたづさはることも、是よりぞいできにける。

杖日記

千稲

一、八橋

綠蔭繁り盡して、梢愈暗く、梅の實鈴の如く熟して、花橘の匂しめやかに、折柄五月雨の空、雲は低く垂れて、絶間なく落ちしきる玉水の音、蓮の若葉に露重く、夕暮の蓬生の蔭に水雞の叩くも淋し。

一日、れり重りたる群雲は淸き朝の風に拂はれて、一重散り二重散り、日の光薄く漏れ來りぬ。日頃、雲の絶間あれかし、雨の晴間出でよと待構へし身の、是に於て如何で寸時も猶豫ふべき直に帽を傾けて家を出でぬ。八橋の古蹟を探らんとて。

洋々として岡崎の西端を流るゝ矢作川は、日頃の雨に水嵩まして奔激岸を嚙み、矢の如く流るゝを渡り、波にゆらるゝ泊船の苫より、立登る煙の縷の如く棚引くを見送りて、阿通の淨瑠理に名を知られたる淨瑠理姫の墓を訪ひ、露を踏んで東海道を西に進む事數町、並木の松風蕭々として音淸く、早苗とる少女も謠ふ鄙歌の節をかしく、やがて暮戸を經て、宇頭といへる村に入り、暫し村端の榎の下の茶屋に憩ひて渴を醫し、兼て此の村に盛りに花菖蒲を造る家ありと聞きしが、歸りにもとて出で立ち、老いたる者若き者の、日に照されて滴る汗ぬぐふ暇もなく、營々として麥穗扱き集むる間を過り、大濱茶屋にいでぬ。こゝも昔は東海道の一町なりしも、時移り世變りて、軒を並べし家も、今は篳門を閉して軒漏る雨をしのぎ得ず、徒らに朽つるに任せて人烟稀に、時々馬鈴の鏘々たるを聞きて、懷舊の情を起す事幾許か。

此村の西端に、滔々として南に向つて流るゝ一道の水あり、兩岸の綠柳影流に落ちて、赤蜻蛉二ッ三ッ其上に舞へり。これぞ此國にて有名なる明治用水にして、幕末の時より幾度か企業し幾度か蹉躓し、遂に明治十五年岡崎町及び此邊りの富豪の手によりて成功せられ

ぬ。源は矢作川より出で、、奔流數里、これが爲に萬頃の田は灌漑の便を得たりきと、其功眞に偉なりといふべし。アハレ此水の流れて常に盡きざる如く、其功業の偉又常に傳はりて消えざるべし。

悵然として暫し佇立する時、杜鵑一聲雲に鳴いて西に飛ぶ、仰ぎ見れど、日既に中し、松影婆娑として地に印し、馬を追ひつゝ唄ひ行く馬子の聲獨り高し。

かくて高低常なき道をたどり、或は田の畦を傳ひ、或は小魚走る小川の流を渡り、幾度か艸に憩ひ幾度か汗れし拭ひ、漸くさゝやかなる茶屋を見出して走り入り、仰向に打伏したるまゝ、涼を入れて疲を休むる事暫時、こゝに八橋の道を問へど、老婆出で、懇に指し示し、最早程近しといふ、さらばと勇を皷し杖を振ひて喘ぎ〳〵走りぬ。

此道を左に折れて又畦道をたどり、菖蒲花咲きて枇把の實熟したる家に就きて再び問へば、こゝぞ八橋村にして、村端に一寺あり、古蹟あるは即ち其處と。

村端のさゝやかなる寺は八橋山無量寺といふ。軒傾き瓦落ちて、幽艸徒に蔓り、緑陰暗く繁りて、寂々たる木魚の音幽に響きぬ。

まづ寺に參して四邊を徘徊すれど、庭は荒れに荒れて、五月躑躅火の如くもゆる彼方に池あり。枝を交へて生繁る木の葉に覆はれて、露ほろ〳〵とこぼるゝ下に、杜若繁れり。花散り葉緑に、をりからの風に、波の如くに靡きぬ。こゝぞいにしへの八橋の蹟なりとよ。

古、在五中將が、身を要なきものになして、住馴れし都を立出で、道なき道を踏分けて、いづこ定めぬ旅枕、櫛風沐雨やう〳〵三河の國にたどりつき、折しも春の暮、若葉漸く繁き澤邊の木陰に憩ひて、足の疲を休めたりといふは此處か、折からその澤邊に咲きみちたる杜若を眺めて、暫し旅の憂さを慰めたりといふは此處か、かきつばたの五文字を句のかみにすゑて、胸の思をうたひいでつといふも此處か、アハレ都を忍ぶ情に堪へず、涙を揮ひて、「唐衣きつゝなれにし妻しあれ

む、はる〳〵きぬる旅をしぞれもふ」と聲悲しく口誦したる時の心は如何なりけん、こを聞きたる人の心は又如何なりけん、立ちて西を望むも雲徒らにとざして都は既に遠く、俯して行先を思ふも、前途茫々夢の如く、霧深き荒野の露の草枕、重ね重ねて末はた如何になり行くらん、思ひ廻せむ、涙愈落ち、旅衣の袖絞る暇もなく、糒のほとぶも忘れたりけん。

アハレ在五中將、身は竹の園生の末に生ひ立ちて、胸に多少の經倫を抱き、小野の深雪を分けては夢かと驚き芥川にさまよひ出てゝは露と消ゑざりしを嘆き、身を摧き心をいためしゝるしもあらで、折から盛なる藤浪の色うつろはんともせず、吾事々皆齟齬して、世も合はず時にすてられ、果はかよわき大宮人の思ひもかけざる、雲くらく風さむき百里の長程に出立ちぬ。夷住み瘴烟ふかき東のはてに、縈々たる其身をすてんと定めし胸中の感慨如何なりけん。

松の幹に身をよせて暫し佇立めむ、懷舊の情泉の如く湧き出で　恍然として時の移るをも覺ゑざりけり。

一僧あり、我傍に來りて我を呼ぶに驚き、涙を拂ひて顧れむ、日は既に西に傾きて森の梢にかゝり、風烈しく起りて、僧の袈裟の袂幕の如く飜へれり。

僧は我を一室に導きて喋々として寺の由來を說き、且つ寶物と稱ふるものを示しぬ。されどげにも點頭かるゝもの少けれむ、よき程に辭して寺門を出でぬ。門前の小童草笛を鳴らして我を送り、屋上の家鳩は我を見れろしてクヽと鳴けり。

夕日を負うて疲れたる足を引きつゝ、再び宇頭に來り、花菖蒲造れる家を訪へむ、主人喜び迎へて、園に導き、花に就きて一々說明の勞を取る、或は大輪、或は小輪、紫白咲き亂れて美觀極なし。

暫し此處に憩ひて、再び勇を奮ひて足を速めぬ。暮鴉鳴いて又時にいそげり。

我村を流るゝ小川の岸に來り着きて、來し方を顧れむ、日は全く暮れて、烟は山を籠め森をつゝみ、弦月

の光は幽に西にきらめきて、露をよぶ螢火、風に舞ひ草にすだけり。

才くらべ

蓬生屋女史

上杉景虎の才

足利義輝、日來猛猿を畜ふ。此猿猛きこと、熊又は虎のごとく、人を見れば、必ず怒つて跳躍する故是非なくつねは之を押入に入れおきぬ。たまたま景虎京に到りぬ。名は景虎とはいへど、勇力は如何ならん、はかりくれん、幸此の猿を出して試みんとおもひしを、景虎はやく之を察知し、侍臣鬼小島彌太郎に一計をさづけしに、彌太郎はそはおもしろき事なり、何の猿め、柿の實におどらせくれんずとて、手をうつて笑ひ興じ、にはかにつゞれたる衣に身をやつし、南無阿彌陀佛のおひづるさへ著て、きたなき巡禮となり、菓物を懷にし、猿の住む所へ行きて、之を猿に與へしに、もと貪食の猿奴、菓物を見るより大によろこび、かみつき喰ひつくして、なほ後をねだらんばかりに彌太郎が顏を守りをりぬ。佯りやすきは獸心なりけり。彌太郎もほゝゑみつゝ又菓を押入の外に置きけるに、猿奴、臂を延ばして之を取らんとするを、彌太郎其臂をむづと握り、之を押木にすりつけしに、流石の猛猿も俄かに押へられて、力出でず、臥してきゝと泣くさまをかし。さて翌日、景虎彌太郎を從へ京に入りて、義輝を見しに、義輝かねてはかりしこと察せられたるとも知らず吏をして猿を引き出ださせ、景虎が過ぎんとする處におきしに、貪食性を失へる猿奴、彌太郎を視るより、たゞ首を低れ地に仆しぬ。景虎は徐々歩行して容易く通り過ぎるぞをかしく、智は勇の上に立つものにこそ。

板倉勝重の才

板倉勝重は京都の所司代にて、公平正大、有名なる裁

判人なりしが、其頃ある富商に、伯、遜、季、默の三人の子あり。伯と季とは性よろしからず、獨り仲子いとよかりけるが、其父ひそかに仲子を召し、一瓢を授け汝を我が嗣となすべし、之は其證なりとて與へたり。又伯と季とにも各同じほどの瓢を與へ、同じ事を以てしたり。さて父みまかりけり。伯立たんとす、仲も又遺言ありとす、季も又我れ嗣ぐべきの道理を云ひ、互に瓢を證とし爭ひやます、遂に之を所司代勝重に決せんとし互に瓢をとり出でたり。勝重その瓢をとり、つくづくと見くらべけれども、少しも異なる所なく何れも決せんやうもあらざりけるが、沈吟やゝ之を久しうし、乃ち三瓢を几上に植てゝ見しに、仲子に授けしものひとり立ちて、伯と季とに與へしものは皆倒れたり。之を以て仲子立つべきものとなしたりとかや。立つべき者は立ち、立つべからざる者は立つとも倒るゝの理を以てしたるは、商人ながらいとをかしく、之を几上に樹て試みし勝重が智も、またくまなかりけり。



板倉重宗の才

重宗は勝重の子にして、之もまた父に劣らず賢智父に代りて所司代となり、よく人の善惡を判知し公平正大、人の稱する所たり。ある時二人の婦人ありて、一人の子を互に已れが子なりとて爭ひ、遂に所司代に訴へ出でたり、重宗をかしき訴かな、人の親の生みし子、我れ何を以て其出つる所を知らん。たゞ引はりて、已が方へ引きつけ得しもの、子とえたらむには如何とて、はゝ笑みつゝ云ひけるに、即ち二人、子供が左右の手をとり、互にひき合ひぬ。二人同じ力にて引けた子は何方へもよれず、手もちぎれんとするいたさに、思はずわつと泣きさけびぬ、一婦はおどろきて手をはなしたりしに、一婦が力一つとなり、容易く已が方へ引きつけ、かくてもはや我が子なりと引きはこるを、重宗之を見、叱して曰く、我れ今つく／＼と見るに、彼れ力足らぬにはあらず、子が泣く音におどろきて手を放ちたるは、子に傷くを恐れて敢てひかざりしならん。然るを汝は泣く音も他處に、傷みをも思はず ひきはりしは、正しうわが子ならぬ人情、たゞ服すべしとありしに、その婦また爭はん言葉も出ずして、そのまゝ理に服しぬる判智のほど聞くも感服の外なし。

書きあつめ（三）

草の屋主人

關ケ原の役に、徳川忠吉公血戰、敵の首をとる事數しらず、東照公其英武をめで給へむ、人もまた之を稱しぬ。さて東照公忠吉を已が嗣となさむとし、諸將之を議し、皆心を忠吉に屬くして、天下はいまや忠吉が掌におちんとせしに、大久保忠隣ひとり之を爭ひて不可となし、固く取つて動かざるため、其議遂にやみぬ。人皆忠吉の嗣となるを得ざるは忠隣の言による也と、忠吉が面のあたりにもかげにも之をさゝやく言たえざりけるが、忠吉は少しも恨ます、人々がさゝめ言をきゝて曰く、吾れ世子に於て弟たり。且つ才智庸劣、たゞ

勇ありしとて、何かは天下を握らん。忠隣が諫めはもとより當れる事にて眞忠なり。もし忠隣が諫めなく、我れ父の志のまゝ嗣となりたらんには、世の中またよもぎの道のたえはてんに、忠隣が忠言よく上にたがひ下に同せざりしによりて、かく、天下に謳歌の聲をきくに至れるなりとて、中々に之を敬重し、江府に至る毎に必ず其家に寓して、往事は更に意に介せずとなり。賢者が心は他に異なれり。之をよまん姫たちは皆その人のこゝろをよく悟り、正邪を分ち決してよこしまの恨をかもさゞらんやう心がくべし。

○

大猷公の侍臣を永井某とて、或時病にかゝりけれど、家居して疾を養ひぬ。やがて病癒ゑ、公に見ゑしに、公、米の價はいかばかりなるやと問はせ給へど、永井氏知らずされど、海のものは如何ばかりなるやと問はせ給へど、知らず、さては雪花菜の價はと問ひ給へどそれまた答ふる事能はざりけり。公よろこび給はず、あゝ細事は人皆かくの如し、之を老中輩に問ふべからず、汝は久しく家にありたれど、必ず之を知るべし、されど問ひ試みて、下情を知らんと欲せしに、知る所なきの甚しさ汝これ下情に通せずとて、歎息せられしに、某は實に赤面俯伏して心なきを謝しけるが、それより必ず先づ物價を問ひ、然る後必ず公に出しぬ、されど公は復とはず、やがて公薨じ給ひたり。某も亦老いたり、されど、某は昔日の事を忘れず、毎日人を市にゆかしめ、米麥魚菜の價を問ふに、家人あやしみて、其故を問ひぬ。されど、某はたゞ笑ひて答へず、後病あつくまさに死せんとせし時、子孫を召し、語るに其よしを以てし、且つ曰ふやう、今となりて之を問ふも益なけれど、只君が戒めを忘れざらんと欲するのみと。あはれあとのまつりと人云ひて笑へど、心づかざりし事もし戒められなど、例へ後益なきことなり共此の如く守らど、又過ち少なからんに永井氏の如き良臣の心にて、良女とならんもの之を鑑とせど、又益あ

らむ。

笠子笑談集

金津常十郎

夢中の夢

流にさかのぼりて、鱗を順にし、淀に入ては水面に跳る、其名を鮎と云。心にしたがひて浮沈する内、忽ち夢覺て見れど、わが形は蝸牛なり。扨は暫時の夢なりけりとて、竹のしづ枝をつたひ、殻を露にうるほしてぬら〳〵とはひわたれど、はや竹の先へ出かゝり、あたまをふりて見廻す内、がくりと落てびつくりする拍子に、夢がさめて眼を開けど、吾は枯枝にとまりて居る梟なり。さて〳〵危き夢を見た事かなとて、そろ〳〵日もくれかゝりけるゆゑ、ちとはたらきて餌食求めんと思ひ、かなたこなたとさがす内、草の中から蛇が一すぢ出けるを、こいつをしてやらんと飛びれるゝ、其羽音てがつでり目がさめて見れど、吾が形は牛なり。あゝとんだ夢を見た、ちと足をのさんとてうんとたちけるが、そこに寢て居る牧童がびつくりしておきる音に、牛がまたびつくりして目をあけて見れど、我躰は人なり。扨も扨も牛に成りた夢はめづらしいと、獨言してあくびしけるが、しかし今の形が人と成て居るも、またなにぞの夢ではないか。

註に曰、一氣より萬物成生せられて、その變化窮なし。然れども、物々其化せらるゝことを知らずして、化して後吾形を知る、たとへど水中の垢化して河虫となり、河虫亦化して蜻蛉となる、こゝに於て河虫何ぞ前の水垢の時のことを知らんや。亦後の蜻蛉となるのことを知らんや。其元は只一氣にして能萬物を化生す、人を始め、皆自然の一氣に化せられて生形を得る物なれど、自分細工になる物とは思ふべからず。人成れど人相應に働きができ、蟲と成れど蟲相應の働きができるなり。萬物同じことなれども

人は只知巧のまさりて成たる物ゆゑ、自ら萬物を凌て貴しとす、天は自然にまかして上下貴賤の私なし生死往來して萬物絶に盡さず。

空家のぬし

往還の邊に一ッ家の茶店ありけるが、人里も遠きゆゑ、夜はあるじも恐しく、すさまもる松風さへ、もしや妖物ではあるまいかと、夜着引かぶりてかゞみ居けるが、或夜裏の戸をほと〳〵と叩くものあり。亭主もおそろしながらそと顔を出して誰と問へは、彼もの云やう、われは此邊に住むものなり、あまり夜もふけて淋さまゝ話に來たり、爰あけよとさもかなしげなる聲にて云けるゆゑ、氣も魂も宙にとび、扨こそ妖ものが來たりとて、只南無阿彌陀佛を杖に、ふるひ聲して夜の明るをまちかねけるが、やう〳〵曙の鐘の響と共に、旅人の聲が聞えけるゆゑ、先は案堵の思をなして、はや窓のすきもしらみけれど、その戸の外をのぞき見れど、敢て妖物も居らぬ様子ゆゑ、早速店を開きけれども、今では夜中はとても住がたきゆゑ、晝ばかり居て茶を商ひるけが、雨のふる日は何とやら氣味わるく、角々の闇き處には何やら囁くやうに思ふゆゑ、今では雨のふる日もすみがたく、晴天の日ばかり居けるが、旅人がとだゆると、後の方からめち〳〵といふ音がするゆゑ、是ではとても爰に住がたしと逃出けるが、其行く道の側の田に、若き百姓共の耕しながら話すを聞けど、先度の晩おどしたのちは、二三度おどしに往たれども、はや夜は居らぬと見ゆといへど、一人の百姓云、さればこそ、きのふの夜も、おらがおどしたれど、音のせはぬ道理にこそ、茶屋の爺めはもふ夜は居らぬはずじやといふゆゑ、さては百姓共が慰みにおどしよつたものと腹だちながら、いざやわが家へ戻りて、今夜おどしに來たらば目に物見せんと思ひ、足ばやに歸りて、家も遠く向に見ゆる比、はや夕ぐれの空になりしゆゑ猶更足早に急ぎけるが、程なく家に近づき、内をうかゞへど、くらき處に狐が二三疋こそ〳〵として居るゆ

ゑ、あるじはきもをつぶし、あゝ此度はれぞしではないと跡をも見ずしてまた迯出しけるが、それより此家は狐狸のふしどとなりぬ。

註に曰、此一ッ家は、人々の躰にたとへ、亭主は人々の本心にたとへたり。只初は氣味のわるいこともかりで、躰の内に本心が居らるゝけれど、其氣味のわるいが積りて恐しいになり。そうなると、彼の本心と云亭主が、少しづつ尻ごみなさるゝ處へ、胸に恐しいと云請人の心をたのみて躰の内にござる本心殿を、尻からこそむすゆゑ、そこで其本心と云亭主がいよいようろたへ出して、終には躰の一ッ家を追出され、其跡のくらがりへは、狐が亭主に成たり、狸が亭主に成たり、其段になると、鬼門と云奴がのしてみたり、又三年塞がたれ込たりして、仕たいまゝに躰をつかふなり。此のやうになると、本心殿が少し氣が付て戻りかけても、色々な妖物や兕どもが取ついて、本心殿を慰み物にするなり。それゆゑ、一生亭主なしで終る人躰が世界に澤山あるものなり。何卒人々本心を外物の爲に奪はれぬやうに、正く磨きて躰内の亭主になさるゝが肝要肝要。

梅の下風（六）

白魚女史

旅の用意ももとよりあるにあらず、古里となりはつるもいとをしからぬ垣、今日にも立たむたゝれん。なれど流石に住みなれし垣のたもと何となうはなれ難く、折角めぐりあひたる伯母母子、妻とすれど、殊に親愛さへ加はり、且つは草葉のかげの父母がふんばに近きとて、又逢ふよしのあるにはあらねど、遠ざかるはいよいよ悲しく、人もをしめど、已れもうしろがみ引かるゝ思ひ、三日四日とのびるを、何の又あはれずと云ふにはあらず、やがて歸りて家起さんも我が辛抱次第、何のたゆたふ事かはと思ひ、荷物も体もかろく旅



立ちしは、享保の初めの年の秋半ば、吹く風もうら悲しく、野も山も露みだれて、旅の衣手しぼるもいとあはれまされり。ひるまは流石はやれど、夕はひとり旅いとゞ心細く、家には人の如何に思ふらんとかへりみれば、夕ぎり深くまよひふたがるも身にしみて、思はずたゝずみうち守る足のもとに鼈甲の櫛のおち居たり、思はず拾ひとり、安きものにもあらぬに、此まゝ地にふみ入れんもいとをしと、其まゝ拾ひて、懐に収め、とやかう思ひ沈むを我れから心はげまして、かへりみ〳〵すゝむ柏原、一里塚の彼方より小さき少女の走り出で、旦那様、どうぞ手前方へおやどり遊ばしてと袖をひかへてすゝむるを見れば十二三歳、まだ若草のはへもそろはぬ髪をわらもてくゝり、たすき甲斐甲斐しくかけたる様子、まめやかにもあどなくも思はれ、夕方と云ひ、殊に足もすゝまねば、一層とまらんものとて、傳吉はさらばとて、少女が誘ふまゝうしろに従ひゆくに、二三町もへだゝりたる彼方の家まで至り、いざとて内へ入れぬ。家はせまからねど、軒かたぶき、壁くづれ、蜘蛛のあまねくかけわたして人もなきけはひなり。我が家におとらぬ軒見ては、しのぶの軒いとゞ忍ばれ、又小さき女が、かゝる家をひとり守るは如何なる仔細にや、とはまし、いぶかしとばかり不審にうでこまぬきてしょんぼり座る一間を隔てゝ、せきせくけはひの聞えたり。はては病人にや、何にもあれをかしき家哉、とくとはましものと思へど、他に客もなく、にはかの客用意もなく、少女はたゞ走りまはりて、やう〳〵茶を汲みきたるのみなり。一時間ばかりありてはじめておふろへ入りませと云ふに、くたびれなほしとふろへ入り、さてまた半時ばかりありて夕げやう〳〵とりいで、おそう侍りたりとのことわりも、まだ少女の口ばもるに、とはんも小さき者心やすしと、傳吉さま〴〵家の事をとへば、たゞ母をらずなり、父病にて腰たゝず、僕も下女も皆さりて是非なければ、妾ひとり旅行く人を強ひて引き來つれど、皆此軒を見て

は、れどろきて、怒りては他へうつりとまる人多く、たま〳〵情ある人の一人二人たまさかにとまり行かるゝのみ。誠にむさくろしき庵さぞないぶせくましまさんと言葉もおとさき、されどやう〳〵に云ふ世事なるべし。傳吉はそゞろ同情にむせび、して父上は如何なる病にやと尋ぬれど、たゞ老病とのみ答へて、涙にかきくれ彼方へ立ち行くもあはれなるに、傳吉は父がむかしなど、いよ〳〵思ひ出られ、そゞろ心にむせびけるが、己れも貧者、めぐまんにものなく、されどあまりの不びんさに、懐をさぐり先きに道にて拾ひし櫛をとり出し、之れ先きに道に拾ひたるものにて、はもこばれをれど、くさりても鼈甲、賣らむ幾程にかなりぬべけれど、こを參ゐらせんに藥餌の料とし給へとあるを、少女は見るよりれどろき、且つよろたび、そは我が母が形見にとゞめたる品、日來、大切になしをりしを、先きふとさしたるまゝ他へ行きて落したるとも心づかでありしを、拾ひて賜はりしは何よりの賜物とて、櫛をどをし頂き、つく〴〵と涙をもよほすに、そは佛の賜なりけん、さても幼きものが辛勞、さてそはくるしからめ、已れも早く父を喪ひ、母に別れ、かやうかやうとまづ已が身を語りて、今より江戸に行き一かせぎかせぐよしなど語るに、少女もいよ〳〵涙にくれ、れわかし申すもはづかしけれど、我が家はむかし森田屋と申して、今少しは榮ゐたる軒、妾はせんとて、父母が中のひとり娘、蝶よ花よとかしづかれ侍りしに、一とせ母なる人みまかり、後又母をすゝむる人ありて、れはやとて花と云ふ娘のあるものを迎へしが、はじめはたゞ妾もいたはりくれしを、妾が性のあはぬにや、後にはいとつれなく、はては父を怒らせ、てうちやくせんとして其まゝ手も躰もふるへしまゝ遂に足もたゝずなりにたりと、しどしはむせかへりて又詞なかりしが、やがて又涙をぬぐひ、後は母も又わるしと思ひしにや父にわびしかど父はきかざるを、もとは妾故、妾もとも〳〵わびて父のわけくれふるへ罵るをなだめ〳〵て

をりし程に、母は、近所の男とかねてより思ひあひ、ある日家のものかきあつめて家を出しまゝ歸らず、家は傾き、小者は去り、父はなほ腰たゝんともせず、今は妾を見られては、やくなき後妻もちしとかりに苦勞さするとぞかりにて、ふるへなき給ふ悲しさ、どうぞ今一度壯健にして不孝の罪あがなはまほしと思へど、介抱も心にまかさでと泣き入る彼方にはしきりにせきけく音のくるしげなり。



竹風　佐々木高行

朝風にたけ生さやぎてやまかげの
のきをすゞしく露ぞこぼるゝ

湊川懷古　西三條公允

みなと川かへらぬ水のいにしへを
思ひいでゝもぬらすそでかな

山影映水　高崎正風

しつかなるやまの心やうつるらん
かげみる水もうごかざりけり

山家夏　竹屋光昭

谷がはのみづ音たかくきこゆなり
なつはすみよき山かげのいほ

河邊梅雨　押小路公亮

みづかれし音無がはも名のみにて
岸になみうつさみだれのころ

獨影映水　水野忠敬

いけ殿の軒につらなるともし火の
影水ぞこにうつりけるかな

夏月涼　諏訪忠元

さゞなみのよするまに／＼池水の
うつるもすゞしなつの夜の月

山新樹　宮地嚴夫

若かへてさくらのみどりうち変り
なつこそ山はゆかしかりけれ

夕水鷄　北郷久政
夕づきの影もすゞしきわがゝどの
を河の末にくひななくなり

梅雨久　鎌田正夫
此なつは卯月のそらにふりいでゝ
つねより久しさみだれのあめ

樹陰螢　大口鯛二
川かぜにふかれながらも青やぎの
かげをはなれずとふほたる哉

夏枕　小出粲
柱にもよりつかれたるなつの日の
ともはひるねのまくらなりけり

對鏡　遠山英一
くもりなき鏡にむかふしばらくの
こゝろを常のこゝろともがな

晴後遠望　岩崎勝從
見るがうちに村雨はれて山もとの
まつのはやしに夕日さすなり

昔　三浦千春
開けゆく御代にあひながらともすれば
むかし戀しくおもひけるかな

氷川の勝伯が手馴つる玉のを琴の緒をたゝむふりししらべはきく人もなしとよまれけるをきゝて
きゝつけむ耳はなき身も玉ごとの
その調こそゆかしかりけれ

首夏月　下田義天類
るりのごと澄みたる空の夕ぐれに
いとよりほそく月ぞかゝれる

和歌の浦の蘆を柄にて張りたる團扇に　三輪義方
なつがりのあしの短夜ふしながら

手にこそならせ和歌のうら風

崇賢門院　佐々豊水

梅町の殿の名かぐはしさみだれの
しめりがちなる時にはあへども

夏瀧　木庭芳香

涼しさの秋をかけてやながるらん
なつのあつさもしらいとの瀧

幼稚園　後藤春藏

すなほなるにはの敎におのづから
なびくもやさしなでしこの花

夕立　伊藤純三

ゆふだちのあめになるかみ音羽山
瀧のひゞきもなほまさるらむ

夏月明　安齋篤敬

たへがたきひるの暑もわすられて
つきかげきよしなつの夜の空

朝梅雨　蜂須賀隨子

短夜のまだあけそめぬこゝちして
あしたをぐらきさみだれの頃

遠時鳥　前田朗子

ほとゝぎす卯の花垣をよそにして
鳴しはくものいづこなるらん

市中梅雨　柳原愛子

さみだれの雨にゆきゝの絶せぬは
みやこの市のちまたなりけり

夏雲　松平健子

打わたすなつ野の末のくものみね
くづれておつる風ぞすゞしき

谷新樹　小池道子

軒ちかくしげるわかばの露ちりて
なつまださむしたにの下いほ

避暑　遠山いね子

しる人のおほくつどひてはこね山
夏はみやこのこゝちこそすれ

夏夕　大河内峯子

月影もいまかみゆらんをちこちの
蚊やりのけぶりくれはてに鳧

樹陰水　佐藤艶子

日蔭もかせふきたゑぬやなぎはら
したゆく水はなつなかりけり

夏露　坂田泰子

夕だちのなごりの露のおきためて
みどり色そふなつ木だちかな

新島　中島歌子

新じまの名ぞなつかしき君がやと
ともに成たるものならなくに

田上螢　服部磯子

賤がやのかきねはなれてさなへ草
うゑし山田にほたるとぶなり

庭新竹　安東菊子

目かれせぬ庭の竹の子いつのまに
親とひとしくのびたちにけむ

雨後夏月　土岐幾子

夕立のなごりつゆけきこずゑより
すゞしくのぼる月のかげかな

夏筵　清水菊子

たてぬきにみどり色こき草むしろ
めぐみの露のふかくもある哉

詠武藏新都歌　藤井行麿

天雲の　向伏きはみ　目路とほく　果なきはらと　うけらはふ　武藏の國の　むさしのゝ　廣きはらはもとこ川の　利鎌にかゝり　やちまたの　町にしなれゝど　四方の人　來寄つとひて　さし櫛の　齒なみのもころ　天離　ひなぶりしるき　家つくり　いらかしきなへ　三百とせ　にぎはひにしか　現神　吾太王　御親ら　御代しらすべく　手束弓　八島の波の　いにしへに　立皈らへは　神やまと　初國しらしゝ　橿はら

の畝火の宮を　やましろの　葛野に遷し　山並の
よろしき國と　河水の　さやけき里と　こゝにしも
都ひきまし　宮柱　太しかしける　うら安の　平安の
宮を　ふる宮と　あたら置して　明らけく　治る御代
と　鳥がなく　東の國の　さくら田の　千代田ひらか
し　さす竹の　大宮うつし　百寮　れき給へれぞ　い
くとしも　いまだあらねぞ　時の間に　都と成て　新
墾の　道もせきまで　馬車　四方に行かひ　としなみ
に　家なみしげれり　春は花　秋はもみぢを　かざし
つゝ　民ゆたかにも　大御世の　にぎはふ見れぞ　う
れしくも有か

社頭首夏といふことをよめる歌

野崎宗英

ちはやふる　神路の山は　春風も　よきて吹きけむ
春雨も　よきてふりけむ　とこしへに　匂ひし花も
いつしかに　うつろひはてゝ　梓ゆみ　春の姿を　な
つ衣　うすきにかはる　はふり子の　袂もかろく　朝
風の　ふきのまに〳〵　うちなびく　榊のわか葉　露
ちりて　すが〳〵しさに　めてしその　花の梢も　ゆ
かしさの　鶯の音も　今はまた　思ひわすれて　みつ
ばさす　青葉のかげに　ほとゝぎす　今やなのると
仰ぐこゝろかな

反歌

神路山さかきの若葉つゆちりて
風なつかしき夏は來にけり

かたみの露はしがき

人の世のたざめなきぞかゝられたくかなしきものやはある。中村季君は、幼きときより學の道に心をとゞめ、身を脩め、家をおこすべきわざをよくをさめ、親の名を揚ぐべきかたに思を深め、萬の事に意をもちゐ、母とじによくつかへ、子らをよくはぐゝみ給ひしことはいまさらにいふべくもあらずなむ。さるを、世の中は、

よきことにまがごといづくならひをえまぬかれぬものにて、千代もといのりしかひもなく、はゝそ原常なき風にちりうせ給ひしのみならず、たなぞこの玉とめでいつくしみたまひし、其の眞名子源吾ぬしをさへうしなひ給へるは、うれたくかなしきことのきはみなるべし。かれうからやから、ともどち、其のよしを言ひ傳へ聞き傳へて、とほき國々の人々まで、かなしみの歌をよみいでおくりたるが數おほくつもりけれど、かたみの露となづけ、一卷となして御前に奉ることゝはなりぬ。あはれなき母とじも、なき眞名子のみたまも、天翔りつゝ其歌どもをきゝとり給ひなど、いかにうれしとめでよろこばひ給はざらむ。其のこゝろざしをあはれとれむかしみ給はざらむ。かくひと言かいつくるは淺草公園にすめる大畑弘國なり。

正誤　第百六十一號文林　足立正枝の山郭公の歌　くらけ山は　くらふ山の誤植

雜報



●奇特なる媼　かな。愛媛縣、松山市に住める白井卯三郎が妻、きくといへるは、今年八十七歳になれるが、このほど、手づから白木綿を織りなして、畏きわたりに奉れりとぞ。

●秋田の媼　齡八十歳になれるが十一名ばかり相集ひて、老年の事業につきて、計畫せりときく、壯なりといふべし。

●救老會　これは、新領地臺灣にての事なり。去し十八日、臺北より左記の電報到達せり。誠に美擧といふべきなり。

兒玉總督は今回救老會なるものを催し十七日を以て開會せしに八十歳以上の者三百名其内百三歳の者もあり

高老者には身体不隨者も有て會する者無慮七百余名兒玉總督の祝辭あり男女二老の答辭あり紀念票を贈與す士人の演劇或は洋樂の余興あり頗ぶる盛典にして本島未曾有の事に屬し人心を感動せしめたること尠少ならず

●華族女學校の卒業證書授與式　は去し十八日、その學校内にて擧行せられたり、尾崎文部大臣も之に臨めり。

●貞婦　むかしも今も、かはることなし。これわが國風なり、山口縣玖珂郡、廣瀨村の人、濱田そめ女は文政十一年の生れなるが、人となりて、隅松五郎といへるに嫁げり。後、いくばくもなくて、夫におくれ、寡居すること今に五十餘年の久しきにわたり、ことに舅姑まだ世にありしほどには、よく之につかへて、おろそかならず、つねに、勤儉にして、家政をおさむといふ、このごろ縣知事にきこえて、賞金を賜れり。

●孝子　美作の國の人、坂本善次郎といへるは、近き頃、家漸く衰へ、かてゝ兩眼、明を失へるに、妻も亦、病みて癈疾となれり。子なる隆太郎といへるは、今年十一歳なるが、朝はつとめておきて、父母を看護し、さて、學校にゆきても、放課時間には、必、家にかへりて、みとりおろそかならず、至孝の聞、近郷に高く、縣知事にも聞えければ、金二圓を賜はりて、賞せられたり。いと、可憐の孝子なり。

●又　おなじき美作の國、久米北條郡、倭村、神代といふ處の孝子。岡本七郎がもとへ、東京彰善會より、彰徳狀をおくれり。

●又々　香川縣、大内郡、福榮村に住める廣瀨英造といへる、一少年は、わが父の精神病にかゝれるを憂ひこれが快復を祈らんが爲にとて、ぬば玉の黒髮すりおとして、高野山に登り、雲照師が弟子となれりといふ。「かゝれとてしもぬば玉のわが黒髮は」の歌もあればねて、いとあはれなり。さて今一言いはんに、これももとより至情は至情なれども、佛門に入れるいさゝか心得ず、いかさまにか、すべもあるべからんに、四國は

りと、佛法の盛に行はれし地なれぞはこそ今にも其の風の流れたるならめ、いさゝかをしき心地す。

●螢雪　あつめて、苦學せしといふは、今はむかしのいましめ草なり、今の御代に生れ合へるもの志だにかたからぞ、あながちに、螢雪をたのまずとも、自、道はあるべし。金澤の中學校生徒原勉といへるは、學資に乏しくて、みづから、新聞紙の配達を業として、夜毎に、夜半より曉にかけて、之を、しをへて、さて學校に昇るときく。かくてもなほ、學力人に劣らず、素行も亦、同輩を壓すとは、感ずべし。浮薄をならひの學生諸氏、宜しくかへりみて可なり。

●質素の風　を奬勵すること誠によし。大御言にも「恭儉已を持し」と宣へるにあらずや。さきに新潟栃木等の諸縣知事は、令を布きて、學校生徒の奢に流るゝをいましめき。今又、秋田市の各學校、一致して、生徒の風儀を矯正せんが爲に、喫煙を止め、また校内にて、絹物を着するを禁じたりといふ。よきことなり。一身のみもちは、ひきて、一國にもかゝはるべし。

●女學生の着袴　の風盛なるは、奢れるにはあらずこれ禮なり。いとよし。

●仁慈　は我が國、古來祖先の遺風にして、人の誠なり。必しも、宗敎者の專有にあらず、身のほぞ〳〵に、なさけは加ふべきものなり。仙臺市、に住める菊地庄吉が妻、某は、みづから單衣數十枚を仕立てゝ、貧しくして、よるべなき者ぞもに、人知れず、與へしが、なほ、今になるまで、しぞ〳〵金品をめぐみし事さへ、何時となく、人に知られて、一市、知るも知らぬも、この美德に、感ぜざるはなしとぞ。

●めぐみ　世には、學、深厚にして、識、高遠なる士すらも、あらぬ學説になづみて、人情にうときものなきにしもあらず。たとへぞ、彼の優勝劣敗を說くもの、世は皆、生存競爭、寸時もやむ時なし。そて、力を極めて、弱をたふして、已、獨、强たらんとす。こ

れ、禽獸の道にして、人道に非ず。おのが人たることを忘れて、眼を下界にのみ注げる僻見といふべし。それ優勝劣敗は天理なり。故に、優者は、宜しく劣者をたすけて、生存をたすくるこそ天の道にして、また人の道なれ。こゝようせずば、ふみあやまつべし。さて貧しくして、よるべなきものを惠むは、我が國、祖先の遺風なるは、今更なり。子孫たるもの、大に顯彰して、之を示す所なからざるべからず。こゝに、濟本蓮子といへる人、左の書面にそへて孝女のよるべなきをめぐまる、物はもとより、多しとはいふべからねども其の心やふかし。記者も、その心ばへを思ひやりて直に之をその許におくりつ。孝女のよろこびやいかならん。

此頃の御暑さは格別におはしまし候折しもお勇ましく女鑑におつくし被成候御事喜しくお祝申上候世に女子の爲にものせる雜誌澤あり候へどもゆかしきものは誠にすくなく候私は女鑑を師とも友ともいたしこれを讀み候を何よりの樂しみといたし居候さてとや百六十一號の誌上に本所入江町の中村おねよ樣孝行の御事拜見し實に感じいり候就てはおはづかしく候へども何かのはしにもと金五十錢お米樣へ贈呈いたしたく候ゆゑ誠に申上兼候へどもよろしくお取計ひのほど呉々もお願ひ申上參らせ候かしこ

七月　　大坂天滿

濟本蓮子

●親子の至情　栃木縣の人、久保熊太といへるは、わが長男の六歳になれるが、二歳の弟を脊負ひながら、あやまちて、井に落ちたるを救はんとて、已も之に投せり。さて、熊太は、二人の子をさゝげながら、水に浸れること一時間ばかりなるに、隣遠くして、之を知るものなく、四歳になれる女、見て、之を人に告げしかば、こゝにはじめて、救はれしと。いふ。危を見て、救ふに、我をかへり見ざるは、誠に至情なり。

●保良公局　といへるは、香港にあり。わが國の婦女子の、或は、他人に誘拐せられ、或は、みづから、

心まどひて、密航せしもの等を、懇に保護して、歸國の便をわたへしこと、すくなからず。既に四十餘人に及べるを以て、こたび、賞として、賞勳局より銀杯一個を賜はれり。

●跡見女學校の極醜とて、このごろ、やまと新聞に連載せり。見れど、腹たゝしき事どかりなり。十が十まで、虚か實かは、いまだしらねども、とにかく、よからぬ噂なり。

●婦德會の長たりし雪野秀雄のことは、前號に記したりき。彼れ、捕へられて、罪に伏せり。會員なる情婦山田くらも、自首せりときく。忌々しき不德會なり。餘黨も亦、再はたゝじ。

●日光にての裸跳のことは、さきいましめつ。このほどその會場主たり、はた勸誘者たる某は、罰せられたりときく。さもあるべし。

●醜をいふは、德にそむけり。然れども、いひ出てゝ、いましめすど、巷にふみ迷ふものもなしとは限るべからず、周防の國に某といへる女あり。このごろ語をなして曰ふ。男優あり、女優あり、然るを壯士俳優ありて、女壯士俳優なし。妾等揮ひて、之をれてさんといへりとぞ。異なる目的を立てゝ、正しき所に目をつけず。惑へりといふべし。

●大女　秋田市、新屋町、に四人ありといふ。身のたけ、五尺三寸五分より、五尺六寸二分に至れりと聞り。

●女の髪　一すぢにて、大象をもつなぐべしといへる諺は、他に含める心ありてなり。今きくに、一人の髪は、五百人の躰をも、釣り上るに、たふべしとぞ。

●六十七歳の媼にして、乳汁の出ること年わかき婦女にれとらず。わが孫を乳養せりと聞くもめづらしきは美濃の國人、後藤某が母なり。

●寢冷の害の甚しきは、今更いはじ、折柄よく心せられよ。札幌の小學校にて、醫師をして、女子生徒の身躰を檢せしめしに、其の七十人中、四十人は皆、病者なりしとなり。これもと裸躰にて睡眠し、或は、うたゝねなとするに寢冷したるよりれこれりとぞ。

●大男もあるものかな。躰は大きなるがよしとてかくては、不自由も甚しかるべし。物は、ほどなるがよきなり。瑞西の人、ハーリー、モールス、カノンといへるは年四十八歳にして、その躰量六百封（わが凡七十貫）あり。胴のまはり百吋、胸のまはり、七十吋、身のたけは、五呎十吋なり。かくふとく、たくましかれども、舞蹈に巧にして、游泳をもよくすとぞ。この兩親は、人なみ／＼なれど、この弟もまた、四百封の躰量ありといへり。このほどカノン航して、米國に赴きしが、上陸せんとしける時、躰の重さあまりて、棧橋の板、忽、折れたり。なほ、歐州旅行中は、滊車に乘らんとする毎に、何處にても、客車に乘ることを拒まれ、つねに、貨物車にのみ乘せられしときく。この男は、歐洲中の大男ともいふべき男なりとぞ。

●牛乳治療法　といへど、牛乳を治療するにはあらず、牛乳をもて、人の病を治療するをいふなり。英國のドクトル、ツランスパールといへる人は、この牛乳を用ゐて、傳染病及惡疫を治すべき法を發明せりとぞ。はじめ、牛乳を容れたる器に毒物附着するに、牛乳の之を吸收するを見て、醫學上に應用せんとせしよりなりといふ。この方法は、まづ、毛布を布きたる床に、微溫牛乳を充分に浸したるシーツをのべ、病者を、その上に横臥せしめて、輕く之をつゝみ、さて、一時間ほかり經て溫湯にて全身を拭ひ、或は、少時入湯せしむるなり。この療法によりては、痘疫熱病ジフテリア等を治するを得べしといふ。

●人口繁殖の終期　なりとて、或る統計學者の説くを聞けど、地球を保持し得べき人口は、五十九億九千四百萬人を超過すべからず。然るに、現時世界人口の統計は實に十四億六千七百萬九千人にして、十年間に八分の比率を以て增殖せり。斯の如くにして增進せば今より百七十四年を經て、其極度に達すべく、來ん二千零七十六年は即ち世界人口繁殖の最終期なりといふ只管きけど、心細きやうなれども、あまりに心にかけすぎて、大空の落ち來んを恐るゝにも至にべけれど、今は先、聞くがまゝをかくなん。

歌の庭



八月五日兼題　百合花

天

ほこりがの世にはならはで草蔭に
にほひゆかしきひめゆりの花　愛媛縣松山市水舟町　美濃君子

地

置く露もおもげに見ゐて姫ゆりの
はなのすがたぞやさしかりける　日本橋區廣丁一丁目廿四番地　諸井くら子

人

里の子がまぐさにそへし姫百合の
花はいづこののべにさきけん　薩摩國鹿兒島市藥師馬場町十五番戸　川畑よし子

秀逸　（二十首）

しとろなる賤が垣根もひめゆりの
はなのさかりはなつかしき哉　三河　永井さい子

なつかしく花こそさけれ賤の男か
とかまにもれし野べの姫ゆり　肥後　田代艶子

夏草のしげみかなかのひめゆりは
よそに知られぬ露やおくらん　伊豫　竹村竹里子

おひしげる夏の野草のはかくれに
いろかゆかしきゆりのひと本　東京　河田いし子

繁りあふむくらの中にましりても
すかたけたかきひめ百合の花　羽前　蒲生粲子

うなだれて何をか思ひなやむらん
つゆおもげなるひめゆりの花　東京　目黒佐喜子

こゝろして他し人にな手をられそ
我かやまのをのひめ百合の花　備前　西艶子

百草もしほれはてたるひざかりに
にほひすゞしくさける姫ゆり　東京　高島酉子

世の中のけがれし塵をよそにして
にほふもゆかしひめ百合の花　後志　村上きよ子

草深き野へにはをしや我かにはに
いざうつしてんひめゆりの花　東京　吾妻ちか子

こゝろして刈り殘しけむ夏くさの
しげみにまじる姫ゆりの花　伊豫　藤村民子

むくらはふ賤か垣根もいろはゐて
よそめゆかしきひめゆりの花　肥前　長澤ひで子

しづかやの物ともなし姫ゆりの
つゆに笑みぬる花のすかたは　筑前　林久子

あつさにはみたれなからも庭草に　廣島　竹腰隆子

身をひめ百合の花そゆかしき

たをりなはひとやとかめん姿さへ　出雲 山根久子
名さへやさしき姫ゆりのはな

草深きあら野のなかにあらそはぬ　肥後 徳永萬壽子
すかたゆかしきひめゆりの花

うきふしにたふる操かあつさをも　東京 邑上詞雅子
いとはてにほふひめゆりの花

夏草にましりてさけとひめゆりの　伊豫 長谷川まつ枝子
はなのゑまひのなつかしき哉

撫子のあはれもあれとそのさまの　伊豫 宇高松子
ゆかしさまさるひめゆりの花

八千草の繁きかなかにましれとも　山梨 名取正代子
けたかく見ゆるひめ百合の花

(以下原稿着到順)

夏くさのしけれるなかにましれとも　石井豐子
目にたつものはひめゆりのはな

しけりあふ夏野のはらをわけゆけは　溝口貞子
かせにもなひくひめゆりのはな

朝よひのつゆのなさけやかゝるらん　野口信子
名もなつかしきひめゆりのはな

夏くさのしけみかなかにおひたちて　仁保甚子
こころありけににほふひめゆり

夏くさのしけみにましるひめゆりは　住山幾子
はなしさかすはたれかしらまし

くさむらのしけみか中につゆけくも　磯部しう子
ひさりさきたるひめゆりのはな

ひめゆりの花はやさしくさきにけり　田代綾子
しつかつくりしかきねなれとも

しけりあふあれのゝ草にましれとも　浦井豐子
すかたやつれぬひめゆりのはな

なつ草にましるさゆりもあさつゆを　中山さみ子
かさして咲けるすかたうつくし

のはなへてみさりなりけり姫百合の　横山柳子
あかぬいろかをつさになさまし

奥やまのけかれしちりをよそにして　森しげ子
きよけに見ゆるひめ百合のはな

夏の日のあつきもなさかまけしをさ　所佐以子
咲き初めにけりにはのひめ百合

我かなりをいさめ顔にそ咲きにける　林瑟子
のへのさゆりのすかたやさしく

草むらのあをはかなかになつかしく　齋藤千子
咲けるさゆりのはなそやさしき

世の中のけかれしちりをよそにして　遠藤貝久子
すかたけたかきしろ百合のはな

夏くさのしけみかなかにいろはねて　遠藤露子
すかたみたれぬひめゆりのはな

たね〳〵になかるゝたにの水かゝみ　橋本さよ子
かけるへ見ねてひめゆりのさく

夏の野のよもきささもにしけりつゝ　大谷友子
いろもゑましきひめゆりのはな

庭もせに咲きほこりたるゆりのはな　山内かず子
ひさまちかほに見ねにけるかな

しけりあふちくさのなかに秋またて　種田うた子
さくひめゆりのはなそゆかしき

しつのをもあはれさみてか夏のゝに　羽田三緒子

かりのこしたるひめゆりのはな

百くさのしけみに咲けるひめゆりの
　ばなのすかたのゑまはしきかな　稲原菫子

夏の野のしけれるなかにたちまじり
　さけるもゆかしひめゆりのはな　金森俊子

庭おものつちさへさくるあつき日に
　みる目すゞしきひめゆりのはな　輕部壽子

白つゆのひかりをそへて咲きにける
　すかたなつかしにはのひめ百合　安孫子かづ子

けさ見れはほこり顔にも百合のはな
　ちくさのなかに咲きいてにけり　谷口なほ子

世のちりもかゝらぬやまの松かけに
　にほひいてたるひめゆりのはな　島山百合子

夏くさの志けみかなかにましれとも
　やつれさりけりひめゆりのはな　島山千代子

あれはてし垣根かくれににほふかな
　たかうしろ見のひめゆりのはな　島山千惠子

たれにかもこゝろよすらんには草の
　身をひめゆりのはなのすかたは　島山清子

みなつきのてる日の色に咲きなから
　かきほのさゆりつゆけきやなに　島山雪子

庭のおもに見るめやさしく姫百合の
　はなさきそめしきのふけふかな　浦和秀子

色のみかこゝろまてこそにほひけれ
　みさをゝまもるひめゆりのはな　久米定子

あさちふのしけみか中に生ひいてゝ
　すくれてにほふひめゆりのはな　大坪修子

なりけれはあさのまゝなる露ちりて
　いまさらをしきひめゆりのはな　岡里富子

色のみはもゆるはかりにみゆなから
　にほにすゞしきひめゆりのはな　岡里富子

さきならぬ雪さもみせてきよらけく
　つゆもてかさるひめ百合のはな　綿野りき子

夏の野のくさはかくれにたゝひさり
　めにたちて咲くひめゆりのはな　栗生菊子

かきりなきうへも思はすしほらしく
　した見てさきし百合のはなかな　酒井かつ子

もろ〳〵の草にひいてゝ咲きにほふ
　やまの百合こそけたかゝりけれ　押元銥子

外つくにのひとにみせはや山ゆりの
　くさまに生ひてかをるすかたを　押元勳子

誰かためにかをりはたつかゆりの花
　いさもさひしき茅生のなかに　押元佐喜惠子

なつくさのしけみの中にさき出てゝ
　ひさきはにほふしろ百合のはな　遠藤千代子

こさたらぬしつかまかきの色さしも
　しられぬものはひめゆりのはな　白石藤子

土さくるなつのあつさもしらすして
　木かけにさけるやまゆりのはな　大槻たつ子

なつ草にましりてさけるさ百合はな
　たならまほしくおもほゆるかな　矢島すけ子

なつ草のなかにひいてしるゆりはな
　こゝろありけにみゆにけるかな　大槻光子

夏くさのしけみにましるひめ百合の
　すかたけたかくおもほゆるかな　林環子

しこ草のはひこるなかにほのみゆて
　かをりはたかしやまゆりのはな　大亦隆子

夏くさにやつるゝにはのかきねより　佐野讃代子

けさめつらしくゆりのさきたる

夏の野のしげみが中にもゆかしきは　此のころゆりのさけはなりけり　澤田せい子

なつころも裾野のかぜに氣たかくも　かをりゆかしきひめゆりのはな　松山たか子

まくさかる末野のはらのあさかぜに　すゝしくにほふひめゆりのはな　大木昌子

立寄らんかげもなつ野の日ざかりに　しをれてにほふひめゆりのはな　澤田さた子

ひめ百合のはな咲きしより朝よひに　こゝろにかゝるはなの上のつゆ　伊藤かつ子

咲き匂ふやとのかきねのひめ百合の　はなのあはれをとふひともがな　大木みつ子

かる人もなつ野のくさはこゝろせよ　しげみにさけるひめ百合のはな　高崎頼子

夏くさのしげみのおくにほの見ゆる　すがたゆかしきひめゆりのはな　湊谷いく子

世の中のちりをさけたるやま百合の　はなのすがたのたかくもある哉　谷口ふさ子

ひと本は折りてかへらんひめゆりを　またこむまではそこになかめん　秋葉濟子

たれひとりとひもせざれは山ゆりの　うなだれがほにうらみてそ咲く　北原すへ子

夏くさのしげれるなかに咲きいでゝ　いよゝゆかしきひめゆりのはな　青木たま子

ねこしゝて垣根にみんとおもふかな　野へにさきたるひめゆりのはな　濱田直子

夏くさのなかにましりてふたつみつ　いろなつかしくさけるひめゆり　三好梨花子

かりそめに植ゑにしゆりの花さきて　ともにもみするきのよけふかな　山下靜野子

たをや女のうちしつゝたゝすめる　すがたにもにしゆりのはなかな　坂井みつき子

奥やまに咲けるさ百合のやさしさも　うき世のちりをしらすがほなる　小田三千代子

見てもなほあかぬ色香のひめゆりの　ふかきにほひのなつかしきかな　山田璋子

荒はてし賤がかきねにおひいでゝも　すがたみだれぬひめゆりのはな　鹽田富士子

今朝みれは雪やふれるとおもひけり　にはしろたへに百合のさけるが　高桑若子

わがにはのゆきと見まがふ百合の花　ふきくるかぜの香にぞ知らるゝ　高桑美津子

百合花のつゆもにほひて咲くころは　のもりがいほのうらやまれけり　高桑濟子

わが國になだゝるゆりのはなこそは　とつくにびともめつるなりけれ　加藤さく子

わが袖にかをだにのこせひめゆりよ　わかれけるよのともとなさなむ　佐久間八重子

なつくさの茂みがなかにほゝゑみて　おもはゆげなるひめゆりのはな　八木沼里子

草ふかきしつがかきねにさきながら　すがたけだかきひめゆりのはな　岡田鶴子

ゆく人も手をりかねてやしつのをが　かりのこしたるひめゆりのはな　森田てふ子

夏くさのしげみがなかにましりても　すがたけだかきひめ百合のはな　小林志げ子

山ひめのかざしなるらんさゆりはな　宮崎みき子

憂き世のちりのさらにかゝらて

せみのなく片やまかけのさゆりはな
さかりのいろをたれに見すらん　小林ちよ子

夕たちのなこりのつゆもしらゆりの
こほさぬさまそゆかしかりける　村上ゆき子

夏くさにひさもさましろひめ百合の
つゆにひもさくすかたなつかし　船木つぎ子

夏くさのしけみかなかにましりても
けたかく見ゆるひめ百合のはな　金原吉子

丈たかきちかやかなかにひめゆりの
しのへさしろきはなのいろかな　舘脇ます子

山かけにひさもさたちてひめゆりの
ひさこひしけに咲きにけるかな　池谷さみ子

ひめ百合のかさしの玉さ置くつゆも
見ねてすゝしきにはのおもかな　柳田里子

吹く風につゆもみたれてひめゆりの
はなのこゝろやわひしかるらん　中桐李子

夏草のみたるゝなかに姫ゆりの
すかたけたかきいろそ見ねける　戸塚鉄子

刈る人のなさけのつゆやかゝるらむ
さゆりのはなのいろあはれなり　玉井隆子

八千草のなかにましりてたゝひさつ
咲けるもゆかしひめ百合のはな　照井やへ子

夏の野にひさりなになかしのふらん
葉かけにさけるひめ百合のはな　大沼よし子

るき匂ふさゆりのはなのすかたには
つゆにもあらぬこゝろこそおけ　加藤いち子

あつさには猶かたふけさゆふつゆに
いろにひまさるひめゆりのはな　加藤壽枝子

手かひよき賤のそのふにさきそめて
かをりゆかしきひめ百合のはな　安村歌子

なつくさのしけみか中に咲きてすら
ひさめにもれぬひめゆりのはな　野崎屋壽子

うゑおきしをしへの庭のひめゆりは
いろなつかしく咲きにほひつゝ　熊谷たい子

夏くさのうちにましれさおのつから
いろなつかしきひめゆりのはな　赤羽もさ子

賤のをもこゝろしてゆけなつくさの
しけみかなかにゆりのはなさく　中條露子

夏くさのしけれるなかにゆりのはな
ひさりなまめくいろもゆかしき　本田鶴子

年ことにはなまさりゆくゆりのはな
きみか八千代にさきにほふかな　高橋すみ子

よもきふのなかにましれるゆりの花
つゆおもけにもさきいてにけり　田中りん子

手折りてもなほなつかしく見ゆる哉
すかたやさしきひめゆりのはな　長澤いゑ子

すゞしけにさけるひめゆり色はねて
あつさもわするしつかかき根は　原口いち子

つくろはぬ賤かかきねのひめゆりの
はなはなか〱なつかしきかな　東郷つれ子

なつくさのしけみか中にましりても
なほもけたかきさゆりはなかな　水野はつ子

世の中のけかれしちりをよそにして
にほふもゆかしやまゆりのはな　大高つや子

なつの野に草かるわらはこゝろせよ
さゆりのはなそいまさかりなる　高桑多賀子

なき友のみたまにこそはたむけまし　渡井もさの子

いろうるはしきひめゆりのはな　萩原章子

うれしけにぬるゝもしらて少女子か
たをるさゆりそゆかしかりける　矢田部信枝子

少女子をいさめかほにもゑみにけり
にほひすゝしきひめゆりのはな　後藤のふ子

なつの日の土さへさくるにはの面に
にほひすゝしきひめゆりのはな　富士村幾子

なつかしくはゝその陰にさきいてて
ゑみかたむけるひめゆりのはな　吹田たけ子

なつくさのしけみか中にたゝひとり
咲くひめ百合のすかたゆかしも　奥村あい子

賤かやのみるひともなきのきかけに
やさしくにほふひめゆりのはな　藤田たけ子

山さとのしつかまかきにさきいてゝ
なかめにあかぬひめゆりのはな　村井やす子

なつくさはさまさまあれとその内に
ゆかしさまさるひめゆりのはな　稲田直榮子

よの人はいかにみるらんひめゆりの
にほひゆかしきはなのすかたを　赤林かほる子

たひゝともゆきゝまれなる山かけに
やさしくさけるひめゆりのはな　澤田やゐを子

わけ迷ふみとりののへのあちこちに
ひとをまねけるひめゆりのはな　井上梶子

夏くさのしけみのなかにやさしくも
ひときはめたつひめゆりのはな　日吉あさ子

くさかりのわらへのかまに残されて
いろかやつれぬひめゆりのはな　土持ふて子

まくさかる賤もこゝろやありつらん
野へにのこれるゆりのひともと

草しけみあれにしやとにゑましけに
咲けるもあはれ百合のひともと　太田睦子

草むらにひとしほいろのほのめきて
さくもやさしきひめ百合のはな　山内萬子

なつくさのしけれるなかに百合の花
ひときはたかくさきにけるかな　山田いさを子

つくろはぬしつかふせやの庭もせに
やさしくにほふひめゆりのはな　眞島千鶴子

あらかねの土もさけなんあつさにも
にほひすゝしきひめ百合のはな　道廣八重子

おのつから清きすかたにさきいてゝ
いろかひさしきひめ百合のはな　小松靜子

夏くさのしけれるなかに生ひたちて
すかたやさしきひめ百合のはな　錦織幸子

もゝくさはなへて色なく見ゆるかな
野邊のさ百合のさきそめしより　續木香芽子

あはれ誰か種を蒔きけんかゝる野に
咲きてにほへるひめゆりのはな　續木なほ子

志つの男の利鎌のかれてなつの野に
身をひめ百合のはなそさきける　田中八千代子

夏の野に身をひめ百合のかひもなく
くさかる志つそまつたをりつる　田中千尋子

わかにはにうつしうゑたるゆりのはな
野にみしよりもいろそまされる　原田とめ子

ともかくもあたには見せし我か顔と
はつかしけなるひめゆりのはな　乾嘉代子

夏くさのしけみかなかにゆりのはな
ひともとたかくさきにほふかな　高石登代子

さらぬたに土さへさくるなつの日に　湯淺うの子

うるはしきおのか姿をみせしさや　やつれすにほふひめゆりのはな　香澄梅代子
いろはねて照る日ににほふ姫ゆりの　葉かくれてさくのへのひめゆり　野口さん子
姫ゆりのはなにおきそふつゆみれは　はなのこゝろのうつくしきかな　佐々小琴子
牛ひきてかへるわらはかまくさより　さながらたまのかさしなりけり　佐々有鄰子
夏の野にたれをまつかおもひけゝる　にほひこほるゝひめゆりのはな　徳永廣子
しげりあふ小くさか中になつかしく　ちかやかもとにさけるひめゆり　澤田春子
おく露のめくみをうけてなつかしく　わけてなかむるひめゆりのはな　降田槇子
なつ草のしけみかなかにやさしくも　さきいてにけりひめゆりのはな　尾立さみ子
露くさのしけみかなかにゆかしくも　あまひひらくるひめゆりのはな　村上てゐ子
みとりこきおいきの陰にほころひて　さきそめにけりひめゆりのはな　小山文子
葉かくれて何をかしのふさゆりはな　なつをにをはすひめゆりのはな　三谷起美子
なつくさの茂みかなかにやさしくも　ねならぬいろにつゆをさめつゝ　大溪しげ子
しけりあふむくらか中に咲きにけり　たれをまつらんひめゆりのはな　仁保しま子
庭のもにつゆおもけにも咲きにけり　ひさまちけなるひめゆりのはな　千原素子
　　　　　　いもかつちかふひめゆりのはな

夏くさのしけみかなかに根をしめて　ひさりけたかくにほふひめゆり　安田ふじ子
なつ草のしけみかなかにさきはねて　ひさりけたかきひめゆりのはな　増田磨須子
秋の野の千くさのいろにあらそはぬ　さゆりのはなそけたかゝりける　増田丹眞子
少女子はかくあれかしさひめゆりの　さゝしかほにもうつむきてさく　大竹治子
おほかたの草ははにほはぬなつの野に　ほこりかほなるおにゆりのはな　足立ます子
うなたれてなつ野にさける百合の花　あめのなこりのつゆおもけなり　足立宗子
うつむきて花さく見れはひめ百合の　もの思ふさまもあはれなりけり　足立のぶ子
うなたれて物わひしけにみゆるかな　あめもふるやのひめゆりのはな　足立まつ子
かせふけはかをりこほるゝ川のへに　ひさもさゝけりひめゆりのはな　前橋友子
あためかむ秋野のはなにましらはて　やまのおくにもさくさゆりかな　三輪みさを子
夏の野のしけみかなかにひさもさの　にほひこさなるひめゆりのはな　高橋より子
おくつゆのあはれもそひて姫ゆりの　はなのいろかのなつかしきかな　由井すみ子
秋くさあらそふこさやいさふらん　なつをさかりのひめゆりのはな　由井濱子
秋ににほふをみなへしにもおさらぬは　なつのにさけるひめゆりのはな　白石梅子
夏の野にたへぬたもひやあるならむ　日野敢代子

うちかたふけるひめゆりのはな　濱さみ子

時のまもこゝろおちゐずおほゆるは
つゆおもけなるひめゆりのはな　松山みどり子

ぬけいでてしにほひなりけりなつ草の
しけみのなかのひめゆりのはな　平野静子

谷かけに咲きにほへともゆかしみを
しるひとまれのひめゆりのはな　中川浪江子

あさまたき夏野をゆけはしらつゆの
たまをかさしてさげるひゆめり　下元もと子

夏の野のくさかるわらへこゝろせよ
いまひゆめりのはなさかりなり　二宮はるゐ子

鬼あざみさけるなつのにましりても
にほひゆかしきひめゆりのはな　野中あさ子

しらつゆのたまをかざして夏ののに
たてるもあはれひめゆりのはな　新藤歌子

かたふけるさゆりのはなは夏くさの
しげきおもひのあれはなるらん　笹子茂子

夏くさにましるさゆりはあきの野に
いろあらそはぬいろぞゆかしき　辻本ひさ子

ゆきかひの人もさまりてながむらん
ふりすてかたき野路のひめゆり　名取よし子

八重むくらしげれるやさの紫かきに
ひときは目立つひめ百合のはな　坂田きみ子

姫百合のはな咲き出てゝしつが屋の
にはもきよらに見ねわたるなり　高砂き代子

なつ草のしけみかなかに咲き出てゝ
けはひやさしきひめ百合のはな　高砂菊代子

少女子もかくあれよかしいみしくは
咲けさうへ見ぬひめ百合のはな

ひめゆりのはなは日毎にさきそひて
千とせのいろをあらはしにけり　田中ひろ子

數へ置きしつほみのかすに比ふれは
また咲き添ふるひめゆりのはな　田中なか子

咲きいでゝつゆにこかるゝ色なから
はつかしけなるひめゆりのはな　高屋はき子

つくはねの椽にをさらすさきみちて
にほひゆかしきひめゆりのはな　高屋きく子

八月五日兼題　瀧の畫を見て

天

東京本郷區春木町二丁目二十四番地　三谷起美子

涼しやな、漲り落つる深山の瀧、底の白玉かつ散りて、岩にくだくる亂れ糸、山姫のさらしゝ布か、白糸か、浮世をよそなるこの仙境、夏てふものもあらずかし、是はこれ、名だゝる某氏が手になりたる一幅の妙畫にて、筆の先には露置きて、自ら淸水やしたゝるらむ、あはれ、けはしき山路に杖ひくこともなく、座ながらこの絶景を見る嬉しさ、げに〳〵某氏が筆の力なり、あはれ限りも知られぬ筆力かな。

地

東京本郷區湯島四丁目貳拾番地　邑上詞雅子

仁者は山を樂しみ、智者は水を樂しむとか、われはさる類ひならぬものから、性いと山水を好むをもて、なにがしの畫だくみに、このこゝしき山より、水の瀧ち

流るゝかたをひとひら請ひて、軸物にものし、文机のあたりはなたず掲げれきて、朝夕にながめつゝ、二なき楽しみとはなしつゝ、さるは、わが學びの道いと淺しとも、絶ゆることなくつとめれぞ、この瀧つ瀬の如く、つもりては淵とも成り、歌の山口をたどる身も、息らですゝみ行かぞ、此山の峯の如く、世に高くそびえむこともなからじやはとて、かつはなぐさみ、かつはいましめにもとてなむ、

塵ひちのつもりし山を落ちたきつ
たきもつひには淵とこそ成れ

千葉縣安房郡富浦村原岡　佐久間　八重子

人

景によりて情起り、情を以て、景を思ふとは、馬琴翁、のものせられしが、實に、よくもいはれたるかな。去年は、日光に遊びしが、今年はえならで、此頃の暑さに、え堪へで、佗びぬる折しも、友なる人より、最美しき、末廣に添へて。

昨日今日の暑さは、いといみじく、さながら、燬くらんごとくなるに、御恙もなう、わたらせらるるか、御左右承りたく、此の末廣を、參らするになむ。いさゝかなりと、暑さを凌ぎ給はんよすがにも、なりなぞ、いとうれしくなむ、かしこ。

と、いひれこせたるまゝ、やかて、打ひらき見しに、聞くも、なつかしき夏雲とか云ふ人の筆にて、雫滴るぞかりに、老いたる杉は、天を指し、緑の松は、地にはらぞひて、めづらかなる岩の、龍のごとく、獅のごとく、虎などのごとくなる其の間に、いとひろき白布を、いと高きより、引きたらむやうにて、岩をかみて、碎けしるは、玉を散らすかごとく、あたりは露たちこむるがごとく、ものせられて、見るや否や、去年日光に觀し、布引裡見など思ひ出だされて、鳴り響くらん如く、衣も打ちしめらむが如し。妙技の至す所とは云ひながら、情自ら眞に通じぬ。されぞにや、扇の風もまたで、はやゆくりなく、全身冷えて、扇げはいよゝ身にしみわたりけるこそ、いとおやしけれ。よりて、手もはなたで、人の情をぞ、暑さを凌ぐ、友とはなしぬ。

（以下原稿到着順）

中山　登美子

ちりはかりの曇りだになき夏の日に、今日はさて、所藏の軸ものなさらせる内に、草おひしげる岩ほに、左右は大木高く聳えたる間より、落ちくる瀧の繪は、應擧の筆にて、見るまゝに、おもむきのまさり行き、凉さもおもほえず、けはしき岩ほに、水は流るゝ如く落ちくる瀧つ瀬は聞えねど、自から其音の耳に入るが如し、いさも淸げに、みやびたるに、今の暑も忘れはてゝ、瀧の元に行きし心地ぞする、けに筆のすびの勝しならんかし。

佐野　幾代子

あら金の土もさくちふ今日この頃は、ふみ見る事も物うくて、いたづらに扇のみ打つかひて、早く日もくれなんさ思ふ、かゝる折には、川せうねうなどしてまきらはすもよけれど、近きわたりにさりぬへき流れもな

し、よしありとても、今は家政をつかさどる身にしあれば、そゞろありきもなしがたく、何がな涼しき心やりもがなと、庭になり立ち、池のはちすを、もすそ揚げつゝよきほどにきりもて歸り、花つゝ取り出し、あやしげにさして、床になほし見れども、などてあつさの流れんやはかゝる折しも、我つまのかれてひめおける、一流の瀧よりなれる山水の幅をかけ給ひしに、さすがにも落ちくる水の音もするかとあやしまれ、水際に生ひたる草木の色の涼しげなる、不知々魂はかのゐきこさまよひつゝ、おぼゐずあゝ涼しの聲をもらしぬ、折からのきのわか竹のは、分の音のして、まさに吹き入る風、そゞろにさむきまでになん。

谷口婦佐子

草も木もしをれ行くあつさを、まぎれんとて、友人某の別莊を訪ひけるに、いとひろらかなる座敷にいざなはれぬ。前栽の景色、中川の流れなど、いづれも涼しからざるはなきを、床間にかけたる瀧の繪こそ、げにまきうたれ。立ちそひねたる岸に、老木の松杉とも、千年のみどり深うおひ茂り、そこもしられぬ谷かげの、大き小さき岩ほには、八千代の苔の深くむしたるに、ひとむら立ちなびきたる中空の雲のうちより、落ちくる瀧の白糸の、あるはますぐに落ち、あるは岩にふれてみだれ、そのくだくる玉水は、霰か雪かと覺ゆるばかりにて、袖のあつさもいつしか消ゐて、松の嵐も水の響も、まさしくうちきく心地せられてなん。

西艶子

凡そ、何事にまれ、時に稱ひたるは愛でたく、左あらぬは心行かぬものなりかし。されば、冬は、こちたきが宜しく、夏はよろづ、涼しげなるこそ望ましけれ。此頃、送り來し、月刊の書ひもときつるに、卷の首に挿畫あり、名も知られぬ草木の、茂く生ひ繁れる中に、一きは高く聳ゐたる老杉、さながら、空を指ざせるが如く、鉋もて、けづりたらんが如き巖の上より、たぎり落つる一條の瀑布、あなやとて、かたへを見れば、日頃音に聞きつる、日光華嚴の瀧、と記るされたり。所々岩のはまより、走り出つる數條の水は、彼の、うなゐ等が玩ぶ、サイホン、數多一時に懸けたるも、斯くやあらんと涼しげなり。玉と砕け露と散り、沫ときゐ涙

とたちて、急には流れもあへず、打よどめるさま、實に、滔々と水の音の聞ゐぬか、あやしきまでなり。されば、つくづくとながむるまゝに、いつしか、暑さも、打忘られてなむ。あはれ、能く其の眞を、寫せる妙は、更にも云はず、時に稱ひし、編者が心しらひの程こそ、床しくも又嬉しけれ。

瀧つ瀬のすゞしきさまは畫ながらも
　　しふきにぬるゝこゝちこそすれ

八木沼里子

土さへ裂くてふ、此頃の暑さ忍びて、友がり行けば、ぞが床に掛けられたる、一軸なん、げに時にあひてあるじの心の、奥もしのばれてゆかし、そは二尺にあまる大幅に、○○居士の物したる畫にて、白雲の上かと見ゆる高嶺より、白布なせる大瀧の、物すさまじく落つる様にぞありける。さすが、名たたる居士の筆とて、おのれいつか畫中の人となり、瀧のしぶきにうたれつゝ、見あぐる心地すれば、久方の天のかはなみ、一度に落ち來て、山もとゞろに鳴り渡るかと疑はれ、そゞろに冷き心地のせらるくに、道すがらの暑さゝへ忘れはて、團扇取る手もいつかたゆみぬるは、我が身ながら、いとあやしともあやし。かく其の眞を穿ち人をして實境に立ち入る心地せしむるものなれば、其の親しむ間に、知らず識らず人の品位をたかめしためし少なからず。これげに畫の徳とこそいふべけれ。

船木つぎ子

其の物を見て其人を思ふ。まして、かの名たゝる[illegible]州の瀧の畫を見ては、其の妙なる、ふと見るからに涼しさをおぼゐ、心も身も、ともにさわやかなること、居ながらにして、この佳境に物したるが如く感ぜしむ。このくしきはたらきも、おもへばたゞ一つの筆の力になんありける。世のいくた硯の海にあそべる、其の樂しさいかばかりぞや。

田中りん子

古今美術といへるは、書畫にすぐれたる人の筆にこそあらはれたりけ、れ。ひと日つれくなるまゝに、古人の筆もて見事なる瀧の繪かきたる一

軸を見てけるに、わつか一軸のうちにハいかめしう岩間より落つること、七十丈もあらんか、水のいきほひ、さなから天然の瀧を見るかことく、夏の日のあつさもわするゝはかり、眼にふれて、身も心もすゝしくおほゆるは、術にたけたる人の筆の力にこそ。かほと見事なる絵を見るにつけても、何業にもあれ、世に秀でたらんには、國の寶ともなり、美術の最上と云へは、古人の筆に譲りおかすして、今時も、古人にまさるへき筆力を、世にあらはさん事こそ、ねかはしけれ。

川畑芳子

夏かまへ涼しく、いと清らなる床の上にかゝれる。大幅の瀧の畫は、さなから見る打つけに、廣き殿の内に、おとさへ響き渡れる心地して、さなから、暑さも忘るるばかりのけしきなりける、やならはひより。近く伺へば、岩ほこゝしく、しみたつ木の間より打ちはへし糸のすちく、あさやかに、筆の勢ひ並ならす、圓山應擧の筆きなかされしなりけり、實に雲烟を生すてふ事はこれらをいふならんかと、主の心しらひいとを床しくいともめてたくなん。

東郷常子

かけくらく、木立しけりあふ岩間より、みなきりおつる瀧の上の老木に岩鷲の何かねらひかほろるは、ものすさましけなりけり。その岩けに子をいたきし猿の、おそるく覗き見るさま、心の内の悲しさはいかならんと、おもはるゝ計の。眞景、いと哀れに寫されし筆の跡、游きこそ墨色優にやさしく、凡人の手に及びかたき一軸にこそ。

渡邊まさ子

あふけは高き雲の峰、伏せは苔むす千尋の谷、巨巖を穿て落つるの白糸、巖頭の巖に碎け、玉と散り霧となる其のさま、さなから虎のうそふき、たつの狂ふか如し。奇巖あやおる瀬川のみきはに、蘂茅竹柱の清亭、唐人か幽かに頸差しのそく様、風光いはん方なし。此の一幅の畫、世に名高き瀧和亭ぬしの手になるものとや、實に山は青く水は清くして、實景は見るか如し。嗚呼巧みなる哉。眞金も鎔かす水無月の空、書さい文机近う此れを望めは、心神おのつから冷かになりて、暫時夏の暑さも忘れけり。

山内蕙子

照り續く、此の頃内暑さに、堪へ兼れて、夜もすがら寢もやらす、困じ果てゝ、獨つれくに、賤がふせやに、今宵の暑さを、かこちつつ燈火にむかひ、今しも、繙き初めし、名瀧の栞、くりかへしつゝありしに、其の内の一つ忽ちに、妾の眼を引きたるも理なけ、顧れば、名にしおふ、日本一二に數へらるゝ、養老の瀧の、景色なり、其の筆の巧みなるは、拙なき、筆につくしかたけれとも、思ふに、是れ、眞に名瀧の妙とや云はん、なかむれば、千尺の高きより、落ち來る、瀧筋の白糸は、岩石もくだけん有様にして、麓を流るゝ涼水は、聲有りて恰も動くが如き心地のせらるゝ、左右なかこふ老木は、生ひしげりて、晝も猶、暗からんと察せらるゝ、折しも、さつと、吹き來る涼風は、此の瀧の霧雨にやと怪まれて、初めて心付けば、夏の夜の、明けやすく、時計は早、一時を報じたり、何時迄も限りなければさて、あかぬながめを、惜しみつゝ、いさゝか、感じたるまゝを、拙なき言の葉にうつしてかくなむ。

林久子

むしほしのついてに、古き軸物なと取りいてたる中に、表裝なともいとふるひにたれど、古への名高きたくみの、物したると云ふあり。實に、その名にはちす、布さらしたらんか如き瀧の、雲間より落ちくるが、たきつほのいはに、くたけて散りみたるゝ様など、畫にかきし物としもおもほえすがくし。打見る度に、この瀧のほとりに、物したる心地のせらるゝは、いとあやしき筆の力にぞ有りける、かゝるめでたき畫をかきのこしたる人の、ほまれは、よゝにながれて、たきの音よりも、なほ高く、とゝろきやたるもうへなりや。

錦織さち子

一日亡き父君の秘藏なりし掛物をいたして床にかゝげ、たらちね同胞うち集へて、むかし忍の物語さゝいしめやかなりき。こはそもいづこの畫人のすさびにやとゝへば、母君はいとなかき物語りなし給ひぬ、誠にこ

の書人こそは、音に名高き大雅堂とて、畫かく業にいみじく堪能なりしかば、今にも稀代の寶と殘れる山水月花の丹青は、數奇の人々こぞりて數百金を抛つもあるよしなり、されば筆の運び墨のいろも、いと勢よろしく、涯岸嶮しくして、岩巖は種々の奇しき形をなし、或は老松古杉の枝しげく、其の間より數十丈の瀑布、奔雷の聲すさましきが如く、飛滴四方に散り乱れて落ち下る樣、げに物凄くこれぞこれ龍頭か瀧の眞景なるとかや、其の實景の程も、坐ろにおもひやられて、心から何となら涼しく、今日のあつけさも忘らるゝばかりなりき、

いにしへよりいひ傳ふる高嶺も、其のはじめは僅かに一の土塊に過ぎず、深淵も其のもとは岩のみの苔の雫の一滴なりしとのためしのごとく、抑もこの大雅堂も、其の少かりし時は、其の筆の運びも、さまで美しもあらず、非凡にもあらざりしかど、一度盲人の破れ三味線の誠をきゝてより、思ひをこらし、丹精をつくして、遂に稀代の畫士とはなりしとかや、されば、今の世に至りても、僅か一葉の紙に殘せる遺墨すら、其の名にかゝやく貴きよと、嗚呼この一編の物語りをきゝて、我いたく感しぬ、誠に限りあるは人の命なれど、限りなきは殘す其の身のほまれにこそあれ、心一つに盡しなば、いかなる業もならでやなるへき、いで〳〵今より一入こゝろの基礎を固くして、學びの道の奥ふかく研めて、ついに身をたて名をあげむには、なき父君も露しげき草葉の陰より、又いかにうれしみ給はんなど、樣々に思ひ浮びて、とゝめあへぬはいにしへを忍ぶ秋の涙なりけり。

綠木香芽子

そゞろ歩きの庭に、松風幽に通ひ來て、稍に鳴く蜩の聲も、いと閑けき向ひの小亭に到り見れば、萬づ風雅を旨としつらへたる床の間に、養老の瀧を寫し畫軸を掛けたるが、折柄いと涼しげなるに、一歳有馬なる鼓が瀧にものしつる折の事など思ひ起して、是と其の趣は異なれども、久方の雲間より漲り落つる水の響きは、其の儘にさう〳〵と今も耳底に聽ゆる樣にて、玉と散るしぶきは、小瓶にさしたる撫子の花に、早も飛びかゝるかと見ゆるものから、眞に己れ瀧津瀨の涯におりたちて遊へる心地のせらるは、さすがに名ある人の筆に成りし畫なればなるべし、かゝる道には殊に疎き身にも、深く感じて、心さへにすが〳〵しうなりぬ。されば、(とこしなへに濁らかにして物に滯らぬを我が心とはせむと思ふに比へてんものは)と言はれもうへなりや。畫にかけるを見てだにかゝるを、塵を隔てゝよどみなき瀧津瀨の音に耳をすまし心を洗ひて、朝夕に眺め暮しなば、實に千歲の齡をも保ちなんとぞ思はる、瀧の白糸數ある中にも、殊にめでたきは、此の養老の瀧にぞある。そのかみ畏こきあたりの行幸さへありて、老を養ふてふ名をも給ひしとか聞きつるも、數ならぬ山賤の身にありながら、親に盡し孝の心天に通じて、瀧の音と共に、雲の上まで聞ゆへたる孝の德によりてこそと、ありし昔の孝子の事をさへ思い出づれば、いよ〳〵高く瀨の音の聞ゆるに、怪しみてかたへを見れば、釜の湯のたぎり立つにてぞありける。今までも心付かざりしは、深く畫に感ぜしあまりにやあらんと思へど、我れながらいと淺間しうなん。

廣田とめ子

此の頃の暑さは、けたん術もなく、うちわびぬ折から、是を見よとて、友の許より、一軸の掛物を贈り越しけり。されば、壁にかけ、つら〳〵見るに、前景に、苔むし、かつらのはひまつひたる、千年の松あり、中景に、こゝしき岩根より、千尋もあらん大瀧の漲り落つるうつしゑなりけり。實に勢はげしくて、水泡涌き、霧立ちのぼり、松が枝に露のしたゝる樣より、たとろ〳〵しき響まで、聞ゆるばかりにて、友の心と共に、涼しき心地せられて、

よろつ代にそこひは見えし龍ひそみ
かめもすひへきたきの岩つほ

乾嘉代子

あらがねもとろかすばかりの今日此の頃は、何事も手につかず、かゝるをりには、木影すゞしき小川のほとりになど行かば、いかに心地よきことならんなど、ひとり文机にもたれ居りしが、ふと己が手にする書物を見れば、白糸の布引瀧の畫ありけり、暑けき時は、畫にてもすゞしく思

はるゝものよと、志ばしは暑さをも打ち忘れつゝ、みとれ居りしが、ふしぎやゑがける瀧つ瀬は、我れに　ものを語るが如し、多くの人の中にても、汝れ程あはれのものはなし、罪の塊よりなれる人間にてありながら、其の罪を志らず、我れはけがれなし。どこの何處にも缺點なし、などゝ思ふこそ淺間しけれ、これ我れを見よ、にごりなくよどみなく、落ちては流れ流ては落つるをといと、誇りがに語れるなり、園の木の間をもれくる風に、心づけば、瀧の畫はもとのまゝにて、我れのみひとりいぶかるのみ。

佐々宥鄰子

山はうごくがごとく、空にとゞろくごとく、足引の山にそそり立ち、つぬさはふ岩がねに、天津日にさらせる糸のごとく、立田姫の志づはたたいて、織りいだす布のことみゐて、いとうるはしきは、名だかき美術學校の某先生の筆にうつしいでられし、養老瀧の姿になんありける。是の瀧津瀨は、かみつ世のむかし、ちちのみ父によく仕へて、朝夕まめやかにいそしみしいさをのあらはれて、皇神等の御心もちて、父を養ふべき味酒になしてたまひきとかその故事をおもはかりて、うつしいでられしものならん、みるめさやかに、げにげに養老の名にそむかぬ姿の、瀧の白糸、くりかへしくりかへし、疊紙にかくなん贊詞をしるしつる。

降田槇子

頃日、虫ぼしせんとて、軸どもあまた取出し、かれこれ、打廣ぐる中に、古びたれど瀧のさまを畫けるがありければ、之なん折に合ひてにつかはしきものなるとて。直に床の間にかけかへ見るに、こは古のさる名高き畫たくみの物したるにて、いとも〳〵高き山の頂より、幾千尋の谷底へ、ほとばしり落つる水の勢のすさまじさ、落ちて碎けて、玉とちり、滔々として流るゝ其の有樣、げに眞にせまりて、さながらその景色を見る心地し、身はいつしか深山の奥にたどり入り、かゝる閑靜の境をふむかとうたがはれ、いと堪へがたかりし暑も打ちわすれて、心地すが〳〵しうなりぬ、

畫たくみの妙なる筆のあと見れは
暑さもしはしわすられにけり

げに、夏はかゝる畫こそ、ことにめでたけれ。

柳澤きわ子

打ち見れば、山高く谷深く。つき立ちたるいはほの物さびたる苔に、根をさしたるあやしき小樹のまゝはひゝろごりて、そのさま、鳥の翼をひろげ、たものゝうつくまりいかりたる如きあり、あるは屏風をひらきたる、そががごめきたるおくつ方に、たけの高きはゞの廣き、あまつをとめが布をさらせる瀧の音の烈しきこと、地軸にひゞきて、あらかれの大地は、さくるばかり、さながら目くるめき山動くかと思はれて、そがたゞずまひ、誠に世の常ならず、そのさまは、心も言葉もゐおよばず、暫へんもなく、たゞ肝をひやし、しばしみとれて居れば、畫ながらも、さし出でたる巖にむせび〳〵て、ほとばしる小雨の如くしぶきかゝる心して、いふせき夏の瀧つ心も、そが音に涼しくなれりといふも、なか〳〵におろかなりけり。

小山文子

照る日はためく此頃の暑さ、池の汀草葉さへしをれ〴〵に見ゐて、庭の梢にそよとの風も音づれず、水の上も無得に眺められて、扇持つ手せはしうしばしばはし居しけるが。ふと顧みて、近き頃父君が得給へりし瀧の畫幅の、床にかゝげらしに目とまりぬ、欵識無ければ、何人のたくみなるか、そは知る由なけれど、いと古めかしう、おぼろげの人の筆の跡にはあらじかし、

八重立つ雲の遠山より、茂木にこもる藁屋のたゝずまひ、細きそば路のたど〳〵しさ、近き麓の竹の籬を立出でゝ、はかなき架け橋渡りさしたる人の、空嘯きて、立てるもあり、水の上はるけく、小舟に乘りて、波のまに〳〵讀む書に心を入れたる人の、行く方も知らぬ樣なるもあり、瀧は湖水の眞中に突き出でたる、けはしき岩山の間に懸れり、高さ幾十ひろなるらん、いと廣く落ち來る水の勢すさまじげに、轟々たる響き、眉間をおそふ、心地しつ、さしかはす、深山木は、岩に根ざして飛ぶ白露に、緣滴たり、霧か、烟か、立上る谷の底は濛々

たり、

珍らしう、恐ろしう、そゞろ寒かるべき有様を、此方よりさし出でたる岩の上に、何人ぞ、又二人三人いと笑ましげに、指點顧望して、物思ひ無き風情なり、之や憂世の外にありといふ、やま人の睦みなめりと、見入るゝ程、苦しき心地名残なく、涼しう、すが〳〵しう持ちし扇もいつしか打ちおかれてなん。

三幣　みさを子

木立あたりをさざして、若葉の緑いと涼しく、あやしき巖、こゝかしこになみ立ちて、今にも崩れおちむさましたる。さては、龍のをごるが如く、虎の嘯くが如き岩のはざまより、若楓の枝さしのべて、こなたざまに伏したるなど、なべて山のたゝずまひ、世の常ならずいとをかしきを、中空より漲りおつる瀧つ瀬は、岩かれうちゆすりて、ひた降りにおちくるさま、さながら、天女の布をさらせるか、と疑はるゝに、中らより突きいでたる岩角にせかれて、萬斛の雪を、一時にうち砕きたらむやうに、飛びちりて、瀧つぼのわたりは、水烟におほはれて、その壯觀いはむかたなし。朝な夕なにうち向へば、夏の日の暑さも、忘るゝばかりすが〳〵しうなりもてゆけど、その音のふときこえぬは、いかなるらむ、と怪しめば、是ぞ床の間にかけたる一軸なりける。遠祖より傳はりこしものとて、この年月秘めたけれど、落款さへなければ、誰の筆ともわかれど、木立岩角の墨の色あひ、さては、水の勢など、入神の筆ならでは、いかでかゝらむ。あはれ、この一幅の畫軸よ、いかなる心やこもるらむ、と思ひわたすに、この瀧も、その水上は、いと靜かなる流なりけむを、木根にうちあたり、岩角にふれて、山をも打ちさかむずる勢もて、漲りおつる瀧とはなりけるなめり。同じ水といへども、溜りては淵となり、かゝりては瀑布となる、人はた然らざらむや。等しく人の性をうけて、生れこしものなれば、始のほどは、さばかりのけぢめもなけれど、世のさま、さては身のおき處によりて、大學者ともなり、いみじき機械の發明家ともなり、あるは、朝廷の式微を憤り、國の亂をうれたみ悲しみて、天をも動かし地をもゆするばかりの、大業をおこし、世の人にもたふとばれ、書の上にも匂ふなり。あはれ、世の人、性質あしとて、一事一業も爲さで、自ら己が身を思ひすてゝ、けふの一日を、あだに送る事やはある。

●女鑑歌文月並兼題

八月廿日	歌……朋友	文……山遊び	八月十日〆切
九月五日	歌……海邊月	文……琴を聞く	八月廿五日〆切
九月廿日	歌……茸狩	文……快樂	九月十日〆切
十月五日	歌……雲間雁	文……晩秋田家を訪ふ	九月廿五日〆切
十月廿日	歌……落葉浮水	文……亡友を思ふ	十月十日〆切

歌文原稿は必〆切期日迄に本社に到着する様送らるべし。遅れたるはすべて沒書とす。

◎宛名は國光社女鑑編輯部とせらるべし。

◎投稿歌文中より天地人の三才を撰り、天に該號の女鑑三部。地に仝二部。人に仝一部を贈呈す。又他に秀逸を撰む。

高等化粧料發賣廣告

●高等化粧水　オイデルミン　一箱三個入　金七十五錢

皮膚を艶美滑澤ならしむる高等の化粧料なれば貴婦人令孃方の必需品なり

●改良びん付　コラキン　玉椿　一本　金二十錢

●改良すき油　メラゼリン　柳糸香　一箱三個入　金一圓五十錢

●ふけとり香水　ラウリン　花たちばな　一箱三個入　金一圓八十錢

第一剛き毛髮を柔軟ならしめ且汚れを淨め永く淸潔の狀を保たしむ

●改良水油　オイトリヤシン　花かつら　一箱三個入　金一圓二十錢

在來の香油の如く髮に粘ばりを生ぜず毛髮の光澤を艶美ならしめ脱落を制止し頭皮の疾患を豫防す

●わかとり香油　アネモシン　春風油　一箱三個入　金一圓二十錢

第一頭髮の汚れを容易に梳き去るが故に髮を洗ふの煩勞なし故に病中又は病後に用ひて妙なり

●ひげ油　フロネミン　住の江　一箱三個入　金九十錢

髭毛に使用すれば之れに適當の粘力を生じ隨意の形狀を保たしめ且在來の品と異にして之れを洗去ること容易なり

●改良おしろい　エリアンチン　春の雪　一箱三個入　金二圓十錢

●高等ねりおしろい　一箱三個入　金七十五錢

品質純白緻密にして肌膚に附き易く且佳良の芳香を有し衞生上有益の佳品なり

●うがひ水　エオチン　しのゝめ　一箱三個入　金九十錢

口腔を淸潔にし粘液を去り臭氣を防止す黴菌を撲滅し虫齒を豫防す出血し易き齒齦を固む咽喉加答兒を豫防す一名水はみがきとも云ふ

●福原衞生齒磨石鹼　煉製金廿五錢　粉製金十五錢　同　金十五錢　袋入金三錢

衞生齒磨は口中の黴菌を撲滅するの効あるが故に傳染病豫防として一日も缺くべからざる良品なり

以上各種の化粧料は醫科大學教授理學博士長井長義先生の考案により今般弊堂に於て製造發賣せるものにして其品質の良好其体裁の優美なる眞に高等化粧料の名に背かざるは弊堂の深く信ずる所なり江湖の紳士貴婦人令孃諸君普く御愛用の上高評を賜らん事を願候

東京市京橋區出雲町　(電話本局一四六二番)

内外化粧品問屋資生堂　福原有信

杉谷正隆編

修身百首

全一冊

定價金二十錢
郵税金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の跡を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

日本弘道會長西村茂樹先生著

國民訓　全

三版

定價金貳拾五錢
會員ニ限リ郵稅共拾八錢但郵劵代用一割增

爲替ハ東京市京橋區銀座局振込ノ事○受取人ハ東京市京橋區南鍋町一丁目一番地日本弘道會事務所宛ノ事

道德ニ關スル著書甚多シト雖モ國民ヲ訓誡スル懇切ニシテ且切實ナル本書ノ如キハ未タ之レ有ラサルナリ今先生自叙ノ題言ヲ掲ケテ以テ本書ノ由來ヲ證セン其言ニ曰ク『余壯年ノ時ヨリ貝原益軒先生ノ十訓ヲ讀ミ之ヲ信奉スルコト年アリ余カ今日ニ至ルマテ身ヲ修メ世ニ處シテ大過ナキ者ハ力ヲ先生ノ訓言ニ得ル者甚多シ(中略)然ルニ今日ハ先生ノ時ト時勢大ニ變シ內ニハ　皇室ノ中興アリ外ニハ外國ノ交際アリ先生ノ十訓以外ノ訓誨ヲ要スル者亦少カラス余是ニ於テ自固陋ヲ忘レ先生ノ十訓ニ倣ヒテ國民訓一册ヲ草ス蓋シ國民ヲ訓誨スルコトハ先生ノ時ニハ用ナクシテ今日ハ必用ナレハナリ』云々ト且本書ハ其目ヲ分チテ學問、道德、生業、家倫、國役、交際、選擧、對外ノ八トス以テ本書ノ一班ヲ知ルニ足ル苟モ國民タルノ本分ヲ盡サント欲スルノ士ハ一本ヲ座右ニ備ヘテ熟讀必行ヲ期セラレンコトヲ請フ

右出版忽チ賣切ノ處今般三版出來ニ付御希望ノ氏ハ此際至急御申込相成度代金到達順ニ依リ送本ス且本書ハ學生等ノ賞品ニ最モ適切ナリ

發行所　東京市京橋區南鍋町一丁目一番地　日本弘道會事務所

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		
一冊	十錢	
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	全國無遞送料
十二冊前金(半年分)	壹圓	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十一年八月四日印刷
同　年八月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木亘雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八八）國光社

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第四版

女子處世論 全

定價二十錢 郵税四錢

菊判美本

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徴し女子たるものゝ世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虚構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）
國光社

〔明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可〕

東京國光社印刷部印刷